

2012年度修士論文

〈インターネットに“公共性”は芽生えるか
——「ネット右翼」ブログの事例研究から〉
指導教授:成田康昭

立教大学大学院社会学研究科
社会学専攻 博士前期課程
学生番号 10MB011T
小杉太一郎

要約:本研究では、インターネットにおける公共性の可能性について探るために、まず公共性についての議論を整理し、「市民的公共性」だけが公共性ではなく、さまざまな公共性がありうること。そして公共性を支えるものとして親密性の重要性を確認した。そしてその上で、濱野の議論を参照しながら「アーキテクチャによる公共性」という概念について整理し、そのような考えに対して逆に「アーキテクチャによる公共の分断」ということもありえるということ、サイバー・カスケードやフィルター・バブルといった概念を整理しながら確認した。

そしてそのような理論の整理から、アーキテクチャはむしろ公共性ではなく公共の分断を引き起こすのではないかという仮説を提示し、そしてネット右翼のブログに対する事例研究においても、そのようなアーキテクチャによる分断が観察されたことを確認した。

キーワード:公共性,インターネット,ネット右翼

目

1	問題意識	3
2	理論	7
2.1	公共性とは何か	7
2.1.1	公共性の定義	7
2.1.2	市民的公共圏を支える親密圏	15
2.2	現代における親密圏の困難	22
2.3	インターネット空間における「公共性」	22
2.3.1	メディア化された公共圏	23
2.3.2	インターネット公共圏論	29
2.3.3	アーキテクチャによる公共性	32
2.3.4	アーキテクチャによる分裂	43
2.4	それぞれのアプローチの共通点と相違点	47
2.5	仮説	52
3	先行研究	55
3.1	電子公共圏論	55
3.2	2ちゃんねる・ネット右翼論	57
3.2.1	ネット右翼の来歴	58
3.2.2	ネット右翼の内実	60
3.2.3	ネット右翼の分析	60
3.3	Web2.0論	65
3.4	先行研究の評価	66
3.5	2ちゃんねる・ネット右翼研究についての考察	67
4	調査方法	69
4.1	調査対象の選定基準	69
4.2	調査対象	73
4.3	調査方法	73
5	調査結果	75
5.1	T氏について	75
5.1.1	T氏の運営しているサイト	75
5.1.2	T氏の使用しているSNS	75
5.1.3	T氏の経歴	75
5.2	T氏への聞き取り結果	76
5.2.1	プロフィール	76
5.2.2	マス・メディアについて	77
5.2.3	インターネット上での情報摂取について	79
5.3.4	インターネット上での表現について	85
5.2.5	その他	88
5.2.6	T氏のブログの経緯	89
5.3	H氏について	97
5.3.1	H氏の運営しているサイト	97
5.3.2	H氏の使用しているSNS	97
5.3.3	H氏の経歴	97
5.4	H氏の項目別聞き取り結果	99
5.4.1	プロフィール	99
5.4.2	マス・メディアについて	100
5.4.3	インターネット上での情報摂取について	101
5.4.4	インターネット上での表現について	105
5.4.6	H氏のブログの経緯	110
6	分析・考察	123
6.1	分析	123
6.1.1	T氏の分析	123
6.1.2	H氏の分析	124
6.2	考察	125
6.2.1	不安による右傾化	125
6.2.2	繋がりの社会性	125
6.2.3	過剰な可視化	126
6.3	公共性について	126
7	結論	127
	謝辞	127
	[注]	128
	[文献]	129

1 問題意識

80年代後半から90年代前半にパソコン通信やインターネットが学者やコンピュータ技術者ではない民間人にも開放され、距離や個人の属性(職業, 身分, 容姿, 性別等)に関係なく、しかも今までの手紙や電話などのパーソナルメディアでは考えられないほど多くの人間とコミュニケーションが可能になった時、多くの知識人や学者は、それによって、個々人が平等な立場から討議を行い、そしてその討議から社会的な問題について合意形成を行う、〈市民的公共性〉を持ったコミュニケーションが生まれ、そしてそれに基づく草の根民主主義が生まれるのではないかという希望を抱いた。

たとえば、Howard Rheingold は次のように書いている。

CMC のもつ政治的な意義は、強力なマスメディア上に乗っかっている既成の政治勢力の独占に挑戦し、それによっておそらく市民に基盤をおいた民主主義を再び活性化できる能力にある。商業メディアが豊かなイメージと強烈なサウンドを武器にして市民の間の政治的討論と共存してきたその方法は、何十年にもわたってコミュニケーション技術が民主主義に対して投げかけてきた問題そのものである。メディアの所有者や通信チャンネルの数が限られたエリートのものへと狭められていく一方で、彼らの持つメディアの勢力範囲や影響力が傍聴していくのは、市民に対する複合的な脅威である。果たして次のどちらのシナリオが、民主主義にとってより整合的か、あるいは全体主義をもたらすのだろうか？少数の人たちのみが何百万人もの人々の考えを操作可能なコミュニケーション技術を支配する世界か、あるいは市民一人ひとりが他のすべての市民に対して、直接自分で放送できるような世界か。(Howard 1993=1995: 34-5)

また、電子フロンティア財団¹⁾の創設者 John Perry Barlow が「通信品位法」に反対する目的で書いた「A Declaration of the Independence of Cyberspace (サイバースペース独立宣言)」にはこのような記述がある。

We are creating a world that all may enter without privilege or prejudice accorded by race, economic power, military force, or.

We are creating a world where anyone, anywhere may express his or her beliefs, no matter how singular, without fear of being coerced into silence or conformity.

(略)

Our identities have no bodies, so, unlike you, we cannot obtain order by physical coercion. We believe that from ethics, enlightened self-interest, and the commonweal, our governance will emerge. (Barlow 1995: Conclusion section, para. 9-12)

筆者訳: 私達が(サイバースペース上に)作り上げている世界は、人種や経済力、軍事力、生まれついた身分などに基づく特権や偏見抜きにすべての人々が参加できる世界だ。

私達が作り上げている世界は、誰でもどこでも、沈黙や服従を強制されることなく、例えばそれがどんなに奇異であっても、自分の信じることを表現できる世界だ。

(略)

私達のアイデンティティはあなたたちのように身体を持たない。ゆえに私たちに拷問によって命令をさせることは不可能だ。私達は、私達の統治は倫理と啓発された自己利益、そして公益から生まれると信じている。

しかし、それから十数年経った現在、インターネットというものが政治や、あるいは「社会的な争点」に対しどのように作用するか、例えば、インターネットは人々を結びつけ民主主義を再活性化するものなのか、あるいは人々を分断し、民主主義を破壊するものなのかといったようなことについては、未だ結論は出ていない。

パソコン通信やインターネットが日本において登場した初期においては、インターネットを利用した市民運動や、あるいはインターネット上で地方自治などの公共的問題に関する議論が多数繰り広げられ、そしてそこでは他者の意見に敬意を払いながら、討議によって合意形成をばらおうとする、〈市民的公共性〉をもったコミュニケーションが行われることもあった(詳しくは後述)。しかしインターネットがより多くの人によって利用されるようになるにつれ、そこでは異なる意見を持つ他者を説得し、合意形成を目的とするようなものではないコミュニケーションが、社会的な争点に関わることについても行われるようになっていった。

そのようなコミュニケーションの典型例として、近年話題になっているのが「ネット右翼」という存在である。

2000年代前半ごろからインターネット上では、朝日新聞などの「左派メディア」や、反韓国・中国といった主張を、(殆どの場合)匿名で行う人々が現れ、そのような存在が、ネット上で「右翼的」な主張をしていることから、ネット右翼と呼ばれるようになった。彼らのコミュニケーションの特徴について北田暁大は

2ちゃんねる。序章でも触れたように、1999年にウェブ上に登場し、日本のネット人

口の1割以上がユニークユーザーとして接しているともいわれるこの世界最大の匿名掲示板(の一部)では、左翼と戦うという「憂国の士」たちによって、『朝日新聞』を中心としたマスコミや市民派に対する激しいバッシングが展開され、殺伐としたナショナリスティックな空気が醸し出されている。保守主義という呼び名を与えるにはあまりに拙く、それでいて凡百の保守論客には及びもつかないような非凡な情念に満たされた奇妙な行為空間。その情念はいったいどこから備給されているのだろうか。(北田 2005: 197)

という風に記している。

そして更にそのようなネット右翼の中から、近年においては「在日特権を許さない市民の会」に代表されるような、ネット上にとどまらず街頭に出て、などの差別感情を吐露する人々が現れ始めている。

このような人々が主張していることは、確かに外交政策や福祉政策、マス・メディアのありようといった、私的な範囲の問題ではない公共的な問題についての主張なのだが、しかしその主張を訴える行動は、安田浩一がルポタージュにおいて

授業中であるにもかかわらず拡声器を用いて朝鮮学校や在日コリアンを非難する街宣活動を校門前で繰り広げた。

「朝鮮学校、こんなものはぶっ壊せ！」

「我々はな、他の団体みたいに甘うないぞ！」

「日本に住まわせてやってんねや。おまえら端っこの方歩いとつたらええんや！」

「朝鮮人は我々の先祖の土地を奪った。日本の女の人をレイプして奪ったのがこの土地や！」

「キムチくさいでえ」

「朝鮮人はウンコ食っとけ！」

公園使用に対する抗議というよりも、単なる罵倒に近い。言葉だけを拾い上げればガキの喧嘩レベルである。どんなに言い繕おうとも、人種的偏見と蔑視を感じざるを得ない物言いだ。(安田 2012: 97)

と描き感想を述べている様に、異なる他者の存在を尊重した上で、その他者の説得を試みるようなく公共性)はとてもち得ていないように思える。

しかし、そのようなインターネット空間でのコミュニケーションがある一方で、例えば 2010 年から起きた「アラブの春」と呼ばれる、アラブ諸国での民主化運動では、インターネット上でのコミュニケーション、特に twitter や facebook といったソーシャルメディアといわれるサービスを用いたコミュニケーションが、運動の盛り上がりにより一定の役割を果たしたのではないかと、ということが言われている。

総務省は、平成 24 年度の情報通信白書において、アラブの春でのソーシャルメディア利用についての研究を引用しながら、「このように、「アラブの春」の動きは、ソーシャルメディアと密接な関係にあり、ソーシャルメディア利用者は、表現の自由に対する価値観を強めているといえるだろう」と述べている(総務省 2012: 145)。

また、東浩紀は twitter でのコミュニケーションについて「『ゼロ年代の閉塞感』を打ち破るきわめて強力なツール」であると述べ(東 2010: 169)、濱野智史は CGM における文化の生成力に注目し、この生成力は政治の問題においても適用できるのではないかと考え、匿名のキャラクターを政治家として擁立し、その公約を CGM で協力して作成する「キャラクラシー(characracy: キャラクター民主制)」というアイデアを提案している(宇野・濱野 2012: 164)。

このようなインターネット空間での公共性の問題については、社会学ではこれまでも様々な理論的考察や実証研究があった。だが、インターネット上で社会的な問題についてコミュニケーションを行う当事者自身が、一体社会的な問題に対しどのような態度で扱っているのか、その心性を、インターネット・コミュニケーションの連関の中で具体的に明らかにするようなものではなかった。

そこでこの研究においては、巨視的にインターネット全体を観察したり、あるいはそこで活動する群衆を調査・分析したりするのではなく、そこで活動する個人に焦点を当て、彼らのインターネット利用を、1つのプロセスとして観察することにより、インターネットを使用し社会的な争点についてコミュニケーションを行うということが、その個人にとってどのような意味を持つのか、また、そのコミュニケーションのプロセスはどういった影響を、そのコミュニケーションに参加する個人の心性にもたらすかということ、特定の個人のブログの著述の分析、またその個人へのインタビュー調査から明らかにしていく。

そして、その調査・分析から与えられた知見に基づき、インターネットでのコミュニケーションにおいて、「公共性」が発生し、そしてそれが継続することがありえるのか、また、もしそれがインターネットで生じ得ないとするならば、その原因は何なのかを、明らかにしていく。

2 理論

この章ではまず、Jurgen Habermas の『公共性の構造転換』にもとづいて、この研究で用いる概念である「公共性」「恣意的公共性」「市民的公共性」「公共的」というような概念についてその概念が示すものを整理していき、次にその公共圏で市民的公共性をもったコミュニケーションを行う個人の意識を醸成するのに必要なものとして、基本的信頼と、その基本的信頼を支える親密性について、Anthony Giddens の『親密性の変容』や『モダンティと自己アイデンティティ』を参照しながら整理していく。

そして次に、そのような親密性における近代的信頼の醸成が現代日本やインターネットにおいて難しくなっているのではないかと主張する理論的研究を参照していく。

そして最後に、インターネット空間において公共圏が存在し得るかについて論じた理論的考察について検証していった後、親密圏における基本的信頼が必要不可欠な「市民的公共性」とはまた違う、新しい「インターネット的公共性」が、インターネット空間においては存在するのではないかという議論を参照し、また、そのような公共性は公共性とはいえないとする立場についても参照していく。

そしてこれら理論的研究の示唆から、この研究で明らかにしようとしている、インターネット空間で「公共性」が存在するのではないかという問いに対して、2つの仮説を提示する。

2.1 公共性とは何か

2.1.1 公共性の定義

本論ではインターネット上でのコミュニケーション、特に社会的な問題についてのコミュニケーションについて、そのようにコミュニケーションに「公共性」が存在し得るかということ明らかにすることを目的としている。

しかしそもそも「公共性」とは一体どのようなものなのか？この研究では Habermas の『公共性の構造転換』に基づき、そこで述べられるような公共性を「公共性」と定義することにしよう。よってここではまず、『公共性の構造転換』において、Habermas がどのようなものを公共性としているか見ていくこととする。

公共性とは

Habermas はまず序文で「市民的公共性」「公共性」について次のように述べている。

われわれは「市民的公共性」を、特定時代に固有な類型のカテゴリーとしてとらえる。それは、ヨーロッパの中世盛期に源を発する「市民社会」の独特な発展史から取り外して考えることのできないものであり、理想型として一般化して、任意の歴史情勢の形式的に同一の局面へ置きかえることのできないものなのである。われわれは、17世紀後半のイギリスと18世紀のフランスではじめて精確な意味で「公論」（公共の意見、世論）が人々の話題になったことを示そうとするが、同様にわれわれは「公共性」をも一般に歴史のカテゴリーとして取り扱うのである。（Habermas 1962=1973: 1-2）

ここで重要なのは、Habermas が「市民的公共性」と「公共性」を分けていること、そしてどちらも歴史的カテゴリー、つまり社会の歴史の中で現れてきた概念であるということをしめしているということである。よって、「公共性」の定義について考えるためには、歴史の中で「公共性」という語彙がどのような文脈で使われてきたかを参照していく必要がある。

そこでまず Habermas は、「公共性」という言葉について社会史的に分析していく、そして Habermas は、「公共性」という言葉自体は18世紀に生まれた、「市民社会」を指し示す言葉であるが、しかし「公的なもの」自体は、古代ギリシャに発するカテゴリーであることを明らかにした。

これら（筆者注：「公的」「私的」といったこと）は、もともとギリシャに発し、今日までローマの形態で伝えられてきたカテゴリーなのである。ギリシャの円熟した都市国家では、自由な市民たちに共同な(konion)国家(Polis)の生活圏は、各個人に固有な(idion)家(Oikos)の生活圏から飄然と区分されている。公的生活(bios politikos)は市民の広場(agora)で演ぜられ、決して地域に結びついたものではない。すなわち公共性は、会議や裁判の形をもとらう対話(lexis)と、戦争であれ闘技であれ共同の行為(praxis)とにおいて成立するのである。（Habermas 1962=1973: 13）

よって、とりあえずここではまず「『家』というような私的な領域ではない、裁判や戦争など公的な領域の問題」という風に**公共性**は定義できる。そして、古代ギリシャにおいてそのような公共性は、市民による「対話や共同の行為」によって対処するものとされた。

だがしかし、このような**古代ギリシャ的公共性**がそのまま近代の市民社会に繋がっていったわけではないと、Habermas は述べている。

このギリシャ的公共性のモデルは、ギリシャ人の自己理解とともに様式化されてわれわれに伝承され、ルネッサンス以来、いわゆる古典的なものすべてとともに、独特の規範的な力を帯びて今日にまで及んでいる。その根底にあった社会的形成体は滅びたが、イデオロギー的範疇そのものは、幾多の世紀をこえてその連続性を――すなわち精神的連続性を――維持してきたのである。公的なものと私的なものという2つのカテゴリーは、まず中世全体を通じてローマ法の諸定義の中で伝承され、公共性は公事(res

publica)として伝承されてきた。もともと、これらが法技術的に再び有効に適用されるようになるには、近代国家およびこれから分離された市民社会の生活圏の成立を俟たなければならなかった。(Habermas 1962=1973: 14-5)

つまり「公的な問題」という公共性のカテゴリー自体は中世においても公事として残ったが、それが古代ギリシャ的公共性の様に「対話や共同の行為」によって扱われるものとなるには、近代国家と市民社会の成立をまたなければならなかったのである。

代表的具現の公共性について

では、中世における公共性＝公事とはどのようなものであったか。Habermasは、「公人(publicus)と私人(privatus)とを対照させるローマ法思想は、ヨーロッパの中世を通じて慣用的ではあったが、実効はこれに伴わなかった」(Habermas 1962=1973: 16)と述べ、「公的／私的」というカテゴリー自体は存続したものの、実際は封建領主の私的な支配が公的な領域にも及んでいたとしている。

そしてそのように私的な支配が公的な領域にも及ぶような公共性について、Habermasはこのように説明し、

支配権の公的表現というものが存するからである。この表現的公共性は、公共生活圏という1つの社会的領域として成立しているものではなく、むしろ(この用語を転用してよいなら)いわば社会的地位の徴表なのである。領主の社会的地位はどの位階においても、それ自体としては、「公的」と「私的」という基準からみて中性的なものであるが、この地位の保有者は、この地位を公的に表現する。すなわち彼は、なんらかの程度において「高位」の権力を代表的に具現する者として姿をあらわし、これを表現する。(Habermas 1962=1973: 18)

このような公共性を「代表的具現の公共性」と名付けている。この公共性について Habermas は

代表的具現の公共性の発揮は、人物の諸属性——位章(印紋と武具)、風貌(衣装と髪型)、挙措(会釈と態度)、話法(挨拶と一般に様式化された語法)——要するに「高貴な」態度の厳格な作法に結びついている。(Habermas 1962=1973: 19)

というような形で現れるとしている。つまり、この公共性を保持しているのは領主などの存在に限られ、それは「人民のためにではなく、人民の『前で』具現する」(Habermas 1963-1972: 19)のである。

しかしこのような代表的具現の公共性は、近代市民社会の成立とともに変質していく、市民全体に属する「市民的公共性」として現れることになるのである。

市民的公共性とは

市民的公共性について、Habermas は次のように述べている。

市民的公共性は、さし当り、公衆として集合した私人たちの生活圏として捉えられる。これらの私人(民間人)たちは、当局によって規制されてきた公共性を、まもなく公権力そのものに対抗して自己のものとして主張する。(Habermas 1962=1973: 46)

そして、このような市民的公共性について Habermas は、まず文芸的な領域において文芸的公共性として発生し、そしてそこから政治的な領域にも市民的公共性を求める、政治的公共性へと変化したと述べている。

公権力の公共性が私人たちの政治的論議の的になり、それが結局は公権力から全く奪取されるようになる前にも、公権力の公共性の傘の下で非政治的形態の公共性が形成される。これが、政治的機能を持つ公共性の前駆をなす文芸的公共性なのである。それはまだ、それ自身の内部で旋回する公共の論議の練習場であり、これは民間人が彼らの新しい私的存在の直接の経験についておこなう自己啓蒙の過程であった。(Habermas 1962=1973: 48)

そして、このような文芸的公共性が、フランスにおいてはサロンで、イギリスにおいては喫茶店(coffee-house)で、ドイツにおいては夕食会で、芸術や文学の作品についての討論という形で現れ、そこでは、市民的公共性において重要である3つの制度的基準

- 社会的地位を度外視するような社交様式
- それまで問題化することなく通用していた領域の問題化
- 公衆の原理的な非閉鎖性

が要求されると、Habermas は述べている(Habermas 1962=1973: 50-8)。

「社会的地位を度外視するような社交様式」とはつまり、そのサロンや喫茶店といった討論の場での発言は、その発言をした人物の経済的地位や権威に関係なく受け取られるということである。

次に「それまで問題化することなく通用していた領域の問題化」とは、議論の対象にするも

のを教会や宮廷などが独占的に決めるのではなく、その議論に参加する全ての人間が、どんな議題でも提示できるということである。

そして最後に、「公衆の原理的な非閉鎖性」とは、どんな人でもそのサロンや喫茶店といった討論に参加できるということである。

これらの基準は、それぞれ「立場」「議題」「参加」という点において、万人に対する「公開性」を求めるものであるとまとめることが出来る。そしてこの公開性が、市民的公共性が政治的領域において発揮される政治的公共性においても重要となった。

「公共性」（「公開性」）という複合体は、大体において「人間と市民の権利宣言」（1789年8月26日）を踏襲する1971年の憲法の第11条において、つぎのように補足される。「思想と意見の自由な伝達は、人間のもっとも貴重な権利のひとつである。したがって、何びとも、法によって定められた場合におけるこの自由の乱用の責任を別として、自由に語り、書き、印刷することができる」。(Habermas 1962=1973: 101)

そしてこのような公開性は現代における「拡張された市民的公共性」においても重要であるというのが、Habermasの主張なのである。

造成された公共性とは

しかしこのような市民的公共性は、近代が発展していく中で徐々に衰退し変質していった。資本集中により独占的な大企業資本家が登場していく中で、市民的公共性の舞台となる市民社会は放棄されていったという風にHabermasは述べている。

こうした事態の推移する中で、市民社会は権力の面で中立化された圏であるという外観をあとかたもなく放棄しなくてはならなかった。この自由主義的モデルは、実は小規模商品経済のモデルであって、個々の商品所有者たちの横の交換関係のみを念頭において作られていた。自由競争と独立価格が守られるならば、何びとも他人を自由に支配できるほどの権力を取得しえないはずだと説かれていたのである。ところがこの期待は外れて、不完全競争と従属価格のもとで、社会的権力は特定私人の手中に集中していく。(Habermas 1962=1973: 200)

そして政治的公共性の場は次第に、公開性に基づく討論の場から、階級闘争の場へと変質していったのである。

一方では、商品交易という私的生活圏において大勢力が集結し、他方では、公共性が国家機関として確立されて万人の参加が制度的に約束されたために、経済的に弱い立場にある人々のうちに、市場で優位である者に対して政治的な手段で対抗しようとする傾向がたつよまった(Habermas 1962=1973: 201)

そしてその過程で、新聞は討論における主張を行うメディアから私利を求めるとのメディアへと変質していき、ブルジョワ市民同士の集まりに過ぎなかった名士政党は階級利益を代表する階級政党となっていった。(Habermas 1962=1973: 270-1)。また更に文芸的公共性においても、階級対立により人々が自分の身分を気にせず議論できるようなサロンや喫茶店は失われていくことにより(Habermas 1962=1973: 219)、文化について議論する場がなくなり、文化は「孤立化された受容行為」(Habermas 1962=1973: 217)によって消費される、「大衆文化」(Habermas 1962=1973: 221)へと変質していくのである。「すなわち文芸的公共性によって、文化消費という擬似公共的もしくは擬似私的な生活圏が出現する」(Habermas 1962=1973: 216)のである。

このような市民的公共性を崩壊させていく様々な変化を総称して、Habermasは「『**社会的なもの**』の圏」(Habermas 1962=1973: 197)であると分析している。

こうしてやや長期的にみれば、社会圏への国家的介入に対抗して、公的機能を民間団体へ委譲するという傾向も生じてくる。そして公的権威が私的領域に拡張される過程には、その反面として、国家権力が社会権力によって代行されるという反対方向の過程も結びついているのである。このように社会の国有化が進むと共に国家の社会化が貫徹するという弁証法こそが、市民的公共性の土台を、一一国家と社会の分離を一一次第に取り崩していくものなのである。この両者の間で、一一いわば両者の「中間から」一一成立してくる社会圏は、再政治化された社会圏であって、これを「公的」とか「私的」とかいう区別の見地のみからとらえることは、もはやできなくなっている。この社会圏は、公衆として集合した私人たちが自分たちの交渉の一般問題を規制していたあの私的領域の特殊部分、すなわち自由主義的形態における公共圏をも、解体させていく。(Habermas 1962=1973: 198)

今日では合理的討論の代りに、競合する利害の示威行為が現われる。公共の論議において達成される合意は鳴りをひそめて、非公共的に戦いとられ、或いは力づくで貫徹された妥協に席をゆずる。(Habermas 1962=1973: 235)

諸政党は意思形成のための道具であるが、公衆の手中にある道具ではなく、政党機

構を左右しうるの手中にある道具なのである。(Habermas 1962=1973: 272)

つまり、市民的公共性が存在する市民社会においては、私的領域に属する私人が個別に公的領域における問題について、「立場」「議題」「参加」という3点において公開性を持って討議にあたっていたが、階級対立により私的領域にも公的領域の政治が介入するように求められるようになり、公的領域とも私的領域とも言えない社会圏において、公開性なき利害対立とその調停が行われるようになり、それが、市民的公共性を持つ公共圏で行われてきた議論の役割を代替するようになるということである。

批判的公共性について

しかし、そのように公共性における問題の大部分が社会圏において処理されるようになって、公共性がまったく消滅してしまっただけではない。議会に代表されるように、未だ公共性が公共性として問題となる場所は存在しているからだ。

だが、そのような公共性の内容も、市民的公共性からは大きく変質してしまっていると、Habermas は述べている。

議会そのものも、これに応じて、真偽機構から示威機構へと変化した。というのは、密室で取引された決議を議会で承認することは、形式的規定の条件をみただけではなく、外部にたいして政党の意思を示唆するのに役立つからである。

(中略)

かつて討論の公開性は、議会以前の討論と議会内の討論との連続性を——公共性とその中で形成される公論との統一性を——保証し、要するに、審議する議会は公衆の中枢ではあるがどこまでも公衆全体の1部であることを保証する建前を持ち、そして暫くの間は実際にこれを保証してきたのであるが、その公開性は今日では、そのようなことをしないし、またとてもそのようなことができない。なぜなら、公共性は、院内でも院外でも、構造的転化をとげたからである。

(中略)

拡張された公共性を前にしても、討論そのものもショートして定型化される。公開性は、その示威機能のために、批判機能を失う。論理さえもシンボルにすりかえられ、これに対してはもう論理によってではなく、人物確認によって答えるよりほかはない。(Habermas 1962=1973: 274-5)

つまり、市民的公共性は、「立場」「議題」「参加」という3点において万人に対する公開性を保っていなければ市民的公共性といえないが、現代の議会における公共性は、その3点のうち「立場」「議題」の2点において公開性を保っておらず、批判的議論の場と言うよりは、政党の勢力の示威の場となっている。そこでは、形式的には公的な問題について議論をしているという形になっているが、しかし実際は、そこでそれぞれの政党の立場に基づいて発言をすることが真の目的となっているのである。そしてそこでそれぞれの政党は、議会で主張をすることを人民に示すことにより、「私達のみが公共性に携わる資格をもっている」と示しているのだと、Habermas は述べているのである。

このような公共性は、「人民のためにはではなく、人民の『前で』具現する」ものであり、中世における代表具現的公共性に近いといえ、これを Habermas は「再封建化された市民的公共性」(Habermas 1962=1973: 269)という風に説明している。

そして、このような公共性は、示威により人民に「公共性を持つのは我々だ」という風な虚偽意識を持たせるもの(Habermas 1962=1973: 284)であり、その「公共性は『作り出される』必要がある。それはおのずから『存在する』ものではない」。(Habermas 1962=1973: 269)のであって、Habermas はそのような公共性を「**造成された公共性**」(Habermas 1962=1973: 279)と呼んでいる。

しかし Habermas はそのような公共性には否定的である。なぜならそこでは、市民的公共性に基づいた議論によって発生した公論が取り入れられるのではなく、ただの意見が取り入れられているだけだからである。

公共性は、それ自身の理念によれば、その中で原理的に各人が同じ機会を持って各自の好みや願望や主義を申告する権利をもったというだけでは、民主主義の原理となつたのではない。このようなものは、ただの意見(opinions)にすぎない。公共性は、これらの個人的異見が公衆の論議の中で公共の意見、公論(opinion publique)として熟成することができたかぎりでのみ、実現されえたのである。(Habermas 1962=1973: 288)

ここにおける公論とは「公共的な意見」であり、ただの意見は「非公共的な意見」となる。つまり、Habermas にとって**公共的**とは、「市民的公共性に基づくものである」という風に規定されているのである。

そして Habermas は、このような市民的公共性やそれに基づく公共的な意見(公論)を公共性に復活させるために、まず社会的給付を与えることによって階級対立を和らげるとともに、議会を含めた国家の諸機関だけでなく、政党など国家と交渉するすべての組織へ公開性を要請することにより、政治的公共性を社会圏に広げていくことが必要であり(Habermas 1963=1962: 300)、そしてそれにより、造成された公共性に対抗して**批判的公共性**というも

のが形成されると主張している。(Habermas 1962=1973: 332-3).

そしてそこでは、古代ギリシャ的な意味の公共性は修正を迫られる。なぜなら古代ギリシャ的な公共性は、最初に述べたように「『家』というような私的な領域ではない、裁判や戦争など公的な領域の問題」だったが、現代における公共性においては、公的な領域に加えて、公的な要素と私的な要素が混在する、社会的な領域の問題も公共性における問題に含まれるからである。

まとめ

Habermas における公共性には一体どのようなものがあるか、これまでの記述を元に表を作成した。

表1 Habermas における公共性

古代ギリシャ的公共性……公的領域の問題を解決する			
代表的具現の公共性	領主などの人間が「高貴」さを具現することにより、公的領域を支配し統治する公共性		
市民的公共性	私人同士が公開性ある討議によって公的領域を統治する公共性	文芸的公共性	芸術や文化などの領域での公共性
		政治的公共性	政治の領域での公共性
現代の公共性……公的領域と、公私が混ざり合った社会的領域の問題を解決する			
造成された公共性	非公共的意見が対立と利害調整をし、それを公的領域で示威する公共性		
批判的公共性	あらゆる社会的領域において、公共的意見に基づく公開性ある討議をすることにより統治をしようとする公共性		

重要な点は3点ある。

まず1点目は、Habermas は公共性を固定的なものとして捉えず、一般的なカテゴリーとしてとらえているということである。それぞれの時代に代表具現的公共性であったり、市民的公共性であったり、造成された公共性だったりがあったりするのであり、公共性は様々な形態がありえるのだ。

2点目に、しかしそうはいつでも公共性の定義というものも存在する。現代における公共性についてのそれは「公的な領域、及び、公的な領域と私的な領域が混在する社会的領域に属する問題に対処しようとするもの」ということになる。

そして3点目に、例えば市民的公共性に則らない、非公共的な意見によるものでも、その意見に基づく公共性はあるということである。もちろん Habermas はそのような公共性を望ましいものではないのだが、しかしそれでもそのような公共性もまた、公共性として存在しうるのである。

2.1.2 市民的公共圏を支える親密圏

ここまで公共性ということについて Habermas の議論を整理してきたが、しかし公共性はそれ単体のみで成立するわけではない。それを担うのが封建領主であれ、ブルジョワ市民であれ、大衆であれ、担い手が存在する。そして、特に市民的公共圏に関しては、それを担うブルジョワ市民の親密圏が形成されたことが、市民的公共性の成立に極めて大きな役割を果たし、そしてその親密圏が周縁化していったことが、市民的公共性を衰退させた大きな要因であるというように、Habermas は述べている。

しかしその一方で、一旦衰退していった市民的公共性を再生させるにあたって、いかなる公共性を立ち上げるかについてはある程度詳述に述べているが、その再生された市民的公共性を支える個人の親密圏がどのようなものなのかについては、Habermas はあまり述べていない。

そこで本論文では、Giddens の親密性についての議論を参照していくことにより、後期近代において市民的公共性を支えうる親密性や、それに支えられる自己のあり様がいかなるものでありえるか、整理していく。

親密圏とは

Habermas は市民的公共性を担う公衆に対してこのように分析している。

この公共性において公衆として交渉しあうのは私人である
(中略)

公共的論議の自己理解の特色は、小家族の親密な生活圏において公衆に関心を持つ主体性から由来する私的経験にみちびかれていることにある。この小家族的な親密圏は、私的存在の——みち足りた自由な内面性という近代的意味における私的存在の——歴史的の水源である。(Habermas 1962=1973: 47)

つまり、Habermas は小家族的な親密圏こそが、市民的公共性において公共的論議を行う市民(それはブルジョワ男性であり、家長であり、女性などは除外されている)の主体の内面を形成すると述べているのである。では、そこにおける小家族的な親密圏とはどのようなものか、Habermas はまずそのような小家族的な親密圏を持つ市民が商品所有者として、資本を持ち、

自身で商品を市場で取引するものであることに注目する。

じっさい、或る意味では、商品所有者は自分を自律的なものとして理解することが出来る。彼らは、国家的な指令や管理から解放されるに依りて、利潤の原理にしたがって自由に決断することができる。この点では何びとに服従する義理もなく、一見市場に内在する合理性に従って機能する匿名の法則のみに服従している。これらの法則は、公正な交換というイデオロギー的保証を帯び、一般に正義によって暴力を克服しようという建前をもっている。このように財産処分権にもとづき、交換関係への参加においてじっさい或る程度まで実現されている私人の自律は、このようなものとして如実に現れざるをえない。市場における財産所有者たちの自立性には、家族における人間たちの自己顕示が対応する。この人間たちの、一見したところ社会的強制から解放された親密さは、競争において行使される私的自由の真実さの証印なのである。(Habermas 1962=1973: 67)

つまり、商品所有者として自律と自由を得ていることにより、その私的自由が小家族的な親密圏にも及ぼされるのである。そして、そのような私的自由に基づき人格形成が行われることが、市民的公共性を担う人格を形成すると、Habermas は述べている。

この家族は、自由意志にもとづき、自由な個々人によって創始され、強制なしに維持されているように見える。それは2人の男女の持続的な愛の共同体にもとづいているように見える。それは、教養ある人格性の特徴をなすすべての性能の非打算的な発展を保証するように見える。自由意志、愛の共同体、教養——この3つの契機は、人間性そのものに本具のものであると説かれて、まことにその絶対的地位をはじめて形成するフマニテート(人間形成)の概念へ結集する。(Habermas 1962=1973: 67)

このような愛にのみ基づく自由な共同体を親密圏の内部で維持することにより、自由な議論を行いうる教養ある主体が形成されるのである。

だが、市民的公共性が階級対立の登場により衰退していったのと軌を一にして、このような小家族的な親密圏は変質し、周辺的なものとなっていったと、Habermas は論じている。

国家と社会が浸透し合っていくにつれて、小家族の制度は社会の再生産過程との嫌韓から解き放されていく。私生活圏の私的生活が失われていくにつれて、かつては私生活圏全般の中心であった親密圏は、いわばその周辺におしやられる。(Habermas 1962=1973: 207-8)

このような変化の一端として、まずかつては小家族的な親密圏の内部で行われる私的なものであった労働が、社会的なものになっていったと、Habermas は述べている。

「労働の世界」は——従業員や労働者の意識においても、もっと広範な職権をもつ人々の意識においても——私的領域と公的領域の独自の次元の圏として確立されるようになっていく。もちろんこの発展は、生産手段の所有者の自律を形式的に維持しながら、実質的にはその私的性格を奪うという過程にももとづいている。(Habermas 1962=1973: 208)

つまり、大企業資本家と労働者に階級が分かれていくにつれて、労働者はもちろんその労働において自由と自律をなくしていき、そして資本家においてももはや自らの資本を自由に行使することはできなくなるのである。

そして更に、子どもの教育という部分も、私的な親密圏から切り離されていくと、Habermas は述べている。

すなわち家族は資本形成の機能を失うとともに、次第に養育と教育、保護と補導の基本的な伝統と人生案内の機能をもうようになる。家庭は市民的家庭では私生活の内奥とみなされていた領域における躰けの機能をもっていく。してみれば、この私的な留保領域である家庭も、その地位の公的保証によって、或る意味で私的性格を奪われるわけである。(Habermas 1962=1973: 211)

家族がその経済的任務から解除されるにともなって、これと相補的に、人格的内面化の力もわかれた。

(中略)

いまや個々の家族成員はますます高度に、家庭外の権威によって——社会によって——直接に社会化されるようになる。ここでは市民的家庭が公式には学校へ、非公式には家の外の匿名勢力へ、明確に教育的な機能を移譲せざるを得なくなったことを指摘するにとどめたい。(Habermas 1962=1973: 212)

労働と教育という2つの側面が社会圏に奪われることにより、親密圏は市民的公共性を担う人格を形成することができなくなり、その代わりに討論を好まず、ただ文化を消費するよ

うな大衆を生み出してくるようになったと、Habermas は述べている。

かつては、文化的に論議する公衆のコミュニケーションは、家庭の私生活圏の密室でおこなわれる読書に依存していたのである。これに反して、文化を消費する公衆のレジャー活動は、そもそも群居的な雰囲気できとなまれ、しかも討論へ持ち越される必要はない。(Habermas 1962=1973: 219)

つまり、Habermas においては、**現代の親密圏**はもはや人格に影響を与える場とは成り得ず、ただ人々が大衆文化を消費するだけの場所と化しているということなのである。簡単に言えば、現代の親密圏とは、せいぜい1日の仕事や学業が終わった後のリビングルームで一緒にテレビを見る、その程度の場所ではないということだろう。

現代の親密圏・親密性について

しかし、もし現代の親密圏がそのような場所であるとするならば、一体どのようにしてそこから Habermas の提示する批判的公共性を担い上げる個人が登場しうるのだろうか。この問題について Habermas は特に述べていない。

そこでここでは Giddens の親密性についての議論を参照することにより、現代の親密圏において市民的公共性を持ち得る自己がどのように掲載されうるか考察していくことにする。Giddens はまず、Habermas が市民的公共性として掲げているものを、「自由で、対等な関係」に基づく民主制としている

公開討論の場を設けなければならない。民主制とは、討議、つまり、意思決定を(そのなかで最も重要なのが政治的意思決定であるが)おこなう他のさまざまな手段に比べ、「より好ましい議論による説得力」を生み出すための機会を意味している。(Giddens 1992=1995: 274)。

そしてまた、Habermas と同じように、個人が親密な関係の中で人々が自立した個人として自己を形成することが、民主制を支えるとしている。

親密な関係性が進展する可能性は、民主制の前途に期待できることを意味している。(Giddens 1992=1995: 278)

自己の自立は、民主的秩序に固有な他者の有す能力や才能に例の経緯を払うことを可能にする。(Giddens 1992=1995: 278)

ただしここで、Giddens は Habermas のように親密圏という言葉ではなく親密な関係性、つまり**親密性**という言葉を用いている。親密圏という場合には、その関係が築かれる場所を指し、Habermas の場合はそれを小家族に限定していたが、親密性という言葉を用いる場合、場所に関係なく、親密な関係そのものの性質が問題とされる。なぜ Giddens が親密性という言葉を用いるかといえば、それはむしろ、その関係がある場所に拘束されない形で、他者と親密な関係を結ぶことこそが、民主制を支える親密な関係性には重要であるからと、Giddens は考えているからである。このような親密な関係性を、Giddens は**純粋な関係性**と呼んでいる。

相手との緊密な、変わらない情緒的きずなを意味する「関係性」という言葉は、比較的近年になって一般に使われるようになったにすぎない。ここでの問題点を明確にするため、こうした現象を指称するのに《純粋な関係性》という用語を、私は導入していきたい。純粋な関係性とは、性的純潔さとは無関係であり、また、たんなる記述概念ではなくむしろ限定概念である。純粋な関係性とは、社会関係を結ぶというそれだけの目的のために、つまり、互いに相手との結びつきを保つことから得られるもののために社会関係を結び、さらに互いに相手との結びつきを保つことから得られるもののために社会関係を結び、さらに互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足感を互いの関係が生みだしていると見なす限りにおいて関係を続けていく、そうした状況を指している。(Giddens 1992=1995: 90)

このような純粋な関係性は、例えば血縁といった外的な基準によらない、関係への「コミットメント」によってのみつなぎ留められると、Giddens は述べている。

純粋な関係性の文脈では、信頼は相互の開示過程によってのみもたらされる。別言すれば、信頼はもはや定義上、関係それ自身の外部にある基準——血縁、社会的責務あるいは伝統的義務などの基準——につなぎ留められることはないのである。

(中略)

純粋な関係性は「コミットメント」を前提とする。(Giddens 1991=2005)

純粋な関係性はそのようなものであるが故に、小家族的親密圏だけでなく「異性愛婚姻以外の他のセクシュアリティの脈絡においても出現している」。(Giddens 1992=1995: 90) 故に現代における親密な関係の性質は、その場所を指し示す親密圏ということではなく、性質を指し示す親密性という言葉で示されるのである。そして Giddens は、Habermas が「自由な

個々人によって創始され、強制なしに維持されているように見える。それは2人の男女の持続的な愛の共同体」(Habermas 1962=1973: 67)と呼んだものを、純粋な関係性と呼び、そしてそのような親密性は、現代においても存在するとしている。Habermasは労働と教育の分野が社会圏に移譲されていったことから、親密圏が存在しなくなったとするが、Giddensによれば、逆にそのような余分な機能が親密性からなくなったことにより、純粋にコミットメントにおいてのみつなぎ留められる純粋な関係性が、より強く親密性に現れてきたという様に見ている。

親密性における困難

だがその一方でGiddensは、その様に親密性が純粋な関係性にのみつなぎ留められることになったことは、一方で後期近代の親密性を近代の親密圏より不安定なものにしているとも述べている。

純粋な関係性は、ハイ・モダニティの他の多くの側面と同様に、諸刃の剣である。それは自発的なコミットメントに基づいた信頼や緊密な親密性を育てる機会を与えてくれる。それが達成され相対的に安定する場合には、基本的信頼と養育者への信頼感が強く結合しているがゆえに、そのような信頼は心理的に安定をもたらすものにある。

(中略)

しかし純粋な関係性や、それを含む親密な関係のネクサスは、自己の統一感にとっての莫大な負荷を生み出す。関係性が外的基準を欠いているかぎり、それは「信実性」によってのみ道徳的に利用可能になる。信実性を持つ人物とは、おのれを知っており、その知識を言説的に、あるいは行動の領域で他者にあかすことのできるような者である。他者と信実の関係にあるということは、道徳的な支えの主要な源となる。それは、ここでも信実性が基本的信頼と潜在的に結びついているからである。しかし純粋な関係性は、外的な道徳的基準を欠いているがゆえに、運命決定的なときや人生の他の大きな局面においては安心の源泉としては脆弱なものである。(Giddens 1991=2005: 211-2)

基本的信頼とは、「早期幼児期の経験から得られる他者の継続性と対象-世界に対する信頼」(Giddens 1991=2005: 277)である。つまり純粋な関係性は、それが幼少期に培われた他者や世界への安心と結びついて理解されるが故に、ルーティン的な日常のコミュニケーションにおいては、そこで他者に敬意をはらい公共的な態度をとる道徳的源泉となり、またそういったコミュニケーションの積み重ねの中で再帰的に確認される。しかし日常世界や他者への安心を脅かすような、非ルーティン的な場面(運命決定的なときや人生の大きな局面)においては、簡単に崩壊し、道徳的厳選となり得ないものであるということである。後期近代以前の小家族的な親密圏ならば、労働や家父長の権威といった外的基準によって、公共的であることを強制されていたが、後期近代における親密性においては、一旦公共的である態度が再帰的に形成されないようになってしまうと、途端に崩壊してしまうのである。

そして、一旦そのような純粋な関係性による心理的な安定が崩れると、その安定が崩れた自己は世界に対し緊張と困難を感じるようになる。そしてGiddensは、その緊張と困難を

- 統合対断片化
- 無力さ対専有
- 権威対不確実性
- 個人化された経験対商品化された経験

の4つのジレンマとして説明している。(Giddens 1991=2005: 214-228)

「統合対断片化」とは、自己のアイデンティティをどの程度多様性も維持した上で統合された1つのアイデンティティとして持ちうるかというジレンマであり、断片的になりすぎると「権威主義的同調」を引き起こし、その時々周囲の環境に順応するだけになってしまうが、一方で統合されすぎると周囲の環境の変化をに一切適応できない頑固な伝統主義者になってしまうと述べている。

次に「無力さ対専有」とは、世界に対し自分がどの程度力を行行使し変化を与えられるかという認識に関するジレンマであり、自己を完全に無力な存在だと認識してしまうと、世界に対し抵抗するようなことができなくなる一方で、自己が完全に世界を制御可能であると考えてしまうと、全能感という幻想に基づいて行動するようになってしまい、それが達成されないときに、今度は自己を完全に無力な存在だと考えるようになってしまうとしている。

3つ目の「権威対不確実性」とは、社会に存在する権威に対して自己がそれにどの程度従うかについてのジレンマであり、権威に従い過ぎると、ひとつの権威にのみ従う、宗教原理主義などに大兵される独断的権威主義にいたるとされ、一方で権威を拒否しすぎると、普遍的な懷疑によって身動きがとれなくなってしまうとする。

最後の「個人化された経験対商品化された経験」とは、自己のアイデンティティとしてどの程度まで資本主義市場で取引されるようなものを受け入れるかについてのジレンマである。資本主義市場で取引されるようなものを受け入れ過ぎると、外見だけを重視したりするような消費主義的な自己に陥りやすいが、一方で資本主義市場で取引されるようなものを排除しすぎると、他者との順応ができなくなり、孤立してしまうのである。

このような4つのジレンマとそれに基づく8つの困難は、いずれもHabermasが造成された公共性に見出したような、非公共的な意見をもつ自己であるといえるだろう。つまり、ここで挙げられているような病理的な自己を、Habermasは現代における親密圏においては標準的

なものとして捉えているのである。しかしそれに対し Giddens は、これはあくまで極端な場合であり、基本的信頼が幼少期にきちんと確保され、そしてそれがうまく再帰的に確認されれば、市民的公共性を担う自己が、現代における親密性の中で形成されうると考えている、ということである。

まとめ

Habermas の親密圏に関わる議論と Giddens の親密性に対する議論を元に、親密性のあり様について表にまとめた。

表2 親密性のありようと公共性の対応関係

近代	小家族的親密圏	労働や教育などに基礎づけられた「2人の男女の持続的な愛の共同体」
		市民的公共性の基盤となる
後期近代	親密な関係性	コミットメントのみによってつなぎ留められる純粋な関係性
		批判的公共性(現代における市民的公共性)の基盤となる

ここで重要なのは、親密性とそこで形成される自己がどのようなものであるかが、公共性がどのようなものであるかに対応しているということである。それぞれの公共性にはそれぞれの異なる親密性があり、親密性のあり様と公共性のあり様は緊密に対応している。

より具体的に言うならば、市民的公共性を形成しようとするならば、それに対応した「純粋な関係性」を持つ親密性によって自己が形成されている担い手が、必要になるのである。

2.2 現代における親密圏の困難

しかしそのような親密性における心理的安定が現代日本においては危機に瀕しているという議論がある。現代日本における親密圏の不安定さが、人々から存在論的安心を奪い、その結果として市民的公共性を支える親密性が支えられなくなっているのではないかということだ。

例えば櫻村愛子は、ポスト近代において全てのものが再帰的になるなかで、自分の存在の根拠を他人に求めることができなくなり、自分の存在の根拠が揺らいでいく。その根拠が「伝統」や「ナショナリズム」に求められているというような議論をしている(櫻村 2007)。

また高原基彰は、近代の社会モデルが瓦解し社会が流動化していく中で、人々の中に、将来の先行きが不透明であるという不安が高まっていることを指摘している。

そして栗原は、このような自らに対する存在論的不安が、人々を追い詰めるなかで、Habermas が論じたような公論の前提条件である生存に関する訴えがなされるようになっていのではないかと考察している。(栗原 2011: 245)

いずれにせよ、市民的公共性はその前提条件として独立し、その自律性が保証されているような個人を前提としているが、新自由主義の台頭といった経済構造の変化などによりそのような個人が存在しえなくなっている中で、市民的公共性を現代日本で実現するのは不可能ではないかという議論が、多く存在するのである。

2.3 インターネット空間における「公共性」

この節では、まず Habermas と John Thompson の議論を参照しながら、マス・メディア上での「メディア化された公共圏」においてどのような公共性が存在し得たのか、それがいかに公開性を持つものだったのかについて整理していく。

次にインターネット上において市民的公共性が存在し得たかについて、吉田純のインターネット公共圏論といった考え方を参照し、インターネット初期には市民的公共性が存在していた一方で、そのような市民的公共性は現在のインターネットにおいては不可能ではないかという議論も紹介する。

そしてインターネット上に市民的公共性が存在し得ないことを前提として、そのような市民的公共性とは違う形の、「アーキテクチャによる公共性」が日本のインターネットには存在しているという濱野智史の議論を整理し、そのような公共性では市民的公共性の様に特定の親密性によらずとも、「操作ログ的リアリズム」に基づくその新しい「アーキテクチャによる公共性」を担いうる自己が存在できることを示す。

そして最後に、しかしそのような公共性は「公共性」足り得ないのではないかという Cass Sunstein の「サイバー・カスケード」や Eli Pariser の「フィルター・バブル」といったものについての議論を紹介する。

2.3.1 メディア化された公共圏

Habermas は、近代初期における市民的公共性の成立においては、新聞や雑誌といったマス・メディアが大きな役割を果たしていたという風に述べている。新聞や雑誌といったマス・メディアは、文芸や政治において市民間における討議の議題を提供し、さらにそれまでは非公開で行われてきた政治的議論に公開性を付与してきたと、Habermas は述べている。

市民的公共性以前のメディア

しかしながら、新聞は生まれた当初からそのような機能を果たしてきたわけではない。新聞というものの原型が生まれたのは14世紀である。そのような新聞を必要としたのは商人であった。

定日に発送される最初の相場通信——いわゆる定期通信——は、商人たちが自分の目的のために組織したのである。(Habermas 1962=1973: 28)

そのような「定期通信」が新聞の原型であり、そのような新聞で得られる情報によって商人たちは商品の取引を行っていたわけだ。そして、新聞がその様な存在である限り、それを広く公開する必要はなくなる。むしろ一部の商人の間だけで秘匿しておけば、独占した情報に基づいて有利に取引ができるわけ。よって Habermas はその時期の新聞について

情報の公開には関心がなかった。むしろ彼らの利害関係からいえば、「手書きの新聞」、すなわち情報業者によって職業的に組織された私的通信の方が便利であった。こ

の公開性という決定的契機が欠けているかぎり、新しい通信範囲も、その情報流通の諸制度とともに、既存の通信形態に造作なく組み込まれた。(Habermas 1962=1973: 28)

というふうに述べ、市民的公共性以前の私的通信としてのメディアでしかなかったというように述べている。

このような性質が変化する契機となったのが、17世紀、国家が経済に関与する、重商主義の登場である。Habermasは次のように述べている。

さて、資本主義の重商主義的段階をつうじて変形されてきたこの政治的経済的秩序(この秩序の新しい形態は、その中で政治と社会という契機がそもそも分かれていくということで大部分表現されている)の内部で、初期資本主義的交易体系の第2の要素が独特の起爆力を発揮する――それがすなわち新聞である。(Habermas 1962=1973: 32)

この時期に登場してきた新聞は「政治新聞」と呼ばれている。なぜそのような新聞が重要であるかといえば、それはそれらの新聞が印刷され、公刊されるものだったことにある。当時の行政当局は、命令や指令を公示するにあたって新聞を利用するようになったという Habermas は述べている。

いっそう大きな重みを持っていたのは、まもなく行政目的のために新聞を活用した行政当局の関心であった。これらの当局が命令や指令を公示するためにこの道具を利用するようになったことによって、公権力の受けてははじめて本格的に「公衆」となったのである。(Habermas 1962=1973: 33)

つまり、重商主義の登場により、商人たちに命令や指令を与えるようになった行政は、新聞をつうじてそれを公示した。だがそうすることにより、命令や指令といったものが公開性を持って開示されるようになり、それが市民による討議の対象になっていく条件が開かれたというわけである。

そしてそのような新聞を元に公衆が論議する中で、更に、批判や評論を目指す雑誌が現れてきたと、Habermas は述べている。

すでに17世紀の最後の30年以來、新聞を補足するものとして、主として報道ではなく教育の啓蒙、さらには批判や評論を目指す雑誌が現われる。(Habermas 1962=1973: 36)

このようにして、市民的公共性における議論を支えるマス・メディアというものが成立してきたと、Habermas は述べている。

近代初期の市民的公共性におけるマス・メディア

それでは、どのようにして近代初期のマス・メディアは市民的公共性を支えていたのか。Habermas は次のように述べている。

イギリスの1750年以來のように日刊新聞や週刊雑誌も25年間に2倍の販売部数をもった時代に、小説を読むことが市民層の中で習慣になった。これらの市民層は、初期の喫茶店やサロンや会食クラブなどの施設からはとっくに脱却して、すでに新聞やその職業的批評という媒介機関によって結束させられている公衆を形成する。(Habermas 1962=1973: 72)

2.1.1で述べたように、市民的公共性は喫茶店やサロンや会食クラブといった施設から始まった。しかし Habermas は、そのような施設にわざわざ行かなくても、新聞に文芸や政治に関する議論を媒介してもらうことにより、市民的公共性による議論を行うことが、新聞というマス・メディアの発展によって可能になったという風に述べているのである。

そしてその具体例として、Habermas は1694年から95年にかけてのイギリスの政治的公共性の確立を挙げている(Habermas 1962=1973: 87-96)。この時期のイギリスにおいて新聞は、公論に政治が従属することを要求するメディアとなり、更に政治の場でどのような公論が展開されているかを国民に開示するメディアとなった。つまり、新聞によって政治的議論が「公開性」を持つようになり、そして政治的議論が「公開性」を維持するツールとして新聞は重要な役割を担っていたのである。

マス・メディアにおける公共性の構造転換

しかし2.1.1で述べたように、そのような近代初期の市民的公共性は、「社会的なるもの」の台頭により、徐々に衰退し、造成された公共性に取って代わられるようになっていった。そしてその過程で新聞のようなマス・メディア、更に新しく登場してきたラジオやテレビといったマス・メディアの役割も変わっていったと、Habermas は述べている。

Habermas は新聞の変質について次のように述べている。

社説的な態度表明は、買取記事や特派員通信のかげに隠れていく。題材の選択や提供について部内でおこなわれる決定のヴェールにつつまれて、論議というものは消え去る。第二に、政治ニュースや政治関連ニュースの比率が変化する。公共問題、経済情勢、

教育、保険——アメリカの著者たちの分類によれば、まさに「反応の遅いニュース」(delayed reward news)——は、「直接反応のあるニュース」(immediate reward news)、すなわちコミック、汚職、事故、災害、スポーツ、リクリエーション、社会事件、人物実話などによって圧迫されるだけでなく、これらの特徴的名称からもように、実際にもあまり読まれなくなる。最後に、そもそも報道が脚色の形態をとり、スケールから様式的ディテールにいたるまで小説に似せられる(ニュース・ストーリー)。(Habermas 1962=1973: 225-6)

つまり、新聞が公共的な議論が行われる場ではなく、ただ面白おかしい、感情を喚起させるようなニュースを報じる場へと変質していったという風に Habermas は述べているのである。そしてこれは、新しいメディア、すなわちラジオ・映画・テレビにおいてはもっと顕著であると Habermas は記している。

ラジオ、映画、テレビは、読者が印刷した文字に対してもたざるをえない距離感を次第に消滅させる——この距離感は、習得の私的性格によって要求されるとともに、読まれた事柄についての論議交換の公共性をも、かつては可能にしていたものなのである。新しいメディアによって、意思疎通の形態そのものが変化する。それゆえにこれらのメディアは、語の厳密な意味において、新聞では到底できないほどの浸透的作用をもつのである。公衆の態度は「御返事無用」という強迫のもとで、別な形をとる。新しいメディアが発する放送は、印刷された伝達にくらべると、受け手の反応を独特に切り詰める。それは視聴者としての公衆を制圧すると同時に、「成年性」の距離感、すなわちみずから語り反論する機会をも奪ってしまう。(Habermas 1962=1973: 226-7)

つまり、ラジオ・映画・テレビといった、新聞や雑誌のような活字とは違うマス・メディアにおいては、そもそもそのマス・メディアにおいて提示される主張に反論すること難しくなること、Habermas は述べているのである。活字メディアにおいては、その活字によって示されることに対し一定の距離を持って接し、それについて独立した思考をすることが可能であるが、非活字メディアにおいては思考に浸透し、そのメディアのメッセージに反論する機会を奪ってしまうのである。

もちろん、このような変化はメディアの性質と、その社会の変化が相補的に作用しているからこそ起きていることである。先に述べたように社会的なものが台頭してくることにより、親密性は不安定なものになっていく。そしてその過程で自立し公共的な議論を好む人格を維持することが難しくなることにより、その様な議論を必要としないマス・メディアが台頭する。そしてそのようなメディアの台頭により、議論する能力が個人の人格から失われていくという、ネガティブ・フィードバックが、Habermas においては想定されていると思われる。

そして、そのような公共的な議論を前提としないマス・メディアにおいて媒介されるメッセージについて、Habermas は次のように述べている。

宣伝は、マス・メディアに支配された公共性が引き受けたもうひとつの機能である。それゆえに、政党やその補助機関は、購買決定にたいする広告圧力とのアナロジーで選挙民の決定に広報による影響を与えることをよぎなくされる。——こうして、政治的マーケティングという営業が成立する。古風な政党のアジテーターやプロパガンディストに代って、政党政治的には中立的な宣伝専門家たちが登場し、政治を非政治的に販売するために雇われる。

(中略)

すなわち政治的領域は、社会心理学的にみれば、消費領域の中へ統合されるのである。(Habermas 1962=1973: 285)

つまり、造成された公共性においてマス・メディアは、公共的な「公論」ではなく、非公共的な「意見」について人々を媒介し、あたかも売り手と買い手で商品を売買するかのようになり、政党と大衆の間で政策と支持に関する取引を行う場となると、Habermas は考えているのである。

このように Habermas は現代のマス・メディアに対しては、造成された公共性を維持するための、非公共的な意見が媒介される場にすぎないと考えている。

メディア化された公共性

しかしその様な Habermas の見解に対して、Thompson は現代のマス・メディアも十分、現代における市民的公共性、つまり批判的公共性に寄与しているという風に反論している。

Thompson は Habermas が行った公共性の発展についての議論を評価しながら、しかしそこではマス・コミュニケーションが公共性の発展に寄与した本質的な役割が軽視されていると主張し、次のように述べている。

Habermas's argument is based on a notion of publicness which is essentially spatial and dialogical in character: it is the traditional publicness of co-presence, in which publicness is linked to the conduct of dialogue in a shared locale.

(中略)

it could still be applied with some degree of plausibility to the salons and

coffee-houses of early modern Europe. But in adhering to this traditional notion of publicness, Habermas has deprived himself of the means of understanding the new kind of publicness created by mass communication. The media have created a new kind of public sphere which is de-spatialized and non-dialogical in character: it is divorced from the idea of dialogical conversation in a shared locale and is potentially global in scope. (Thompson 1994: 41-2)

(筆者訳: Habermas の公共性についての議論はそれが行われる空間と対話にその基盤をおいている。その伝統的な公共性は場所を共有し、相互で対話がおこなわれることによって始めて公共的なものとなっている。

.....

しかしそのような公共性は近代初期のヨーロッパにおけるサロンやコーヒーハウスにおいてでは通用しないだろう。ハーバーマスの伝統的な公共性についての議論は、マス・コミュニケーションによって生まれた新しい種類の公共性については適用できない。そのようなメディアは空間を共有せず、対面的でない性格のコミュニケーションにおいても公共性が成立させる。そしてそれにより、公共性は場所を共有した相互対話が行われる場所に限定されず、世界的な視野を持つ可能性を持った。)

つまり Thompson は、市民的公共性というものはマス・コミュニケーションによりそれが媒介されることによって始めて、議論が行われる個別の場所に限定されず、世界的な視野を持ち、それに対処する公共性に変化したと述べているのである。そして、そのような公共性を Thompson は、「メディア化された公共性」と呼んでいる。

The basis of this reconstitution is that, with the development of mass communication, the publicness (or visibility) of actions or events is no longer linked to the sharing of a common locale, and hence actions or events can acquire a publicness which is independent of their capacity to be seen or heard directly by a plurality of co-present individuals. The development of mass communication has thus created new forms of mediated publicness. (Thompson 1994: 39)

(筆者訳: マス・コミュニケーションの発展により、行為や行事における公共性(または公開性)は、その基盤から再構築された。それはもはや場所を共有していなくても良くなり、それゆえに行為や行事は、多数の場所を共有する個人が直接見たり聞いたりする範囲を超えたところで、公共性を獲得できるようになった。マス・コミュニケーションの発展は、メディア化された公共性という新しい様式を創り出したのである。)

マス・コミュニケーションというものが発展してくる以前は、人々は場所を共有し、その場で直接相互対話できる範囲で起きた問題にしか公共性というものを認めなかった。だが、マス・コミュニケーションの発展により、人々は始めてそのような範囲の外にある公共性の問題について知り、そして議論することが可能になった。Thompson はその代表例として、中国での民主化運動弾圧や、イラクのクウェート侵攻、南アフリカのアパルトヘイトといった問題を挙げ、そのような問題はマス・コミュニケーションが存在しなければ公共性の問題とはなりえなかっただろうと述べている(Thompson 1994: 41)。

そして更に Thompson は、そのようなメディアの存在によって、人々は社会的な問題を再占有することが可能になると主張している(Thompson 1994: 43-6)。

つまり、人々はマス・メディアから得られる情報をそのまま受け入れているのではなく、個人的な文脈においてそれを解釈している。よって Habermas が現代のマス・メディアについて述べているように、マス・メディアの情報の押し付け人々から反論の機会を奪っているということはないというのが、Thompson の主張なのである。よって、もし個人が公共的にマス・メディアからの情報に対処すれば、マス・メディアからの情報もまた批判的公共性を支える基盤となりうる。というよりも、マス・メディアがなければ自分の場所の範囲外にある公共性を持つ問題に対処せざるを得ない以上、例え批判的公共性であっても、それを構成する個人はマス・メディアからの情報が、公共性を達成するためには重要となってくるのである。

まとめ

マス・メディアと公共性についての議論を表にまとめるとこのようになる。

表3 マス・メディアと公共性の関係

近代初期	
市民的公共性	議論や相互対話の範囲を超えた場所における公共性の問題について伝え、公開性を持った議論を媒介するメディア
現代	

マス・メディアに支配された公共性	造成された公共性であり、議論の場とは成り得ず、非公共的な意見を宣伝・媒介するメディア
マス・メディア化された公共性	批判的公共性を可能にする、世界的な社会問題を議題として提示することが出来るメディア

ここで重要なのは、いずれの場合においても、マス・メディアは公共性の基盤として、公共性が存在しうる制度的条件を形作り、そしてそれにより公共性のあり様に影響を与えていたということである。現代においては、マス・メディアからの情報が公共性の形成に重要な役割をはたしているのである。

2.3.2 インターネット公共圏論

では、そのようなマス・メディアに対し、インターネット・コミュニケーションはどのようなのだろうか。インターネット・コミュニケーションもマス・メディアと同じように公共性の基盤となりうるのだろうか。

吉田はインターネット空間において公共圏が成立しうるかという議論について、次のようなインターネット空間の技術的特性を挙げて、**インターネット空間は公共圏となりうる**と述べている。

マス・メディアとインターネットのあいだには、技術的特性レベルでの一方向性と双方向・多方向性という違いのみならず、それらに対して社会的・文化的に付与された意味ないし機能においても多くの本質的な差異が存在する。そうした差異を考慮すれば、インターネット空間における公共圏が公共圏の理念型に接近していく可能性について、次のように構想することが可能である。

① **平等性**に関して。インターネット空間が基本的に、既存の社会的属性・社会関係から自由な参加とコミュニケーションを許容する社会空間である点で、平等性を確保するうえで有利な環境を形成していることはまず指摘できよう。

(中略)

② **公開性**に関して。インターネット空間への参加には一定の技術的基盤の所有と技術的知識が前提となるが、それ以外には基本的に参加を制約する条件は存在しない。その意味では、インターネット空間は原理的な公開性を確保している。さらにインターネット空間がもつネットワーク性(新たな社会関係の形成)という特性は、この公開性をより拡大する可能性をもつ。

(中略)

③ **自律性**に関して。先述のように現代の公共圏における自律性の基礎は、その**自己言及性**(自己反省性)にある。インターネット空間およびその内部の多数の仮想空間は、(第2章で述べたように)それ自体の中から共有すべきリアリティや規範を創出するという意味で、自己言及性の高い社会空間であり、それゆえ公共圏の自己言及性という特性と高い親和性をもっている。(吉田 2000: 150-1)

つまり吉田は、インターネット空間は公共圏の求める「平等性」「公開性」「自律性」を用意しやすいという特性を持ち、そしてそれゆえに現代における公共圏が成立しうるのではないかと、いうふうに主張しているのである。

しかし一方で吉田は、次のような要因がそれぞれインターネット空間から「平等性」「公開性」「自律性」を離反させるのではないかと指摘している。

理念型から離反していく可能性については、次のように予測することが可能である。

① **平等性**に関して。インターネット空間を平等性から離反させる第一の要因は、いうまでもなく(第1章、第4章などでも述べた)「情報強者」と「情報弱者」との**情報格差**、あるいはアクセス権の不平等の存在ないし拡大という問題である(この問題はいうまでもなく、公開性にもネガティブに影響する)。

(中略)

② **公開性**に関して。インターネット空間を公開性から離反させる最大の要因は、**政治システムによる監視**およびそれに基づく**規制**である。

(中略)

③ **自律性**に関して。上述のような経済システムによる市場化、ならびに政治システムによる監視・規制は、インターネット空間の自律性にもネガティブな影響を及ぼす。しかしながらインターネット空間にとってより本質的な問題は、**匿名性**の増大によってネットワークが破壊され、自己言及的・自律的な規範形成が困難になるという可能性である。(吉田 2000: 152-3)

しかしながらこれらの要因の1つめと2つ目は、インターネット空間の外部からの影響であり、インターネットの本質的特性とはいえず、匿名性に関しても、匿名性を持ってインターネット空間に参加するかどうかは個人の選択に任されるという点で、インターネット空間自体の問題であるとは言えないだろう。よって吉田は、インターネット空間の技術的特性については、批判的公共圏の成立により寄与するものであるということが出来る。

そして吉田は、インターネット空間において批判的公共圏が成立した具体例として、ポルノ表

現の派生に関する議論や、通信品位法への反対運動などを挙げている。

インターネット公共圏論への批判

しかしこのようなインターネット公共圏論は、様々な論者によって批判されてきた。遠藤薫は吉田のインターネット公共圏論に対し

だが、結局その問題は、いかに群衆を公衆へと導くかという啓蒙問題に帰着してしまうのではないだろうか。(遠藤 2004: 38)

と述べ、吉田のインターネット公共圏論は「インターネットは公共圏であるべきだ」という規範的見解にしかならないのではないかと批判している。

そして遠藤は、インターネットはそれ単体で公共圏を形成するのではなく、既存のマス・メディアと「抗争」という形で関係を持ち、意見の連鎖を生み出していく中で「世論」を形成していく存在であり、その過程でインターネットは、多様な意見を表出させるが、それをまとめあげて公共性を持つ議論へと昇華させるのは、未だマス・メディアの役割であるというように、「湘南ゴミ拾いオフ」などの観察かを例示しながら主張している。(遠藤 2004: 84-9)

また、鈴木謙介は、吉田のインターネット公共圏に関する議論は、2000年以前は一定の影響力を持っていたが、2000年以降はそうではないと述べている。

ただ2000年以降、両者の議論の立ち位置も変化しつつあると私は見ている。その直接的な契機は、インターネットの普及により「まだここにはない理想」として語られていた、人々の自由なコミュニケーションの場としてのネットが、現実のものになったということだろう。それによって、実現するはずだった理想が、いくつもの問題を抱えていることが明らかになりつつあるのだ。

特に、民主主義をめぐってその変化は顕著だ。初期の情報社会論、特にモダン・アブローチは、情報化が人々のコミュニケーションを促していくことで、民主的な議論が盛り上がるかと考えていたが、実際には人々が自分の好きな情報にだけアクセスし、偏った情報に踊らされながら、自分たちと異なる意見を持つ人々に対して攻撃的になるといった現象が目立つようになった。(鈴木 2008: 129-30)

なぜインターネットが普及するにつれてそのようにインターネット上での議論が変質していったか、これについて鈴木は、インターネット初期においてインターネット空間の基礎を作ってきた「ハッカー」と呼ばれる人々の倫理に注目している。鈴木はハッカー倫理について、「自分のしたいこと、楽しみを優先」し、そしてそれ故に社会的属性にしばられない「平等」で「民主的」な議論を尊ぶものであるとしている。そしてその上で、そのようなハッカー倫理はしかし実際は極めて実力主義的で、確かに「属性」には縛られないが、しかしハッキング能力によって人に優劣をつけることには抵抗がなかったと指摘する。(鈴木 2008: 142-55)

そしてそのような倫理の帰結として、ハッカー倫理における「民主的」な議論とは、その実そこに加わる能力のないものを非民主的に排除するものだったという風に述べている。

結局のところ、ハッカーたちの「理想的環境」なるものは、それを脅かすものを官僚主義的に、非民主的に排除してこそ成り立つものでしかなかった。(鈴木 2008: 157)

そしてこのような排除は、ある程度のハッキング能力がなければそもそもインターネットに参加できなかったインターネット初期においては問題とはならなかったが、インターネットが大衆化していくにつれて大きな問題となっていったのである。なぜなら、Habermasが階級闘争によって市民的公共性は衰退していったと述べたように、双方の持っている能力や倫理が同じものであるという前提があつてのみ成立していた民主的な議論は、しかし能力の劣ったものや、そもそも前提とする倫理が異なるものに対面した時には、途端に非民主的にその異なる対象を攻撃するものとなるからである。

鈴木はこのような民主的な議論が成立し得ない要因について、先に挙げた榎村の議論に賛同し、現代においては存在論的安心を支える恒常性が存在しえなくなっているからではないかということ述べている(鈴木 2008: 197-200)。そして鈴木は、むしろそのような存在論的安心を保証する場として、インターネット空間はあるのであり、インターネット上に「ヴァーチャル・コミュニティ」を構築し、そこでそれぞれを承認しあう場を作ることを提案している。(鈴木 2008: 206-18)

まとめ

インターネット上に市民的公共性を求める議論は存在していたが、しかし現実にはそれは様々な理由から難しいのではないかと論じられている。

そしてそんな中で、インターネットと公共性の関係については既存のメディア化された公共性を補助するものとして限定的な役割しかないという意見や、公共性の前提となる親密性における存在論的安心を支えるという役割を担えるのではないかという意見があるが、しかしいずれにせよ公共性自体がインターネット空間に存在することはないのではないかと思われている。

2.3.3 アーキテクチャによる公共性

しかし一方でそのような議論に対し、批判的公共性やメディア化された公共性というようなものは確かにインターネット上には存在しないかもしれないが、しかしそのような公共性とは違う形の公共性ならば存在するのではないかという議論が存在する。

濱野はまず、日本のインターネット・コミュニケーションの傾向について、北田暁大の議論を参照しながら「繋がり」の社会性を満たす方向に進んでいったという風に述べている。北田は、90年代半ば以降の若者のコミュニケーションの変化を、「繋がり」の社会性の増大であると捉えられているとしている。

しかし、この結婚の背景を考える上で、こうした技術史的側面と同様に、いやそれ以上に重要なのは、90年代以降の若者コミュニケーションの構造変容——《秩序》の社会性に対する《繋がり》の社会性の上昇である。

(中略)

90年代なかば以降、若者たちは、大文字の他者が供給する価値体系へのコミットを弱め、自らと非常に近い位置にある友人との《繋がり》を重視するようになる。重要なのは、その《繋がり》が、「共通する趣味」「カタログ」のような第三項によって担保されるものではなく、携帯電話のな使用(用件を伝えるためではなく、「あなたにコミュニケーションしようとしていますよ」ということを伝達するためになされる自足的コミュニケーション)にみられるように、《繋がり》の継続そのものを指向するものとなっているということだ。(北田 2005: 206)

このような「議論する争点など、共通項があるから繋がろうとするのではなく、繋がり自体を求めているコミュニケーション」によって維持される社会性が、繋がり」の社会性であり、そして濱野も北田と同様、その様な繋がり」の社会性がインターネット・コミュニケーションの大部分において見られるようになったと述べている。

そして濱野は、そのような繋がり」の社会性こそが、前節で紹介したようなインターネット公共圏論を成立しえなくしていると述べている。

インターネットの出現にハーバーマスの「電子公共圏」の再興(吉田[2000])、あるいは「討議的民主主義(Deliberative Democracy)」の実現(曾根[2002])を夢見てきた論者にとって、ソーシャルウェア²⁾が「繋がり」の社会性に満たされていく昨今の状況は、極めて苦々しいものに見えるだろう。(濱野 2007: 50)

ただ、これまでインターネットと政治の関係性と言うと、「きちんと実名で発言する市民が集まって、公共的な討議を繰り広げる」という「討議民主主義」的なイメージが大前提にされてきました。だから、匿名なんてもつてのほかだったわけですね。日本のネット空間というのは、顔の見えない匿名的な2ちゃんねらーたちが「ネタ的」な会話に終始して「炎上」を起こすばかりで、そこでは応答責任を引き受ける覚悟を持った主体も、マジメなコミュニケーションも成立し得ない。だから日本のインターネット上では、「マジ」で「ガチ」な討議を交わすユルゲン・ハーバーマスが言うところの「公共圏」は成立しない。そう言われて久しいわけです。(宇野・濱野 2012: 163)

このように濱野は Habermas の述べるような市民的公共性が日本のインターネット上に芽生えないという見解なのだが、しかし一方で濱野は次のように述べている。

だが、「繋がり」の社会性」は、見方を変えれば、ある種の「公共性」に寄与する役割を果たしているということもできる。(濱野 2007: 50)

そして濱野は、「繋がり」の社会性」が寄与する公共性を2つ示している。

まず1つは、繋がり」の社会性」が「ローカルな共同体を超えたレベルでの『共通知識 common knowledge』」(濱野 2007: 50)を成立させるものであるということだ。つまり、2.3.1でThompsonが示したような、マス・コミュニケーションによるメディア化された公共性のようなものが、インターネット上でも成立するのではないかという議論である。ただしそれは、今のところは「かつてのマスメディアに比べて微弱で限定的」(濱野 2007: 50)な役割でしかないということも、濱野は認めている。

そして2つ目に濱野は、「繋がり」の社会性」が、「アーキテクチャ／環境管理型権力」の働きにより、今までの市民的公共性とは違う公共性を日本のインターネットにもたらし得るのではないかと主張しているのである。

公共性の多義性(日本のインターネットには、欧米的な市民的公共性ではない、別のあり様の公共性が存在するのではないか)

市民的公共性とは違うタイプの公共性とはどういうことか。濱野は市民的公共性だけが唯一普遍的な公共性では無いということ、Jeff Jarvisという批評家の議論を引きながら述べている。

ジェフ・ジャービスの『パブリック』という本があるのですが、この本は要するにソーシャルメディア時代の「公共性の構造転換」を謳っているんです。これまで公共性と言うとき、それはハンナ・アレントやハーバーマスの言う「討議」が強く前提にされてきた。でもこの本では、アレントやハーバーマスもいちおう触れながら、新たなソーシャルメディア時代の「パブリック(公共性)」というのは、要はフェイスブックなんかでプライバシーに関するものをオープンにシェアしていくことなんだ、と。繋がること、シェアされること、共有され

ること、連鎖すること——これが新時代のパブリックであって、そこにはもう「議論すること」が定義に入っていないんですね。(宇野・濱野 2012: 186)

そしてそのような議論を引きながら、濱野は米国的なインターネット社会のあり方ではない、日本的なインターネット社会のあり方がありうると主張している。

これまで私達は、インターネットや情報社会の理想のあるべき姿を、米国の実態を通じて、「ただ一つ」のものとして学んできました。

(中略)

しかし、社会学者の佐藤俊樹氏が『ノイマンの夢・近代の欲望』(1996年)のなかで指摘しているように、インターネットの自治的で開かれたあり方は、そもそも米国社会の自治社会と契約社会と共和制の「伝統」(という言い方が強ければ「慣習」)の上に成り立っているとみなすことができます。

(中略)

だとするならば、少なくともインターネットという通信技術やブログのようなソーシャルウェアを「移植」することで、ただちに日本社会のあり方が米国社会のようなものに突如として変わるといえることはありえない。むしろ日本という場所に、日本的なソーシャルウェアが自生的に現れてくるそのプロセスは「正しい」とすらいえます。(濱野 2008a: 329-30)

つまり、日本のインターネット上には、Habermas やアメリカのインターネット公共圏とは違った形での、日本の集団主義・安心社会的な文化に合った公共性が、アーキテクチャにより形成され、そして人々はその公共性の中で様々なパフォーマンスをしているというのが、濱野の主張なのである。

(筆者注: 2ちゃんねる)のパフォーマンスの高さがどこに由来するのかといえ、2ちゃんねるの匿名掲示板というアーキテクチャが、日本の集団主義／安心社会的な作法・慣習・風土にマッチしていたからではないでしょうか。(濱野 2008a: 114)

アーキテクチャによる公共性(それぞれを『公共性の構造転換』における市民的公共性の性質と対比)

それでは「アーキテクチャによる公共性」とはどのようなものなのか。

そもそもアーキテクチャとは一体何なのか。この概念は元々法学者の Lawrence Lessig によって提示されたものであるが、濱野は Lessig を引きながら、アーキテクチャについて、それが「規範(慣習)・法律・市場に並ぶ、人の行動や社会秩序をするための方法」(濱野 2008a: 16)だと述べ、その特性を次のようにまとめている。

さて、以上に述べたような「アーキテクチャ／環境管理型権力」という概念をいま一度要約しておけば、その要点とは、

①任意の行為の可能性を「物理的」に封じてしまうため、ルールや価値観を被規制者の側に内面化させるプロセスを必要としない。

②その規制(者)の存在を気づかせることなく、被規制者が「無意識」のうちに規制を働きかけることが可能

という2点にまとめられます。(濱野 2008a: 20)

そして、このようなアーキテクチャによって社会を設計することができるし、ソーシャルウェアにおいてはそれがまさに実践されているというのが、濱野の主張なのである。

さて、もしアーキテクチャにより社会が形成され、そしてその社会を維持するために、社会に現れる課題を解決するような公共性が、濱野の言うとおりアーキテクチャによって発生するとしたら、それは一体どのような公共性なのか。

「アーキテクチャによる公共性」、つまりアーキテクチャによって、その社会に属する個人が社会的課題を解決していくにあたり、濱野は次のような働きを重要視している。

I. 淘汰

II. 多様性の生成

III. 再帰的な限定客観性

IV. 擬似同期による共通性

V. 集合知の活用

それぞれは一体どういうものであるか。

I. 淘汰

まず「淘汰」と「複雑性の生成」については、「ニコニコ動画のタグの決定」という事例についての濱野の考察を紹介することによって説明することが出来る。

ニコニコ動画とは濱野の説明によれば

2006年末に日本のニワンゴ社が運営を開始した動画共有サービスで、当初はユーザーの動画コンテンツに、文字によるコメントを直接かぶせて投稿・表示することができる——サービスとして開始された。2008年10月現在、サービス開始から約2年

を経て、アカウント登録者数は約 1000 万、一日の利用者数も約 200 万に到達しており、日本のウェブサービスのなかでも見る急成長を遂げている。(濱野 2008c: 319)

というような動画共有サービスである。

そしてニコニコ動画においては、動画に「タグ」というメタ・データを利用者が付与できる。これは動画を投稿しているものだけでなく、ニコニコ動画のアカウントを持っているものなら誰でも、そして動画がタグの編集を許可している場合ならどんな動画にも付与することが出来るメタ・データであり、主にその動画の特徴を示すキーワードをタグに入力する。そうすると、そのタグがリンクとなり、そこから他のそのキーワードがタグとして付けられた動画、つまりその動画の特徴と同じ特徴を持つ動画を探すことが可能になるという機能である。

このタグは、ニコニコ動画にかぎらず、様々なウェブサービスで利用されているものなのだが、濱野はニコニコ動画のタグは通常のタグとは違う仕様、アーキテクチャを持っているが故に、よりよいタグが付与されるようになっていると主張する。

ニコニコ動画のタグがの仕組みが、SBS³⁾やユーチューブのタグとは異なる特徴をもっているということ。その特徴を一言で言えば、従来型のタグのフォークソミーが「累積」型の仕組みだったのに対し、ニコニコ動画のタグは「淘汰」型であると表現することができる。

(中略)

タグ登録数に制約が存在しているということ。これはいささか奇妙な事態に思われるかもしれない。先に紹介したワインバーガーの考えでは、第 3 段階の情報整理法であるタグの特徴は、物理空間の制約を取り払う点に、つまり事実上無限にタグを付与できる点にあったとされていたからだ。にもかかわらず、ニコニコ動画が有限の制約を設けているのはなぜなのか？それはこの制約の存在によって、ニコニコ動画のタグが《自然に》—より正確には《人為的かつ自然に》と表現すべきだが—「優れたものが生き残っていく」という「淘汰」を起こすためであると、情報工学者の伊藤聖修らは指摘している。(濱野 2008c: 335-6)

そして、そのようにタグ数の制限というアーキテクチャがあるために、ニコニコ動画においては、あるタグを消して自分の考えたタグを付与する。それに対してまた別の人が数秒後にそのタグを消してその別人が好きなタグを付与するというような「タグ戦争」と呼ばれる行為が繰り返され、そしてそれにより淘汰が起こり、よりよいタグだけが残るようになっていると、濱野は主張する。

タグ戦争の参加者たちは、きわめて気軽な心理で—どうせ何を書こうと数秒程度しか生き残ることはないのだから—、タグを書き付けていく。そこで起きている「ダジャレ」的なタグの改変行為は、ある種の超高速で展開される「大喜利」のようなものにえられる。

だが、タグ戦争は単なる刹那的な会話にとどまるだけではない。たとえば、タグの編集合戦を通じて、コマ数秒程度しか生存しないようなタグであっても、戦争参加者たちの笑いを誘うような「ヒット」したタグを入力することが出来れば、しばしばそのタグは誰かの手によって勝手にコピーペーストされ、その生命を再び得ることになる。(濱野 2008c: 338-9)

そしてこのような淘汰は、ニコニコ動画のタグ戦争だけでなく、Google のページランク⁴⁾と、それを利用して存在感を拡大するブログが、お互いの質を相互に強化しあう場面にも起きていると濱野は述べている(濱野 2008a: 56-8)

このような淘汰は、まさしく公共性のある課題に対する解決法として存在しているわけだが、しかしその解決は、市民的公共性とは大きく違う。市民的公共性においては、複数の選択肢から一つを選択するのは、公衆の議論によって決められなければならないものと考えているが、アーキテクチャによる公共性においては、そのような議論を必要としない。課題に携わる個人がお互いに討議せずとも勝手に一つの選択肢に淘汰されていくということが、アーキテクチャによる公共性においては課題解決の手段として用いられるのである。

II. 多様性の生成

しかし濱野は、ニコニコ動画におけるタグは単に優れたものが生き残るという「淘汰」のみを行なっているのではないとも述べている。濱野は、タグ戦争が起こっている間は、その動画を視聴するタイミングが数美容ずれただけで、その動画に付与されているタグが異なってしまうことに着目し、次のように述べている。

なぜなら、タグ戦争が加速すればするほど、各ユーザーに表示されるタグの一覧は、同一の動画を見ているにもかかわらず、ばらばらのものになっていくからだ。つまり、ある動画を視聴するユーザー A と、その数秒後に同一の動画にアクセスしたユーザー B とでは、異なるタグの一覧が画面上に表示されるのである。

(中略)

ニコニコ動画のタグのアーキテクチャは、そのタグを量子力学的に戯れさせる事によって、人々を自動的に多様な作品の分類と解釈へと誘う。(濱野 2008c: 341-2)

つまり、アーキテクチャによる公共性は、ただ単に選択肢を淘汰するだけでなく、時間的なズレを用いることによって、新たな選択肢を生み出すこともできると、濱野は主張しているのである。

そしてこれもまた市民的公共性とアーキテクチャによる公共性が大きく違う点である。市民的公共性においては、新しい考え方や解釈・選択肢は、討論をし、そしてその討論の過程で弁証法的に生み出されるものであった。しかしアーキテクチャによる公共性においては、討論ではなく、時間的なズレによって新しい考え方・解釈・選択肢が生み出されるのである。

III. 再帰的な限定客観性

しかしそのような淘汰や多様性は、一体どのようにして個人の主観的な好みを乗り越え他者と共有される公共性を手にしているのだろうか？このような問いに対して濱野は、ニコニコ動画において日々アップロードされるコンテンツを例示し、ニコニコ動画のようなアーキテクチャにおいては、人々は客観的な評価基準をもたされるのだと主張している。

ニコニコ動画上において、もはや人々は、個々人ごとにばらばらなく主観的)な評価基準によってコンテンツを評価しておらず、ほとんど「客観的」と呼べるほど明確な評価基準を共有しているのではないか。

〈中略〉

ニコニコ動画では、まるでイベント会場の歓声を聞くかのように、他の人々の評価情報を体感的に取得できます。しかもニコニコ動画の媒体は「声」ではなく「文字」なので、他の人々がどの点を評価しているのかについてもはっきりと「見分ける」ことができる。そしておそらく、ニコニコ動画が人々を魅きつけている特性の1つは、自分が「すばらしい」と感じる作品があったとき、「その『すばらしさ』が誰にも理解されない」という孤独状態に陥ることなく、他の人々もそれを「すばらしい」と絶賛し喝采している「共感状態」に、リアルタイムで没入することができるという点にあるでしょう。(濱野 2008a: 253-5)

つまり、ニコニコ動画においてはあるコンテンツを視聴するときそのコンテンツに対する評価も同時に体感するアーキテクチャがあり、そして人々はその評価を自分の評価基準とするために、人々が同じ評価基準を共有することが可能になっているということなのだ。その評価基準は、その評価基準が生じる前の評価基準から決められてという点で、再帰的に生成されると述べていよう。

しかし一方で、その客観性はあくまでニコニコ動画の中に限定されたものであるというふうにも、濱野は述べ、あくまでその客観性は「限定客観性」であり、そしてその限定は、アーキテクチャによって画定されるのではないかと、濱野は考察している。

このような限定客観性は、市民的公共性における「公開性」と対称をなすと言って良いだろう。市民的公共性においては、ある評価基準を絶対のものとするのではなく、常にそれが討議によってゆれ動くものであり、その評価基準の正しさは万人が参加する討議によってしか証明できないとされてきた。それに対し限定客観性は、場所を限定した上で、その場所における評価基準は絶対であるとし、それに対する反論を許さないことにより、評価基準の正しさを保証しているのである。

IV. 擬似同期による共通性

では、そのような場所の限定は一体どのようになされるのか。濱野は、「擬似同期」というアーキテクチャの特性を用いることにより、場所が限定的でありながら、しかしそこに多数の人々が参加でき、共通の場所にいることが可能になるというように述べている。

擬似同期とは、同じ時間に発せられたものではない個々人のメッセージを、まるで同じ時間に同じ対象に向かって発せられたものであるかのように錯覚させるアーキテクチャの特性のことである。濱野はこのアーキテクチャの特性について、その代表的なものであるニコニコ動画を例示しながら次のように説明している。

本来、「ライブ感」というものは、いわゆる「客観的」な意味での「時間」(時計が正しく刻んでいる時間)を共有していなければ、生み出されることはありません。しかし、ネット上で動画を観るという行為は、「客観的」な時間の流れから見れば、各ユーザーが自分の好きな時間に、自分の好きな動画を(オンデマンドに)視聴するという、「非同期的」な行為である以上、基本的にライブ感を生み出すことはできません。

これに対し、ニコニコ動画は、動画の再生タイムラインという「共通の定規」を用いて、「主観的」な各ユーザーの動画視聴体験をシンクロナイズさせることで、あたかも同じ「現在」を共有しているかのような錯覚をユーザーに与えることができるわけです。

〈中略〉

以上に見てきたように、ニコニコ動画は、実際には「非同期的」になされている動画に対するコメントを、アーキテクチャ的に「同期」させることで、「視聴体験の共有」を擬似的に実現するサービスであるということが出来ます。この特徴を「擬似同期」と呼んでおきましょう。(濱野 2008a: 212-3)

そのような擬似同期性による場所の限定により、アーキテクチャによる公共性はその公共性の内部の人間の共通性を担保しているのだ。市民的公共性は、マス・コミュニケーションによって場所に関係なく、共通の公共圏で討議に参加できるといふ、参加の公開性をその特性としたが、擬似同期においてはその公開性は擬似的に制限されるのである。

V. 集合知の活用

これまで述べてきたように、アーキテクチャによる公共性は、それぞれ差異を持った独立した個人が集まり、討議をしていく中で問題を解決するという、市民的公共性とは違い、討議を用いず、自然かつ人為的に生じる淘汰と多様性によって問題を解決していくとしている。では、そこにおいて、その問題を解決するための「知識」は一体どこにあるから生じるのだろうか。市民的公共性においてそれは、独立した個人が討議において相手を説得するために出し合う「公共的な意見」にあるとした。

これに対し濱野は、アーキテクチャにおいては「集合知」こそが問題解決の原動力になると述べている。集合知とは「数多くの人が集まって知恵を寄せ合う状態」のことをさすが、アーキテクチャによる公共性は、別に他人を説得しようとするわけではなく、ただネット上でコミュニケーションするにあたって自然とネット上に表出される私的選択の知恵を、アーキテクチャが集めることによって、一つの「集合知」とすると、濱野は先で説明した Google のページランクの仕組みを例に出しながら述べているのだ(2008a: 42-5)。

まとめ

以上に述べたアーキテクチャによる公共性の働きを、市民的公共性と対比しながらまとめる、以下の様な表にまとめられる。

表4 アーキテクチャによる公共性の働き

公共性における問題	アーキテクチャによる公共性	市民的公共性
選択肢の絞込み	淘汰	議論
よりよい社会への発展	多様性の生成	弁証法的発展
判断基準	再帰的な限定客観性	議題への公開性
社会的問題の範囲	擬似同期による共通性	参加への公開性
問題解決の知恵	集合知	公共的な意見

そしてここで重要なのは、市民的公共性と同じように、アーキテクチャによる公共性もまた公共性の関わる問題、つまり社会的問題に対して解決法を提示できるからこそ、公共性と呼べるということである。

「アーキテクチャによる公共性」を支える「操作ログ的リアリズム」

さて、市民的公共性は、それを担う自立した個人を成立させるものとして親密性と、そこでの純粋な関係性による存在論的安心を必要としたが、アーキテクチャによる公共性には、それに適応するための個人のあり様といったものは存在するのだろうか。

先ほど、アーキテクチャによる公共性の判断基準として、限定客観性というものを挙げたが、濱野はこのようなものが、ケータイ小説と呼ばれるような、携帯電話のウェブ閲覧機能を使って読まれるような、ウェブ上で連載されている、主に女中高生を対象にした小説にも適用できると考察している。

こうした佐々木氏の指摘を踏まえるならば、ケータイ小説に描かれていると思いきリアルなるものは、先ほど筆者がニコニコ動画上のコラボレーション現象について論じた「限定客観性」と同じ性質を有していると考えられます。ケータイ小説のユーザー(著者&読者)たちは、ほとんど「客観的」と呼べるほどに明らかなコンテンツの評価基準を共有していた。だからある一時期のケータイ小説作品は、よくいわれるように、どれをひもとも、『恋空』のようなワンパターンな物語展開を見せていた。しかしその評価基準は、ケータイ小説ユーザーの外部にはまったく共有されておらず、それゆえその作品は「炎上」のごとく叩かれてしまった。――以上が『恋空』ひいては「ケータイ小説」をめぐる状況の整理になります。(濱野 2008a: 264)

そして濱野は、東浩紀の「ゲーム的リアリズム」についての議論を参照しながら、そのようなケータイ小説には、近代における主体のあり様を示す「自然主義的リアリズム」とは違う、「操作ログ的リアリズム」が見いだせると主張している。

「自然主義的リアリズム」「操作ログ的リアリズム」とは一体どういうものか、濱野は次のように述べている。

東氏はこの問題を、「私小説」という近代小説のフォーマットと絡めて、次のように説明します。かつて「私小説」に描かれているのは、作者のことかもしれないが、基本的には誰とも分からない「私」についての物語だった。そして「私小説」を読むという行為を支えていたのは、その物語で描かれている「世界」と「私」(内面)の関係が、ありのままの形で「写生的」に――「自然主義的リアリズム」(大塚英志)に則って――描かれている、という前提だった。

(中略)

だからこそそこで書かれている内容は、誰にとっても共感しうるような「普遍的なリア

ル」を宿すと考えられていたのです。(濱野 2008a: 266-7)

つまり「**自然主義的リアリズム**」とは、近代において成立した、世界から独立した存在として自身を理解し、そして自らの考えを誰にでも理解できるような形(普遍的リアル)で提示しようとする主体のあり様である。これまでの議論に則って言うならば、Habermas のいう「みち足りた自由な内面性という近代的意味における私的存在」であり、Giddens のいう「民主制を担い自立した自己」であるということができよう。

ではそれと対比される「**操作ログ的リアリズム**」とはどのようなものなのか、濱野は次のように説明している。

なぜなら『恋空』という作品の中では、登場人物たちの「内面」が——(自分で自分に語りかけ、思考し、問いかけるようなモード)が——どこにいても「♪ピロリンピロリン♪」と鳴り響くケータイの存在によって、常に切断されてしまうからです。(濱野 2008a: 275)

『恋空』においては、「内面」の〈深さ〉のようなものは描かれていないけれども、「操作ログ」の〈緻密さ〉のようなものが刻まれているということ。

(中略)

「操作ログ的リアリズム」とでもいうことができます。(濱野 2008a: 290)

つまり、「**操作ログ的リアリズム**」とは、内面よりも操作ログに主体は形成されると自己認識し、操作ログによっていかに自己が操作されたかを描くことによって、同じアーキテクチャを利用している人々の間でのみ通用される形(限定されたリアル)で自己のあり様を示すものなのだ。そして濱野は、「着信したとき、ケータイに表示される番号次第で、通話するかどうかを選択する」という「**番通選択**」や、twitter のあり様を例示しながら(濱野 2008a: 290-5)、むしろこのような自己のあり様が、人々のインターネット・コミュニケーションにおいては常態化しているのではないかと主張しているのである。

そして、そのような操作ログ的リアリズムに対応したものとしてアーキテクチャによる公共性は存在するのであり、そこでは内面を持って苦悩し、他人と公共的なコミュニケーションを取らなくても、公共性の問題に対処することができる。故に

平成期において、それまでの昭和的枠組み(大企業での正規雇用といったメンバーシップ)が温存され、そこから「漏れ落ちた人々」たちが、「生きづらさ」の解消と承認を求めて、インターネット空間を夜な夜なさまよっている、という図式ではないのか。あるいは自分たちの怒りや不満が既存の政治勢力やメディアには通っていない不満を抱える人々ではないだろうか。(濱野 2012: 393)

というような人々であっても、公共性に参画することが可能になるのである。

ここまで述べてきたことを表にまとめればこのようになるだろう。

表5 アーキテクチャによる公共性における自己のあり様

	市民的公共性	アーキテクチャによる公共性
自己のあり様	自然小説的リアリズム	操作ログ的リアリズム
具体例	公衆、ネチズン、草の根ジャーナリスト	引きこもり、オタク、既存の社会からこぼれ落ちたもの

2.3.4 アーキテクチャによる分裂

しかしそのようなアーキテクチャにより公共性がインターネット空間に発生するという議論とは反対に、まさしくインターネット上のアーキテクチャこそが、インターネットを分裂し、そこから公共性を消滅させ、社会的な問題に対応できなくしてしまうと主張する議論も存在する。Sunstein のサイバー・カスケードという概念や Pariser のフィルター・バブルについての議論がその一例である。

サイバー・カスケード

Sunstein は憲法学者の立場から、インターネットが討議に基づく民主制に危機をもたらすのではないかと議論をしている。Sunstein はこのように述べている。

第一の問題点は分裂、つまり言論によって多数の集団が成立することだ。情報通信の選択が集団ごとに違うわけだ。その結果の一つとして、相互理解が難しくなると考えられる。社会が分裂すると、過激主義や憎悪、そして暴力までも引き起こしかねないグループの二極化が進むことになる。もちろんインターネット等の新テクノロジーのおかげで、自身の声の反響を聞いたり、自らを隔離する能力が劇的に高まっている。重大な結果の一つとしてサイバー・カスケードがある。ある特定の事実あるいは見解が、多数の人が信じていそうだという理由だけで、広く行きわたる情報交換のプロセスのことだ。(Sunstein 2001=2003: 64-5)

サイバー・カスケードとは具体的にどのようにして生じ、どのような結果をもたらすのか。Sunstein は、まず殆どの政治的ウェブサイト(75%)が、自らの意見に反対する意見に対しリンクしていないし、例えリンクしていたとしても、それは殆どが「相手の見方がいかに危険で、愚かで、卑劣であるかを明らかにするのが目的である」(Sunstein 2001=2003: 75)ことを指摘した上で、このように述べている。

これはまったく自然で道理にかなっているとさえいえる。どこかのウェブサイトを閲覧した人は、同じようなウェブサイトをもっと見たいと思うかもしれないし、一定の考え方でウェブサイトをつくった人たちからすれば、反対意見を奨励したくないというわけだ。視点が定まったウェブサイトを閲覧する人が、どの程度似たような情報源を求めるかという問いへの決定的な情報は無い。だが、リンクや個人の行動について現在知る限りでは、人々は量的にも音量的にも増幅された自身の声の反響を聞いているようだ。これは民主的な観点からすれば、痛手といえるのではないか。

(中略)

重要な変化が明らかになりつつあると考えられる。選択肢の劇的な増加とカスタマイズの能力の向上は、現実の選択範囲の広がりや伴っている。そして多くの場合、選択は人口統計的な特色や以前からある政治信念あるいはその両方にマッチしている。(Sunstein 2001=2003: 75-6)

つまり、インターネットが普及し、情報の選択肢がこれまでとは段違いに増加した結果、人々はより自分の意見と適合的な情報のみを選択するようになり、反対意見に耳を貸さなくなっているのではないかという議論だ。

そして更に、そうやって同じ意見の人間が集まって一つのウェブサイトに集いコミュニケーションをすることにより、インターネットは集団分極化を促進させるとも、Sunstein は主張している。集団分極化とは「グループで議論をすれば、メンバーはもともとの方角の延長線上にある極端な立場へとシフトする可能性が大きい」(Sunstein 2001=2003: 181)という、心理学における仮説であり、そしてそれは様々な研究によって実証されていると、Sunstein は述べている。

そしてそのような集団分極化がインターネット上で発生することにより、社会的カスケードと呼ばれる現象がインターネット上で発生する、サイバー・カスケードが起きると、Sunstein は主張している。社会的カスケードとは、次のようなものである。

個人で十分な情報を持っていなければ、他人の声明や行動からの情報に頼らざるを得ない。様式化された例で考えてみよう。ジョアンは有害廃棄物のごみ捨て場が危険であることを知らなくて、メリーがその危険を当然に恐れるべきであると考えれば、ジョアンも恐怖へと駆り立てられるかもしれない。ジョアンとメリーが共にそのごみ捨て場を怖がって当然だと考えれば、カールも、逆が真理であるとの独自の情報がなければ、結局同じように考えるだろう。ジョアン、メリー、そしてカールが有害廃棄物のごみ捨て場が危険だと信じれば、ドンが3人の結論に意義を唱えるには相当の自信がなければならぬ。そしてジョアン、メリー、カール、ドンがこの問題で団結すれば、他の人達が後を追う可能性が出てくる。

この例は、情報が、例え完全に誤っていても、どのように伝播して受け入れられるかを示すものだ。(Sunstein 2001=2003: 94)

つまり、同じような考えの人で集まり、同じような考えの人達の間でばかりコミュニケーションを行うことにより、例え誤っていたり、あるいは誤っているとまでいなくても極端な傾向を持っていたりする意見であっても、何の抵抗もなく伝播して受け入れられてしまう、社会的カスケードとはそういうことであり、そしてそれがインターネット上で起こる「サイバー・カスケード」は、もはや現実問題として頻発しているというように、Sunstein は主張している(Sunstein 2001=2003: 95)

そしてSunstein は、サイバー・カスケードや、それをもたらす個人の選好による分裂が、民主制に危機をもたらすのではないかと主張する。

混合型民主制度の下で生活する市民にとって、分裂した情報通信市場はかなりの危険をもたらすことが十分に解明できたのではないだろうか。個人としての私達一人ひとりにとっても危険がある。ある種の意見だけに触れることは、ときにはサイバー・カスケードの結果としてエラーや混乱を引き起こすことになる。このプロセスはすでにある意見を不動のものにし、嘘や過激主義を広め、そして人々が共有している問題の解決への協力を水をさすことになるので社会全体にとっても危険がある。(Sunstein 2001=2003: 100)

フィルター・バブル

そしてPariserは、Sunsteinのこのような議論も参照しながら、近年のインターネットはより、その利用者が好む情報だけを提示できるよう進化し、そしてその結果人々はひとりずつ、自分だけの情報宇宙の泡に包まれる、フィルター・バブルという現象(Pariser 2011=2012:)に直面すると述べ、そしてそれが次のような不安を招いていると指摘している。

他人の視点から物事を見られなければ民主主義は成立しないというのに、我々には

囲まれ、自分の周囲しか見えなくなりつつある。事実が共有されなければ民主主義は成立しないというのに、異なる平行世界が一人ひとりに提示されるようになりつつある。(Pariser 2011=2012: 14)

このようなフィルター・バブルを引き起こすものとして、Pariser はパーソナライゼーションという近年インターネット上で活用され始めている機能、これまでの議論の用語で言うならばアーキテクチャに注目している。パーソナライゼーションについて Pariser はこのように説明している。

フェイスブックなど、パーソナライズされたニュースフィードに頼る人が、最近、急速に増えている。

(中略)

パーソナライゼーションは、フェイスブック以外にも情報の流れをコントロールしている。ヤフーニュースなどのウェブサイトからニューヨークタイムズ紙が作ったニュースリーダー、ニュース・ドット・ミー (News.me) まで、いずれも、我々の興味関心に合わせた構成となるように作られている。

(中略)

新しいインターネットの中核をなす基本コードはとてもシンプルだ、フィルターをインターネット上にしかけ、あなたが好んでいるらしいもの—あなたが実際にしたことやあなたのような人が好きなこと—を観察し、それをもとに推測する。これがいわゆる予測エンジンで、あなたがどういう人で何をしようとしているのか、また、次になにを臨んでいるのかを常に推測し、推測のまちがいを修正して精度を高めてゆく。(Pariser 2011=2012: 18-9)

つまり、ある個人のインターネット上での行為についての記録を集め、そしてそこから、その個人が好む情報を予測し、個人化(パーソナライズド)された情報として提供するアーキテクチャが、パーソナライゼーションなのである。

そして Pariser は、このようなパーソナライゼーションによって生じたフィルター・バブルの中で個人は自分が好まない情報を摂取しないことにより、「確証バイアス」と呼ばれるような、自分の思想に適合的な情報を真実と思いがちになる傾向が強化され、その代わりに「意味脅威」と呼ばれるような、何がどうなっているかよくわからないために、新しい考え方を理解し身につけるようにする傾向を弱めてしまうと述べている (Pariser 2011=2012: 108-11)。

そしてその結果として、個人は自分が信じるものについて、その信じるものを確かめるための情報を集めてしまう「自分ループ」に陥ってしまうというふうに Pariser は指摘している (Pariser 2011=2012: 153)。そして更にインターネットが現実世界で重要なものになっていくにつれ、そのようなフィルター・バブルはインターネット上での自己だけでなく、現実での自己も含めた自己全体を覆うものへと進化していつてしまうのではないかと、Pariser は危惧しているのである (Pariser 2011=2012: 260)。

アーキテクチャによる分裂

このように、インターネットのアーキテクチャはむしろ人々を分断し、孤立化させていく特性があるのではないかというのが、Sunstein や Pariser の主張である。そして、両者が共にそのような分断や孤立化が民主制に重大な危機を及ぼすと想定していることから分かるように、その分断や孤立化は公共性を衰退させかねないといえる。なぜなら、各人が自らの価値観を絶対視し、バラバラに社会に対して行動をしても、それは社会問題を解決し得ないからだ。公共性には、それがどのようなものであれ、人々が共同して物事の解決に取り組むことが不可欠なのであるが、アーキテクチャによる分断はその共同そのものを破壊してしまう可能性を秘めているといえよう。

しかしこのような議論に対し、アーキテクチャによる公共性が可能であると述べる濱野は次のように反論している。

また、こうした論者たちとは対照的に、キャス・サンステーンは、インターネットが民主主義にもたらす危険性を次のように指摘した (Sunstein [2001=2003])。それは個々人の欲求ごとに情報を最適にフィルタリングし、人々の興味関心をばらばらに分類させ、公共的な関心を奪い、ひいては「サイバー・カスケード」と呼ばれるような極端な世論形成へと導いてしまう、と。だが「繋がり社会性」は、見方を変えれば、ある種の「公共性」に寄与する役割を果たしているということもできる。

(中略)

「サイバー・カスケード」的状态の発生すらも「共通知識」形成の契機として利用される、ある種の貪欲な可能性をここに見てとることができるだろう。(濱野 2007: 50)

つまり、例えサイバー・カスケードが発生しても、サイバー・カスケードが共通知識として共有されるなら、それは公共性の契機となりうるものであり、「繋がり社会性」を促進するアーキテクチャならば、むしろ人々の孤立化を防ぐことができるのではないかと、このように濱野は主張しているのである。

2.4 それぞれのアプローチの共通点と相違点

この対立点についてより詳細に考えていくために、まず Sunstein の議論と濱野の議論の共通点と相違点を整理してみよう。

まず、濱野と Sunstein の議論の重要な共通点としては、両者とも、限定された小集団が形成され、その中でコミュニケーションが行われることに必ずしも否定的な評価を下しておらず、むしろそのような限定された小集団が形成され、その中でコミュニケーションが行われることに一定の肯定的評価を下しているという点があげられる。

濱野は「皆で一つの体験を共有する」という同期的体験は、一人で孤独に体験するような非同期的体験では得られない満足の人々に与えるものであるとした上で、しかしインターネットは、それを利用する人の好みに応じたコンテンツを受け取ることができるという性質により、それまでのテレビや新聞のように「みんなが一齐に同じタイミングで同じコンテンツを見る」ということが難しいとしている。そしてその上で、ニコニコ動画のようなサービスのアーキテクチャは、先述した擬似同期とよばれる性質により、それぞれが自分の好みに応じたコンテンツを受け取っても、その好みが同じな人々の間で同期的体験をすることが可能になっていると述べているのである。

このように、インターネットやハードディスク・レコーダーなどの出現によって、基本的に現代のメディア環境は非同期型中心にシフトしつつあると考えられてきました。しかし、非同期型メディアにも弱点があります。それは、非同期型だとコミュニケーションチャンネルが膨大に細分化してしまうので、どこで何が盛り上がっているのかが見えにくくなってしまおうという問題です。そのため、孤独に耐えられるか、よっぽど自分の趣味の体系を確立した人でなければ、非同期型=オンデマンド型のメディアだけでは満足するのは難しくなります。しかし、すべての人があらゆるジャンルにおいて、そういうタイプの人になれるわけではありません。

そこで登場したのが、ニコニコ動画でした。ニコニコ動画のユーザーは、基本的には非同期型のハードディスク・レコーダーを使うように、自分の好きなタイミングで自分の好きな動画を見ることができ、しかし動画上にコメントが流れることで、まるで他のユーザーたちと同じ場所で、いっしょにわいわいがやがやと動画を見ているような感覚が得られる。それはかつてテレビの時代に共有されていたような、「お茶の間のシンクロ感」を再現しているようなものです。つまり、ニコニコ動画の擬似同期性は、テレビを再び擬似的に取り戻すということ、すなわち「バーチャルお茶の間」の実現を意味していることができます。

このように、ニコニコ動画の「擬似同期性」は、マスメディアの同期性とインターネットの非同期性の「いいとこ取り」になっています。(濱野 2008a:228-9)

つまり、濱野は、好みを共有する限定された集団での盛り上がりでも、社会全体における盛り上がりと同じ機能を果たすとしているのである。そして、このような盛り上がりは、「孤独に耐えられるか、よっぽど自分の趣味の体系を確立した人」以外の人間にとっては必要であると主張しているのである。

そして Sunstein も、同じ傾向を持つ人々が集まった周囲とは孤立している、Sunstein のいう孤立集団が存在し、そしてその中でコミュニケーションが行われることは重要であるとしている。なぜなら、そのような孤立集団の社会全体の「一般的『公共圏』」では取り上げられないようなマイノリティが、自らの見解を発展させ、社会全体に訴えかけることを可能にするからである。

一般的「公共圏」へ向かう動きに、孤立集団の熟議によるものがさほど多く含まれていなければ、極端主義や不安定さが生じる可能性は減少するだろう。しかし同時に、そこには息苦しさを覚えるほどの斉一性が生まれる可能性もある。(Sunstein 2000=2012:52)

「孤立集団」による熟議の利点で特筆すべきは、それがなければ通常の討論においては目にとまらなかつたり、沈黙を強いられたり、あるいは抑圧されたりしていると考えられる立場の発展に資するところにある。多くの文脈で、これは非常に大きな利点となる。多くの社会運動が、この道を通って形成された(思いつく例として、フェミニズム、公民権運動、宗教的保守主義、環境保護運動、そしてゲイやレズビアン権利運動について考えてほしい)。(Sunstein 2000=2012:61)

このように濱野と Sunstein の両者とも、同じ趣向を持つような孤立集団が存在し、その中でコミュニケーションが行われること自体は否定していない。しかし、その孤立集団から生まれた知識や見解がどのようなものであり、そしてどのように活用されるかについては、大きく意見が異なる、相違点となっているのである。

まず濱野は、先に「多様性の生成」の項で述べたように、ニコニコ動画などのような同じ好みを持つ人々が集まる場所においても、時間的なズレによって多様性のあるメタデータ(タグなどの、作品そのものではなく、その作品に付与される情報のこと)が生まれ、そしてそれによって多様な作品が生成されるとしている。

しかしニコニコ動画では、一つの作品あたり 10 個までのタグが入るというその仕様上、メタデータの側のほうが「多様性」を有することになる。しかもそのタグの数々は、ここに見たような「淘汰」と「拡散」のメカニズムを通じて、つねに生成変化を繰り返しているのだ。

ニコニコ動画のタグは、もはや単なる動画の「分類」という役割を超えて、多様なコンテンツの「コモンズ」を媒介する、「触媒」としての機能を持つに至っている。(濱野 2008c:344)

ただ、このような多様性がどうやって同じ好みを持つ集団の外の社会全体に波及していくかについては、濱野は詳述していない。ただ濱野は、インターネット上で生まれた、タグのような「共通知識」もローカルな共同体を超えることもありうる(50)。そしてその例として、韓国のインターネットにおいてはポータルサイトが既存のマスメディアの議題設定機能を限定的に果たし、そしてその中では限定された集団での盛り上がりが社会全体に広く知らしめていると主張している

(濱野 2006).

単に多くの読者を獲得しただけではない。韓国ポータルの社会的な成長は、「犬糞女事件」と呼ばれる、2005年に韓国社会を騒然とさせた事件にまつわるエピソードからも窺い知ることができる。まず、犬糞女事件の顛末を簡単に紹介しておこう：ある日地下鉄の電車内で、とある女性がペットの糞を始末せずに放置して電車を降りた。その一部始終はたまたま携帯機器でビデオ撮影されており、これがネット上にアップされた。この女性の不道徳ぶりに憤慨したネティズンたちは、いわば「魔女狩り」のごとく、ネット上で情報交換を交わしあって、その女性の個人情報や白日の下にさらけ出してしまった。この事件は、インターネットが市民の市民による「監視と私刑」の装置にも転化するという意味で、韓国社会はもちろぬ、英語圏からの注目も集めた。

こうした魔女狩りの作業を中心的に担ったのは、「dcinside」と呼ばれる画像掲示板サイトのユーザーたちだったといわれている。dcinsideはいわば日本の「2ちゃんねる」に相当する韓国の巨大掲示板と呼べるサイトで、実際日本の2ちゃんねるでも、「犬糞女」のような事件は頻繁に起こっている。さて、ここで想像してみてもいいのだが、日本でこうした事件が社会的論議的になったとすれば、おそらく「2ちゃんねる」という匿名空間が、無責任で非道徳的な行為を助長している」という支配的な論調になることは間違いないと思われる。しかし、韓国はそうではなかったのである。むしろ非難の矛先を向けられたのは、2ちゃんねる的存在のdcinsideではなく、Naverなどのポータルだったという。つまり、ポータルはこの魔女狩り騒動において、その存在を社会に広く公知するというかたちで「火に油を注いであつた」のであり、その責任を負うべきだというのが韓国社会の認識なのだ。ここでは、日韓どちらの認識が正しいのかという問題はあまり重要ではない。この事実が示しているのは、いまや韓国ポータルが、事件を社会に広く知らしめる影響力—メディア研究の言葉を使えば「アジェンダ・セッティング(議題設定)」のカー—を持ち始めているということではないだろうか。(濱野 2006)

このことを敷衍するならば、濱野は限定された小集団内で生まれた多様性を社会全体に伝えるような、ポータルサイトのようなメディアのような存在により、多様性を社会全体に伝達していくことを想定していると思われる。

一方Sunsteinは、孤立集団内における議論は、「集団極(性)化」と呼ばれるような、意見をより極端な方向にまとませる効果があると述べている。

「集団極化」という用語は、標準的用法であるとはいえ、いくらか誤解を生みやすい表現である。これは、集団の構成員が二極に別れることを意味するわけではないし、異なる集団の間での意見の多様性が増すことを指すわけでもない。最終的な結果としてそうなる可能性はあるが、むしろ、この用語が指すのは、なんらかの事案や問題について議論する集団の内部で生じることが予想される変化である。その変化が起こると、集団とその構成員は、当初彼らが有していたさまざまな傾向の中間に位置する意見ではなく、いつそう極端な方向へと立場を変え、一体性を強める。熟議は、集団構成員の意見の不一致を減らし個々の相違を縮減する行為と同時に、熟議が始まる前の構成員個々の判断よりも極端な見解を全員一致で採用させる効果を持つのである。(Sunstein 2000=2012:24-5)

つまり、Sunsteinの議論においては、孤立集団内での討議は極端な方向へとそれぞれ個々の判断を誘導するものであり、孤立集団内では多様性は生じ得ないということになる。

そのことからSunsteinは、Habermasが(市民的)公共圏という観念において提唱したような、それぞれの孤立集団に属する人間が異なる意見を持つ人たちと意見交換を出来るような社会空間を作らねばならないと主張している。

民主的社会における最善の対応は、どのような孤立集団も競合する見解を遮断しないようにすること、そして、一定の時点で、孤立集団に属する構成員と彼らとは意見が異なる人々たちとの間で、意見交換がしっかりと行われるようにすることである。(Sunstein 2000=2012:64)

どんな制度であれ、その設計者や指導者にとって有意義なのは、孤立集団の熟議と、さまざまな孤立集団のなかにいた人たちの見解を含む、幅広い立場からなされる討論、その両方にとって十分な広さの社会空間の創出を推し進めることである。(Sunstein 2000=2012:65)

そしてそのような社会空間を作る方法として、Sunsteinは「マスト・キャリー」ルールというものを提唱している。これは、ある意見をメディアで伝える場合は、それに反対する立場の意見も同時に伝えるようにするというルールである。1970年代のアメリカでは、国民が複数の異なる意見にアクセスできるようにするために、テレビ・ラジオ局に「公平原則」という、一定時間公的な問題についての意見と、それへの反対意見を報道することが義務付けられていた。Sunsteinはそのようなルールをマスメディアやインターネット・メディアにおいても設けることを主張しているのである。(Sunstein 2001=2010:183-8)

ここまで述べた共通点と相違点をまとめると次のように言うことができるだろう。

- 両者とも限定された集団(孤立集団)が人々の見解の源泉であることを認めている
- 濱野は限定された集団においても多様性は生まれうると考えている

- よって必要なのは限定された集団内で生まれる多様な見解を広く共有する方法である
- Sunstein は孤立集団において多様性は生まれず、極端な方向に画一化されると考えている
 - よって必要なのは、孤立集団の外でそれぞれの見解について議論しあう公共圏である

このような共通点と相違点から考察すると、以下の2点こそが、インターネット上で公共性が存在し得るかについては重要であると述べることができるだろう。

まず1点目は、限定された集団内で多様性は生まれるかということである。これがもし生まれるのならば、わざわざ孤立集団を超える討議の場が存在しなくても、孤立集団内部で多様な意見が生まれ、それに基づいて公共性のある問題を処理することが可能になるかもしれない。しかし一方で、もし限定された集団が極端な方向に画一化されてしまうのならば、それは社会の多様性に対応できず、公共性を持ち得ないといえる。

そして2点目は、限定された集団内での見解がどのようにその限定を超えた社会全体に伝われば公共性を持ちえるかということである。濱野はポータルサイトなどを例に上げながら、限定された集団内で提起された問題をそのまま社会全体に周知する、「祭り」を引き起こすようなアーキテクチャさえあれば、それにより公共性が生まれ、公共性のある問題に対して社会が対処しうようになるとしている。一方で Sunstein は、ただ孤立集団の見解が宣伝されるだけでは、それは公共性を持ち得ないとし、孤立集団が異なる人々の見解を理解し、そしてそこで双方を尊重した意見交換が行われなければならないという立場である。Sunstein のような立場においては、濱野が示したような「祭り」は、その祭りが推し進める見解と別の見解との対立を解決する能力はないため、公共性を持ち得ないとなる。

2.5 仮説

それではここまでの公共性についての理論的考察をまとめ、そしてそれぞれに評価を行った上で、現代日本のインターネットにおける公共性に対して仮説を提示する。

Habermas の述べるような市民的公共性は、一言で言うならば、異なる他者がそれぞれの意見を討議することによって、公共性のある問題を解決していこうとする立場である。このような市民的公共性を、Sunstein は規範としては支持しながら、しかし現実の社会においては、サイバー・カスケードといった問題により、現実のものとはなっておらず、現在のインターネットのコミュニケーションに公共性は存在しえていないとしている。

一方、濱野は市民的公共性とは違う公共性がインターネット空間には見いだせるとしている。限定された集団内でも多様性と、主観を超えた客観的な同意は生まれるのであり、あとはそれを限定された集団の外へ公知するメカニズムさえあれば、市民的公共性の行う討議と同様に公共性のある問題に対処しうるといえる。

この2つの意見の違いは、「限定された集団内で多様性は生まれるか」、「限定された集団内での見解がどのようにその限定を超えた社会全体に伝われば公共性を持ちえるか」という2点についての考えの食い違いから生まれているといえるだろう。

この2点でなぜ考えが食い違うか、その理由は、両者が、同じインターネット上でのコミュニケーションでも、全く違う分野のコミュニケーションを参照していることに起因するのではないだろうか。

まず「限定された集団内で多様性は生まれるか」点についてだが、濱野はニコニコ動画やCGM¹⁾といった、文化についてのコミュニケーションを参照しながら自らの議論を構築し、アーキテクチャによる公共性が存在しうるとしている。文化の場合、同じ文化を愛好するもの同士でも、別に全く同じように文化を生産し楽しむということは求められない。例えばロックや演歌といった音楽のジャンルを愛好する者同士でも、それぞれのジャンルの枠内ならば、今までとは違う音楽を作ったり、それを楽しんだりすることは好ましいこととされる。もちろん、その多様性とはあくまでそれぞれのジャンルの枠内でしか認められないものであるわけだが、しかしそれでも多様性は存在するのである。

それに対し、Sunstein が議題にしているような政治的問題についてのコミュニケーションでは、多様性はあまり尊重されない。なぜなら、政治においては多人数で団結することによりヘゲモニーが獲得できるため、同じ主張をしているものの中で意見が分裂してしまうことは、それだけ影響力が低下するというに繋がるからだ。政治においては、同じグループに属する人々は、特に異なる勢力との抗争の場としてのみ政治を捉える場合、できる限り同じ意見で統一したほうがいい。そのため、意見を一体化させる同調圧力がより強力に働きやすいのである。

そして、「限定された集団内での見解がどのようにその限定を超えた社会全体に伝われば公共性を持ちえるか」という点についても、観測対象の違いが見解の違いを生み出している。文化の場合、どのような文化が良いか悪いかということは、個人にとって重要であることが少ないため、いきなり自分が知らないような文化が社会全体で流行してもそれほど拒否反応は起きない。これも音楽で例えるならば、売上ランキングの上位があるジャンルの曲で独占されることによって、そのジャンルを嫌というほど聞かされることになったとしても、大多数の人はそれを止めたいと思うほど強烈な反発心は抱かないのである。

あるいは「犬糞女」事件のように、社会全体でアプリオリに存在している倫理に根ざす問題も、それほど討議が必要とはならないだろう。犬のフンを片付けずに放置するのは、ほぼ誰にとっても悪いことなのである。もちろん、それに対して個人情報や後悔するほどの制裁を与えることがいいかどうかは、それぞれの倫理基準によって異なるだろうが、少なくとも「犬のフンを片付けないことは悪い」ということ自体に対する反論はほとんどないだろう。これらのように、強烈な反発を引き起こすような異なる見解が存在し得ない問題については、そこに議論が存在

しなくても、十分対処することが可能なのである。

一方、Sunstein が参照しているのは、環境保護や中絶といった、それぞれが確固たる見解を持ち、他の見解が社会全体に適応されることを激しく拒絶するような、そんな政治的問題である。そのような問題においては、それぞれの異なる見解は公平に論じられる必要があるため、討議ということが問題の対処には極めて重要になるのである。

このように、公共性のある問題に対してどのような対処をすべきかは、それぞれの問題がどのような問題であるかによっても大きく異なることが大いに予想される。つまり、一口に「インターネットの公共性」と言っても、インターネット上で提起される公共性を持つ問題が多岐にわたる以上、そこでどのように公共性が存在し得るか、あるいはし得ないかは、大きく異なってくる。また、インターネットにおけるコミュニケーション全てを調査することは不可能な以上、調査からいえることでインターネット上における全体に対する評価を下すことは出来ない。よって本論はあくまで事例研究であり、インターネットにおけるコミュニケーションの一例にすぎない。

そして、どのようにしてその事例を選択するかについては、公共性を持つ問題を解決することがほんとうに重要になってくる場面は、Sunstein が述べるような、よりシビアな状況であることが考えられるため、インターネットにおけるコミュニケーションの、よりシビアな状況について調査していくことにする。そしてそのような事例において、公共性が果たして存在しうるかを、あるいはし得ないのか、し得ないとしたらいったいなぜ存在し得ないかを明らかにしていくことにより、インターネットにおけるコミュニケーションの研究に対し、一知見を提示することが、本論の最終目的である。

そして、事例の分析において用いる仮説は次のとおりである。

- **アーキテクチャによる公共性は、限定的にしか通用しない**
- **アーキテクチャによる分裂により、公共性への対処が困難となる**

では、これらの仮説を検証する事例はどのような事例が適切か、日本におけるインターネット上でのコミュニケーションに対する研究・考察それぞれの研究・考察がどのような知見を残してきたかをまとめた上で、論じていく。

3 先行研究

この章では、まず日本のインターネットにおける公共性についての研究・考察の歴史をまとめていく。

日本のインターネットにおける公共性についての研究・考察は、その研究・考察が観察の対象にしたコミュニケーションの違いにより、主に次の3つの類型に分けられる。

まずインターネットが日本に導入され始めた初期において、情報技術に詳しい先進的なユーザーが民主的なコミュニティをインターネット上に創りあげようとしていた様子を観察した研究が挙げられる。このような研究においては、インターネットのような技術により、社会的属性に束縛されない個人が自由な討議を行える、電子公共圏がサイバースペース上に作れるのではないかとしていた。

しかしインターネットが人々に普及し、2ちゃんねるのような匿名掲示板が現れてくるにつれ、インターネット上でのコミュニケーションは必ずしも先に述べたような理想通りにはいかないということが分かってきた。そしてそんな中で、ネット右翼と呼ばれるような、ネット上で排外主義や反マス・メディアといった主張を行う人々や、炎上と呼ばれるような一人の人間に多数の人間が批判や誹謗中傷を浴びせかける現象が注目を集め、そのような人々・現象についての研究・考察が多くなされるようになってきた。それらの研究は、インターネット上での表現は必ずしも公共性を持ったコミュニケーションには成り得ず、むしろ排他的であったり極端主義に向かったりするような意見を主張する場になってしまうこともあると示された。但し、一体なぜインターネット上での表現がそのような排他的な性質を持ち、そこで討議が不可能になってしまうか、その理由については未だ諸説あり、結論は出ていない。

そして、そのようなインターネットの負の側面についての研究・考察が数多くなされる一方で、SNS やソーシャルブックマーク、マイクロブログ、動画共有サイトなどの、インターネット上に近年新たに現れてきた、「Web2.0」と称されるような web サービスを題材にしながら、そのようなサービスにおいては2ちゃんねるなどでなされたような、極端で排他的な主張がただ垂れ流されるのとは違う、生産的なコミュニケーションが生まれるのではないかという主張をする研究・考察が現れるようになってきたのである。

このような3つの類型を示した上で、本論では、2番目で示されたようなコミュニケーションが、インターネットにおいては一般的であることが予想されることから、2番目のようなコミュニケーションを行なっていると思われる人々を研究対象にしていると示す。

そして最後に、これまでの先行研究では、実際に人々がどのように思ってインターネット上でコミュニケーションをしているかについての調査が欠けていたことを指摘し、そのような欠けている点を埋めるために、本論ではブログの調査とインタビューという研究方法を取ることで、インターネット上でのコミュニケーションを過程として理解し、仮説を検証していくと述べる。

3.1 電子公共圏論

日本で始めてインターネットが使われたのは1989年からであるが、それ以前、1982年ごろ(そ合法なものとして公になったのは1985年)からも電話回線を用いて個人のパソコン同士を接続する、「パソコン通信」とよばれるサービスが行われており、そこでは現在でいうメーリングリストや掲示板といったようなシステムが稼働していた。(村井1995:154)(ばるばら2005:440-4)

それらのパソコン通信や初期のインターネットにおいては、学術関係者や技術者や多く集い、そして様々な公共的な問題について活発に討議を重ねていた。そこでパソコン通信や初期のインターネットを観察した研究者やジャーナリストや、インターネットを利用した市民活動家たちは、このようなサイバースペースに作られる討議の場が、現代においては衰退してしまった公共圏を新たに復興させるのではないかと考察した。

例えば Howard は逗子市の富野暉一郎市長(当時)にインタビューし、日本においても市民運動にパソコン通信が使われ、その中で市民が公共性のある問題について議論を行なっていると述べている。

1992年に私が逗子市役所で富野市長に会ったとき、彼は電子会議の運動が草の根の市民運動にとって重要な役割を担っていたことを認めた。

(中略)

池子の森運動の肯定的な体験を背景として、数百人もの市民が、市長の呼びかけを受けて、市の図書館システムを見直す手助けとして、オンラインでの議論を行った。「逗子の市民は、自分たち自身の運命は自らの手で決定できることを証明しようとしているんです。これは、アメリカが何年も前に私たちに教えてくれたことなんです。日本を民主化するための、あなたがたの軍隊の占領政策は、とても成功を収めたのです」と、富野は微笑みながら私に行った(Howard 1994=1995:368-9)

また吉田は1991年から1995年まで解説されていたパソコン通信の掲示板を観察する中で、そこでは Habermas のいう討議が行われていたと述べている

この議論の結果として、会員個人のアクセス・データは保護に値する個人情報であるという点で事実上の合意が形成されたといえる。またこのことに関連して、やはりそれまでは一般にほとんど論じられなかったテーマとして、「草の根」BBSにおけるROM会員の位置づけないし評価という問題も(明確な合意こそ得られなかったが)この議論の中で浮上することとなった。

それまで自明視されていた規範の妥当性の根拠を批判的に問い、新たな規範を創出するという意味で、この議論はハーバーマスのいう「討議」(Diskurs)の一種であったと解釈することができる(吉田2000:76-7)

このように、80 年台後半から 90 年代前半の頃の日本におけるパソコン通信やインターネット研究においては、そこに市民的な議論や討議といった公共性が芽生えつつあると述べられてきた。

ただ一方で吉田は、加藤晴明と成田康昭の研究を引きながら、それとは違うあり様もサイバースペースにおいては観察され、議論を行うことにより何らかの結論を導き出すのではなく、コミュニケーションを行うこと自体が楽しみとなり目的となっている場合もあると述べている（吉田 2000:98-101）。ただ一方で、そのようなコミュニケーションはコミュニケーション自体が目的である以上、インターネット上のみ完結し、インターネットの外の「現実社会」に影響をおよぼすことはないとされている。このような議論に対して吉田は、インターネット上でのコミュニケーションが公共性のある議論に向かうか、コミュニケーション自体の楽しみを追求する方向に行くかは、人々がどちらのコミュニケーションを指向するかにかかっていると述べている（吉田 2000:111-8）。

3.2 2ちゃんねる・ネット右翼論

しかしインターネットが人々に普及していくと、先述したような市民的な議論の場とはいえないような存在が現れ始めるようになってきた。

例えば 1997 年 5 月の神戸市小学生連続殺傷事件では、当時未成年だった容疑者の実名がインターネット上の掲示板で公開され、大きな注目を集めた。（ばるばる 2005:192-3）。そして 1999 年には 2 ちゃんねるという掲示板が開設された。そこでは川でバーベキュー中に、増水した河川に流されて死亡した被害者に対し、彼らが増水の警告を無視していたことについてバッシングが行われたり、動物虐待の実況中継が虐待の犯人によって行われ、その後虐待を行った犯人の身元を特定しようとする運動が繰り広げられたりした。（ばるばる 2005:266-9）

このような掲示板での運動の盛り上がりの一例として遠藤薫は、「塩爺」ブームと呼ばれた、2001 年から 2003 年にかけて起きた、当時財務大臣だった塩川正十郎について、そのキャラクターを面白がって起きた、ネット上での盛り上がり进行分析した。そしてその結果を次のように記述している。

このような塩爺ブーのプロセスは、「ネット発」のブームの典型的なパターンを示している。以下にそれらをあげてみよう。

第一に、2 ちゃんねるで塩川氏関連のスレッドが立ったのは、塩川氏の就任会見のテレビ報道が発端になっていることである。2 ちゃんねる利用者たちはしばしば同時にテレビを見ながら書き込みを行っており、ネット言説がマスメディア報道に同期して展開、増殖していくのは、一つの定形といえる。

第二に、塩爺関連スレッド内の書き込みは、必ずしも肯定的評価だけではなく、否定的評価もあった。一般に、2 ちゃんねるの書き込みは多様な意見（「荒らし」と呼ばれる破壊的言説も含まれる）の集合であり、一つのスレッドで合意が形成されること、いわば、スレッド内「世論」が形成されることは、ほとんどない。

第三に、「塩爺」というネーミングは、記者会見時の塩川氏の印象から生まれたものであり、それが政治家塩川正十郎の実像とは異なる「イメージ」にすぎないことは、2 ちゃんねらーたちにも十分意識されている。むしろ、実像を離れた虚構を遊ぶことが 2 ちゃんねらーたちの楽しみなのである。このことは、2 ちゃんねるでしばしば起こる「祭り」に共通した認識と言える。（遠藤 2004:63-4）

つまり、2 ちゃんねるといった巨大掲示板での盛り上がりは、参加者が提示された問題について真剣に議論しているのではなく、あくまでそれが虚構の「イメージ」にすぎないことを分かって遊んでいるにすぎないというのが、遠藤の分析である。

そして遠藤は、このような遊びはその性質上、言説を抗争させることが遊びであるから、一定の方向に収束していくことはめったに起こらないと述べている。

しかも、ここまで見てきたように、実際に起こった出来事を子細に分析すれば、ネット（掲示板）上の議論は、アジテーションによって、あるいは、付和雷同的集合現象によって、一定の方向に収束していくということは（日本において筆者の知る限りでは）滅多に起こらず、むしろ、アジテーションを忌避し、議論は相互に抗争し合い（言説の抗争自体が掲示板上で自己目的化していると思われる例も多い）、拡散し、どこまでも漂流していく例が一般的であるとかんがえられるのである。（遠藤 2004:72）

この遠藤の指摘は、前章で記した濱野の「多様性の生成」が、掲示板での議論においても起きていくことを示していると言うこともできるだろう。

ただ一方で、2 ちゃんねるのような匿名掲示板では全てが遊びであり、人々が真面目に何かを主張することはまずないというこのような議論に対し、反証となるような存在も 2002 年ごろから観察されるようになってきた。いわゆるネット右翼という存在である。

3.2.1 ネット右翼の来歴

ネット右翼という言葉は 2005 年頃からマスメディアに登場し始めてきた。例えば新聞記事に最初に登場するのは、産経新聞が一番早く、2005 年 5 月 8 日の「【断】「ネット右翼」は新保守世論」というコラム記事であり、毎日新聞においては 2006 年 5 月 1 日の「特集ワールド・ちょっと待った!：怒りはどこへ…?」という特集記事であり、そして朝日新聞においては 2006 年 5 月 5 日朝刊の「萎縮の構図：6 炎上 他人のブログ、はげ口に」という記事が最初である。ただ、朝日新聞の記事においても、「数年前からネット上で使われ出した言葉」という説明がネット右翼という言葉になされていることから分かるように、ネット右翼という呼称自体は 2000 年代前半から使われ始め、更に韓国批判・マスメディア批判といったネット右翼によくみられる主張は、それ以前から

あった。

元々日本のインターネットは大学のネットワークのネットワークから生まれ、初期の利用者も学生が多く、先に述べたようにどちらかといえば革新的な使い方(市民運動などへの利用等)が多かった。ただその中でも、アメリカから輸入されてきたサイバーリバタリアニズム(インターネットなどのサイバー空間では国家などの規制が一切無い完全に自由な表現が行われるべきだとする主張)や、それに基づくブルーリボン運動(拉致被害者支援の運動とは別。当時アメリカで制定されようとしていた通称通信品位法というインターネット上での表現を規制する法律に対し、ホームページ上に青いリボンの画像を掲示することによって反対の意志を示そうとする運動)が1996年2月頃から日本のホームページでも行われるようになったりした。(ばるぼら 2005: 80)

そして、先に述べたように1997年5月は、神戸小学生連続殺傷事件において、加害者の少年の名前がある掲示板に書きこまれるということがあったわけだが、それを当時産経新聞記者だった安藤健二が「反動!」という自らのホームページに転載し、報道規制をするマス・メディアを批判したりするなどした。つまり、「表現の自由」の一例として、未成年の犯罪者の名前公開などを挙げ、それをしない既存のマス・メディアや、それを規制する理由としての「人権擁護」に反対するという形で、ネット右翼に特徴的な「マス・メディア批判」、「人権批判」の流れは脈々とあったのである(ばるぼら 2005: 93)(ばるぼら 2005: 192-3)。

ただ、それらのような動きが、今のような反韓国などの排外主義的主張や、靖国神社参拝賛成などのナショナリズムに結びついたのは、やはり2ちゃんねるにおいてだった。1999年5月に開設された「2ちゃんねる」においては、匿名で書き込みが出来ることやその規模が大規模なこと、「盛り上がり」を可視化するアーキテクチャが優れていたことにより、どんどん巨大化していった。そしてそんな中で、2000年頃から、徐々に現在の韓国批判の議論の原型が出来ていったと、大月隆寛は述べている(大月 2005: 30)。ただこの時期においても、決して2ちゃんねる上だけでネット右翼が存在していたわけではなく、個人個人のホームページなどにおいても韓国批判のようなことは行われていた(それは現在に至るも同じであり、ホームページの多くはブログなどに姿を変えている)。

だがそれがより大きな流れとして可視化されてきたのは、2002年7月の湘南海岸ゴミ拾いOFFだったといえる。

これは、2002年の7月に、フジテレビの27時間テレビの企画で朝からゴミ拾いが行われる予定だった。そのゴミが、前日の夜に2ちゃんねる利用者(通称2ちゃんねらー)約100人の手によって事前に拾われてしまったという事件であり、背景としては、当時ワールドカップにおける報道等で親韓国的な報道をしたフジテレビが敵視されていたことや、その年の27時間テレビがいつもの27時間テレビと違い、慈善(2ちゃんねらーたちの言葉で言うならば「偽善」)色が強かったことなどが挙げられる。しかしこのOFF会の参加者の動機は様々で、前述のようなことを動機とした人間もあれば、「拾うゴミがなくなったらどうなるのか」といういたずら目的、またただ単にお祭りに参加したかったなど、様々な動機が参加者には見受けられた。

このような現実社会と連動した、大きな盛り上がりを生む「祭り」(インターネット上の人々が掲示板などで集まり一つのことをして盛り上がることを通じて、韓国批判などの議論もネット上で共有されていった(『マンガ嫌韓流』(山野 2005)においても、2002年ワールドカップが、反韓国に至る重要なメルクマルとして描かれている)。他にも「全板人気トーナメント」(2002年に行われた2ちゃんねる内にある「板」それぞれの人気投票をネットで行うという企画。よりおおくの票を集めるために、それぞれの「板」が応援動画を作成して公開したりする中で、「ハングル板」や「ニュース極東板」といったネット右翼の集まる板が、質の高い動画を作成して配布。ネット右翼的な議論がより広がり一因となった)など、当時開かれた「祭り」の多くにはネット右翼的な人々の参加が見られた。

さらにこの時期には「ネット右翼」であってもOFF会や、ピラ配りなどの街頭に出る活動も現れ始め、2002年ごろから「靖国神社に参拝するOFF」という形で実際に8月15日に靖国神社に参拝するイベントが定期的に行われるようになったり、2003年に新潟港に北朝鮮(朝鮮人民共和国)の貨客船万景峰号が停泊するのに抗議に行くOFFが企画されたり、TBSなどのテレビ局の前で抗議ピラを配るなどのイベントが見られた。

そして2005年には『マンガ嫌韓流』が出版されたり、またネット右翼についての本として『啾う日本の「ナショナリズム」』(北田 2005)といった研究書が出版されたりして、ネット右翼が大きな注目を集めるようになったのである。

3.2.2 ネット右翼の内実

辻大介・藤田智博のインターネットユーザーからサンプルを取ったアンケート調査によれば、ネット右翼(定義は下記参照)はインターネットユーザー全体でも、最高で3%程度でしかないことと推測されることが明らかにされた(辻・藤田 2011: 131-57)。

インターネットユーザーからのアンケート調査において「ネット右翼」の条件を満たしたものには、以下のような傾向があることが分かったという。

- 男性が多い
- 年齢・学歴・世帯収入にインターネットユーザー全体と比べて大きな偏りはない
- インターネットのヘビーユーザー
- 特に「2ちゃんねる」利用の割合が多い
- ネット上での攻撃的な発言・バッシングを容認する傾向
- マスコミに対して批判的
- リアルでの政治行動に関しては、半数が署名運動などに協力し、3割が献金やカンパなどを行い、2割が集会や会合などに参加している

なお、辻・藤田はネット右翼というものの定義について、

- 1.韓国・中国に親しみを感じていない

2. 「首相・大臣の靖国神社への公式参拝」、「憲法 9 条 1 項(戦争放棄)の改正」、「憲法 9 条 2 項(軍隊・戦力の不保持)の改正」、「小中学校の式典での国旗掲揚・国歌斉唱」、「小中学校での愛国心教育」の 5 項目の多くに賛成している。もしくは「既存の新聞・テレビの報道に不信感」、「マスメディアの報道は左派に偏っているものだと思う」、「既存のマスメディア報道はやらせばかりである」というようなマスメディア批判を表明している。

3. ホームページやブログや掲示板に政治的意見を書き込んでいるという 3 項目を満たすものとしている。

3.2.3 ネット右翼の分析

このようなネット右翼に対しては、主に 3 つの視座から分析がなされてきた。

1 つめはそれを日本社会の一部が、社会全体での不安の増大により、右傾化していることが原因であるとする議論である。

2 つめは、ネット右翼の右翼みたいに見える主張は、その中身自体はどうでもよく、その主張を共有して、周りにつながっているという感覚を得たいから主張されているという議論である。

そして 3 つめは、2 つめのような繋がりの社会性を前提においた上で、そのように生まれた繋がりが、その内部で主張の過激化を促進させるような要素がネットにはあるという議論である。この議論は、前章で述べた Sunstein のサイバー・カスケード論を日本に適用しながら、インターネット上のコミュニケーションは、コミュニケーションを過剰に可視化することが、よりサイバー・カスケードを加熱させていると論じているものである。

不安による右傾化

● 旧来の右翼

元々日本の右翼というものは、1980 年代ぐらいまではそれらは旧軍人や戦前に権力を持っていた人などを中心とした復古主義的団体であったり、あるいはいわゆる街宣車などに乗って自らの主張を行うような職業的右翼団体だったりというようなもので、反戦運動や環境運動などの市民運動とは違い、一般の市民などとはかけ離れた運動であるとみなされ、そしてまた運動の当事者たちも、自分たちを「普通の市民」であるとは、あまり思っていなかった。

小熊英二(小熊 1995, 1998)によれば、日本の近代ナショナリズムは、その性格を常に「外部」との関係によって規定されてきたという。小熊は明治維新から戦前の日本においては、今のように、日本民族はもともと日本に住み着いていた「単一民族」としてイメージされていたのではなく、南方から来た、朝鮮人や沖縄人、アイヌを含んだ「複合民族」であったとイメージされていたという。なぜそのようなイメージが主流だったかと言えば、西欧列強との対抗の中で、日本も植民地を持たなければならないとする政策のもと、朝鮮などの植民地支配が行われる、その植民地支配を当然のものとして擁護しなければならないからだ。もしただ植民地支配をするだけならば自分たちの仮想敵である欧米と同じになってしまう。そこで「西欧の植民地支配はある民族が別の民族を屈服され支配するものだが、日本の朝鮮併合は元々同じ民族だったものが同じ国になるものだから、西欧諸国が行うような植民地支配ではない」という言い訳が必要になるのだ。

よって日本のナショナリズムは戦前むしろ、「民族の本質をはっきりさせる」というような方向に進むのではなく、西欧批判と「全てを含められる天皇支配」の賞賛へ向かった(もちろんその内実が実際どうだったかと言えば、朝鮮やアイヌ・沖縄などの民族性を無視し、日本の家制度を、それにそぐわなかった朝鮮などに強制的に導入する創氏改名といった政策に結びついていったわけだが)。小熊はこのような形態のナショナリズムは、Benedict Anderson (Anderson 2007) でいう「公定ナショナリズム」ではないかと述べている。

そして戦後、小熊(小熊 2002)によれば植民地を失った日本においては一転「単一民族」論に移行し、そして敗戦直後は右から左まで「(単一)民族」にもとづいたナショナリズムを主張するようになる。そこで民族を束ねる重要なものとして認識されたのが「戦争体験の記憶」である。これは、確かにある意味では階層差や、どの場所で戦争を体験したかというような違いを無かったものとし、そして更にそれは「単一民族」の記憶であるから、戦争時に戦争を、同じ「日本国民」として体験したはずの朝鮮人のことなどは忘却された。しかしいずれにせよ、「戦争体験の記憶」は日本の戦後 15 年の間、右にとっても左にとっても、それを拠り所に自らの主張をする原点であり、核であった。

● 市民型保守

しかし戦争から年月が経つにつれ、その記憶は忘却されていき、かわりに日本は高度経済成長期に入り、新中間層などが生まれてきた。そんな中で「おなじ戦争を体験した国民」という一体性は消え、代わりにそれぞれ違う個人の、アイデンティティ・ポリティクスが思想の焦点となっていった。そしてその延長線上に、「新しい歴史教科書をつくる会」などの運動があらわれてきた。

新しい歴史教科書をつくる会とは 1996 年に結成された団体で、従来の歴史教科書が日本の歴史を不当に貶める「自虐史観」であるとして、そのような既存の歴史教科書とは違う、日本に誇りを持てる教科書—具体的には、建国神話などを重要視し、大東亜戦争肯定論や東京裁判批判などの視点にたったもの—をつくることを目的としていた。「自虐的」でない歴史教科書を作ろうとする運動はそれまでも例えば、「日本を守る国民会議」という団体が『新編日本史』という高校用日本史教科書を作ったりしたものがあつたが、この運動が目目を浴びたのは、小林よしのりの様な若者に人気の漫画家等が参加したりすることによって、若者が数多く参加し、そして更にその運動が市民運動的に広がっていったことによる。

このような新しい右派の運動について、その運動の現場での参与観察をもとで行われた研究として、小熊英二と上野陽子の研究(小熊・上野 2003)がある。この研究は、「新しい歴史教科書をつくる会」の地方支部「史の会」に参与観察していった研究であり、そして観察の中で上野は、「つくる会」に参加するような人たちは、自分たちが「変な人」として見られるのを極端に恐れている、自称「普通の市民」であること、そしてそうであるが故に、集まって語り合ったり、講師を呼んで講演をしてもらったりするような活動は行うものの、それ以上の、つくる会の外に訴えかけるようなそういう活動

はむしろ疎まれることを明らかにした。そしてそのような観察結果から、小熊は彼らの運動が、何か1つの自分が重要としているもの(既存の右派運動の場合、それは「天皇」だった)を主張するものではなく、何が自分にとって重要なのか分からない不安を、同じ様な不安を抱く人たちとキーワード(「サヨク」であったり「朝日」、「日教組」であったりというような敵を表す言葉)を共有することによって癒そうとする、〈癒し〉の活動であるとした。

また、前章で述べた高原や櫻村の考察も、社会の一部が右傾化しているということを前提においた上で、その右傾化がなぜ起こっているかについて、将来に対する不安が広がる中で、その不安の原因として近隣諸国やマスメディアなどの既得権益が敵視されているとする考察であるといえる。

● 在特会

そして安田浩一は、このような不安こそがネット右翼の運動の源泉にあると、「在日特権を許さない市民の会(在特会)」という、ネットから出現し、デモ活動などを行なっている運動に取材する中で、考察している。

在特会とは、2007年1月20日に、インターネット上の集まりから結成された、在日コリアンを日本から追い出せというような排外主義的主張を掲げる団体である。この会では、メールアドレスを登録すれば会員になることができ、会員の人数は2011年6月14日現在10121人。これまで様々なデモ活動や抗議活動を行い、そのうちの何度かでは不法侵入や暴行などの容疑で刑事事件になってきている(安田2010)。

このような団体に一体なぜ人々が惹かれるのかについて、安田は在特会が、孤独な若者にとって「擬似家族」になっている点(安田2010:320)などを指摘した後に、次のように述べている。

あえて思い切った表現を用いるが、契約社員や請負といった非正規労働者は、基本的に「人間」として扱われていない。多くの企業にとって非正規労働者を担当・管理する部署は人事部ではなく、資材などを扱う部署だ。人間が、労働力が、資材の一つとして扱われる。そこから格差と分断が生まれる。何の「所属」も持たない者が増えていく。

そういった状況に自覚的であろうが無自覚であろうが、「所属」を持たぬ者たちは、アイデンティティを求めて立ち上がる。そしてその一部が拠り所とするのが、「日本人」であるという、揺るぎのない「所属」だった。けっして不自然なことではない。

(中略)

草の根保守の源流ともいべき「新しい歴史教科書をつくる会」が結成されたのもその頃、1997年1月のことだ。歴史に「物語」を見出し、日本人の心を取り戻せと主張するこの運動は、多くの支持者を集めた。失われた「物語」を取り戻すことで、自身と希望をも手にしたと考える人が増えた。それは「先進国・日本」の経済的没落と歩調を合わせていた。

「生きづらい世の中」をつくった戦後体制を見なおせという叫びは、そのうち「敵」の姿を明確にし始める。国を貶める者たち——すなわち、左翼、外国人、メディア、公務員である。彼らは社会の「勝ち組」というよりも、混沌とする時代をうまく逃げ切った層に見えたのである。事実関係など、この際どうでもよい。恵まれ、あるいは保護され、世の中から認知されている者たちは、少なくとも生存競争を上から眺めるだけの者にしか見えなかったのだろう。

そうした空気の中で在特会は生まれたのだった。(安田2010:353-4)

つまり、先に挙げたような社会全体の不安定化のなかで、不安定化の原因を名指しし、更に擬似家族として安心感を与えることにより、在特会やネット右翼は多くの若者を引きつけたのではないかと、安田は考察しているのである。

ただ一方で、先に辻・藤田の研究で示した通り、少なくともネット右翼全体については、年齢・学歴・世帯収入に大きな偏りはないため、ネット右翼の個人それぞれが直接そういった雇用の不安定化に直面しているということは観察されない。ただ、社会全体で雇用や生活が不安定になっていくなかで、「今はとりあえず大丈夫だけれど、いつ仕事が無くなるかわからない」という将来への不安を感じているということならば、年齢・学歴・世帯収入に偏りがなくてもおかしくないだろう。

繋がり社会性

一方で、実はネット右翼自身にとっても、自分たちがどういう主張をしているかはどうでもいいとする議論もある。

北田暁大は、ネット上での「ナショナリズム」について、実はそれは主張の中身はどうでも良く、ただ「みんなでそれを一緒に主張している」ということが重要なのであり、そしてその周りと一緒のことを主張するという「繋がり」こそが重要だという分析をしている。

ほとんどフォーマット化されたかみ見える「反朝日」の風潮や、W杯時のフジテレビ「偏向」報道への抗議活動(湘南ゴミ拾いオフ[オフライン]の企画、二七時間テレビの湘南海岸ゴミ拾い企画の前に、ゴミを拾い尽くしてしまおうというオフ会)、NHKスペシャル『奇跡の詩人』の「やらせ疑惑」糾弾の盛り上がりなどをみても分かるように、2ちゃんねるの反マスコミ主義は、マスコミへのシニシズムという言葉で括るにはいささか家事用なものとなっている。この過剰さはいったい何に由来しているのだろうか？

(中略)

2ちゃんねるにおいては、内輪性を再生産するコミュニケーション——内輪の空気を乱さずに他者との関係を継続すること——を続けることが至上命令となっており、ギョーカイは共同性を担保する第三項の位置からコミュニケーションの素材へと相対化されている。

(中略)

「2ちゃん語」「アスキーアート」を駆使したアイロニカルなコミュニケーションを首尾よく繋いでいくことが、「住人」=2ちゃんねらーたちの主要関心なのであって、テレビ(や新聞)はコミュニケーションのための素材にすぎないのだ。

マスメディアのための内輪ではなく、内輪のためのマスメディア。社会的にいえば、2ちゃんねるとは、公共的秩序を指向する目的合理性に対し、行為が次なる行為へと接続されていくことを指向する接続合理性(場の空気を乱すことなくコミュニケーションを続けていく技量)が極限まで肥大化した社会空間といえるかもしれない。(北田 2005:201-3)

つまり、「反マス・メディア」や「反韓国・中国」といったような主張は、そのような主張を世間で広めることが目的なのではなく、マス・メディアや韓国・中国といったものを笑いものにするという姿勢を共有することにより、同調的なコミュニケーションを可能にすることが目的なのであると、北田は述べているのである。

そして、そのような同調的なコミュニケーションを人々が求める理由として、90年代以降の若者コミュニケーションにおいては繋がりの社会性が上昇しているということが指摘できると、北田は指摘している。(詳しくは2章3.3参照)

過剰な可視化

荻上チキは前項で示された繋がりの社会性を前提においた上で、Sunsteinのサイバー・カスケード論を参照しながら、このような繋がりの中でのコミュニケーションは過激化し、「炎上」と呼ばれるような、ある人物を集中的に批判・誹謗中傷する現象につながりやすいと指摘している。(荻上 2007)

そして荻上は、インターネット上でコミュニケーションを行うことは、そのインターネットに自分が常に接続し、コミュニケーションに回答可能になることによって、逆に「即座に回答しなければならない」という強迫観念を抱きやすくと、インターネットにおけるコミュニケーションでの体験談を参照しながら指摘している。

オフラインで何をしよう、ケータイによって「人文系ニュースを淡々と紹介するchiki」として呼び起こされる。「この私」がオフラインで「労働者」を演じていようと、「家族」を演じていようと、「恋人」を演じていようと、「客」を演じていようと、ウェブ上に居る「chiki」は今なお発言を続けているのです。そして必要になった時には「この私」を呼び起こし、「chiki」が発言を継続できるよう要求する。「この私」がオフラインで何をしよう、「chiki」としてコミュニケーション空間に強制的に呼び起こされるのです。(荻上 2007:100-1)

このような性質をなぜインターネット上でのコミュニケーションは持つのかについて、荻上は過剰な可視化というものを挙げている。

ウェブ上においてサイバーカスケードが起こるとき、オフラインのもの、「ウェブ以前」のものとの大きな違いは、(繰り返しになりますが)可視化とつながりによってもたらされる過剰性に基づいています。過剰な可視化(東浩紀はこれを過視化と名づけています)は、人々の行動や予期に変化をもたらします。例えば二章で筆者の体験を紹介したように、可視化されたテキスト交換に対してオブセッシブ(強迫的)になってしまうこと、これまで見えていなかったものが見えるようになることで、不安や怒り、焦りなどが生じることがあるのです。「多くの人がこれを見たかもしれない」「このコメント主は、多くの人に見られることを前提にコメントしている」「これからのやり取りは、多くの人に見られていく」と予期することで、その後の行動が過剰なものになってしまうということもあります。(荻上 2007:186)

つまり、ネットのコミュニケーションにおいては、いつでもそのコミュニケーションを見ることができるとゆえに、逆にそのコミュニケーションを見ていて当然となる、となる、それがコミュニケーションを受けての行動に過剰さをもたらすということなのだ。例えば自分の意見に批判が来た時、その批判に対して応答しないということは、批判を見ているはずなのに応答していないということになり、批判に応答するか、応答できないことを認める、つまり負けを認めるかの二者択一を迫られる。そのような状況が、個人に曖昧な態度を許さず、結果としてサイバー・カスケードを誘発しているのではないかとこのことである。

3.3 Web2.0論

このようにインターネットが普及にするにつれ、インターネット上でのコミュニケーションについての研究・考察は、より悲観的なものとなり、少なくともインターネット初期に提唱されたような「インターネットが市民的公共圏を再興する」という議論は少なくなっていく。

だが、近年になって、SNSやソーシャルブックマーク、マイクロブログ(短文をインターネット上に投稿するウェブサービス)、動画共有サイトのような新しいサービスがインターネット上で流行し始め、そしてそのようなサービスでなら、2ちゃんねるのような公共的な議論を拒否する場とは違う、新しいコミュニケーションの場を作れるのではないかと議論が現れ始めた。

3.4 先行研究の評価

さて、ここまで述べたように、これまでも日本におけるインターネット上でのコミュニケーションについてはさまざまな先行研究が存在していたわけだが、ではこれらは一体どのように評価すべきだろうか。

最初に指摘しておかなければならないのが、これらの先行研究は、インターネット上のコミュニケーションについて考察している研究といっても、それぞれ全く異なる場所についての研究であるということである。

例えば1つめの「電子公共圏論」は、大学の学術関係者や、市民運動に関心があるものによって運営された掲示板でのコミュニケーションについての研究である。しかしそれに対して2つめの「2ちゃんねる・ネット右翼論」は、匿名掲示板という、どういったユーザーが参加しているかコミュニケーションに参加しているのか、コミュニケーションの当事者にとっても分からないような場所での

コミュニケーションについての研究である。そして3つめの「Web2.0論」は、マイクロブログやソーシャルブックマークといった、新しく現れてきたウェブサービスについての考察といえる。

これらはいずれも、日本におけるインターネットのある一部分を切り取って論じている研究・考察である。1番目の電子公共圏を模したようなコミュニケーションも、確かにそれが大勢であるとはいえないが、しかし例えば together と呼ばれる、マイクロブログで投稿される短文をまとめることができるウェブサービスにおいては、様々な専門家が実名で議論を行い、異なる立場を尊重した上で行われる討議と呼んでもいいようなコミュニケーションが行われている。ただその一方で、その同じサービスで、まさしく2ちゃんねる的な、接続合理性を重視したコミュニケーションや、いわゆる「炎上」がまとめられていたりもするのである。

しかしその一方で、よりインターネットにおいて典型的なコミュニケーションは、やはり今でも2番目の「2ちゃんねる・ネット右翼論」で示されたようなコミュニケーションであると予想される。1番目の電子公共圏は、相手の意見を尊重した討議がよい議論であるという規範が、コミュニケーションに参加している全員に共有されている場合に現れてくるものである。しかしそのような規範は、例えそのコミュニケーションに参加する一個人が持っていたとしても、相手もまたそのような規範のもとに行動しているかどうか分からない場合、その規範に基づいてコミュニケーションを行うかは一種の賭けになってしまう。なぜなら、もし相手が討議倫理ではなく、自己目的的なコミュニケーションを求めていた場合、相手はその目的を達成できるが、自分は討議という目的を達成できなくなるからだ。

よって、1番目のような電子公共圏論が成立するのは、相手もまた討議倫理に基づいたコミュニケーションを指向していることが、事前に予期されなければならない。そのため電子公共圏は、コミュニケーションの参加者が討議倫理を順守し、更にその相手とコミュニケーションする前から、その相手が討議倫理を遵守すると分かっている場合でなければ成立し得ないのである。そのような期待が成立するのは、相手が著名人や専門家であり、討議倫理が成立することが事前に分かるという条件が満たされなければならないのであって、それは少なくとも現在の顕名が義務付けられていない日本のインターネットにおいては、限定的にしか実現しないのではないだろうか。

次に、3番目の Web2.0 について、このようなサービスにおいては民主的な議論が可能になると主張している議論にも、前文と同じようなことが言える。つまり、そのような考察が対象にしている議論は著名人や専門家などの、相手が討議倫理を遵守することが予想される。そのような場での議論においては、電子公共圏と同じように討議は可能だろう。しかし例えそれらのウェブサービスでも、そのような「相手が討議を遵守している」という予期ができない場合は、コミュニケーションのためのコミュニケーションを指向するという、より一般的に適用できる、自分が損をしない戦略をとることが予想される。

以上の点から、本論では、日本におけるインターネット上のコミュニケーションにおいては、「2ちゃんねる・ネット右翼論」で示されたようなコミュニケーションがより典型例ではないかと考える。

以上の理由から、本研究ではネット右翼の人々と呼ばれるような人々を研究対象とすることにする。

ただ、それは別に「ネット右翼」の人々のみが、先に示されたような自己目的的なコミュニケーションを指向しているということではない。むしろ本論では、いかなる主張（例えそれが、脱原発であろうが反アメリカであろうが）を提示するものであっても、上記のように自己目的的なコミュニケーションが最適解となる場面では、討議は行われなければならないのではないかと考える。

3.5 2ちゃんねる・ネット右翼研究についての考察

さて、いわゆるネット右翼と呼ばれるような、インターネット上で反マス・メディアであったり、反韓国・中国であったりといった主張をする人々についての考察では、次の3つの視座から分析がなされてきた

- 不安による右傾化
- 繋がりの社会性
- 過剰な可視化

これらの3点の内、最初の「不安による右傾化」は、インターネットのアーキテクチャとはあまり関係ないといえるだろう。例えば新しい歴史教科書を作る会などは、別にインターネットから生まれた運動でもないし、運動の現場も、実際に公民館などに集まって勉強会を行うことなどが主であり、インターネットは殆ど関係ないからである。言ってしまうと、もしアブリアリに人々が右傾化しているのなら、例えどんなコミュニケーションメディアを用いても、そこで提示される議論は右寄りなものとなるだろう。そして、在特会に対する安田の考察も、基本的にはこのような考察の延長線上にある。

そしてそうである以上、実は「不安による右傾化」の議論は、ネット右翼に対する問いの半分にしかなっていない。これらの議論は、ネット右翼がなぜ、反マス・メディアであったり、反韓国・中国であったりといった主張を展開するかについては答えているが、しかしそのような議論が、なぜ過激な、異なる意見をもつ人との議論を受け付けられないような形で提示されるかは説明できないのである。

一方で、「繋がりの社会性」「過剰な可視化」というような論点は、インターネットのアーキテクチャと大きく関係しているといえる。これらの議論は、ネット右翼の主張がなぜ過激な、議論を拒否するようなものであるかについて説明を試みている。

ただ一方で、これらの研究は、新しい歴史教科書をつくる会についての上野・小熊の研究や、在特会についての安田の取材のように、そこでコミュニケーションを行う当事者たちの話を直接聞いたりした研究ではない。これらの研究対象はあくまでインターネット上に表現される、ネット右翼の言葉であって、その言葉を当人たちがどういう思いで表現し、コミュニケーションしているかは、明らかになっていないのである。

よって本論では、ネット右翼のブログについて、彼らのブログを調査し、そしてインタビューを行うという調査手法を選択する。このような調査方法により、彼らがどのような思いからインターネット上

で表現をし、そしてそれに対してどのような反応が帰ってきて、その反応を当人たちはどのように受け止めたのか、そしてその受け止めた内容が、その後のインターネット上でのコミュニケーションにどのような影響を与えたかを、プロセスとして分析することができるだろう。

本論では、そのプロセスを明らかにすることにより、先行研究で述べられてきたことが実際はどの程度まで妥当だったのかを明らかにし、先に述べたこの研究の仮説、

- アーキテクチャによる公共性は、限定的にしか通用しない
 - アーキテクチャによる分裂により、公共性への対処が困難となる
- という2点の仮説について検証していく。

4 調査方法

4.1 調査対象の選定基準

本論ではインターネット上で頻繁に政治的コミュニケーションをやりとりし、かつ、リアルな活動を補助するものとしてネット上で活動しているのではなく、ネット上で主な活動を行なっている人のサイトを対象にする必要があった。そこで今回はネット右翼ブログ、それもネット上で大勢の人とコミュニケーションを行なっている人を分析の対象にする必要があったため、以下の選定基準に基づいてインターネット上でインタビューを依頼できる人を探した。

- 反韓国・中国といった主張や、反マス・メディアなどの主張をブログで行っている。
- 数十件以上コメントや twitter での言及、はてなブックマーク(ソーシャルブックマークサイト)でのブックマークが付いたことがある

そしてその結果、「とある青二才の斜方前進」(TM2501 2012)というブログを運営している TM2501 氏と、「アニオタ保守本流」(古谷 2012d)というサイトを運営している古谷経衡氏がインタビューを受けていただけることになり、ブログの分析とインタビューを行った。

twitter について

twitter とは、マイクロブログと呼ばれるサービスの一つで、140 文字の短文をインターネット上に投稿して発表することができるサービスである。twitter には様々な使い方があがるが、その使い方の一つとして、インターネット上のサイトの URL を含んだ形で短文を投稿することにより、その URL に言及するという機能がある。

ただ、その言及はそのサイトが存在するサーバーにおいてアクセス元のログを見るか、Topsy(Topsy Labs, Inc. 2012)というツールを用いないと、URL から言及を逆引きすることはできない(twitter 公式の検索機能から逆引きすることも可能であるが、検索漏れが多く、また最近のツイートしか表示されない)。

Topsy は次のようなトップページを持つウェブサービスである。



図 1 Topsy のトップページ

黒枠で囲ったところに「http://www.rikkyo.ac.jp」とすでに入力してあるが、ここに言及を逆引きしたい URL を入力して検索ボタンを押すことにより、つぎのような画面に遷移する。

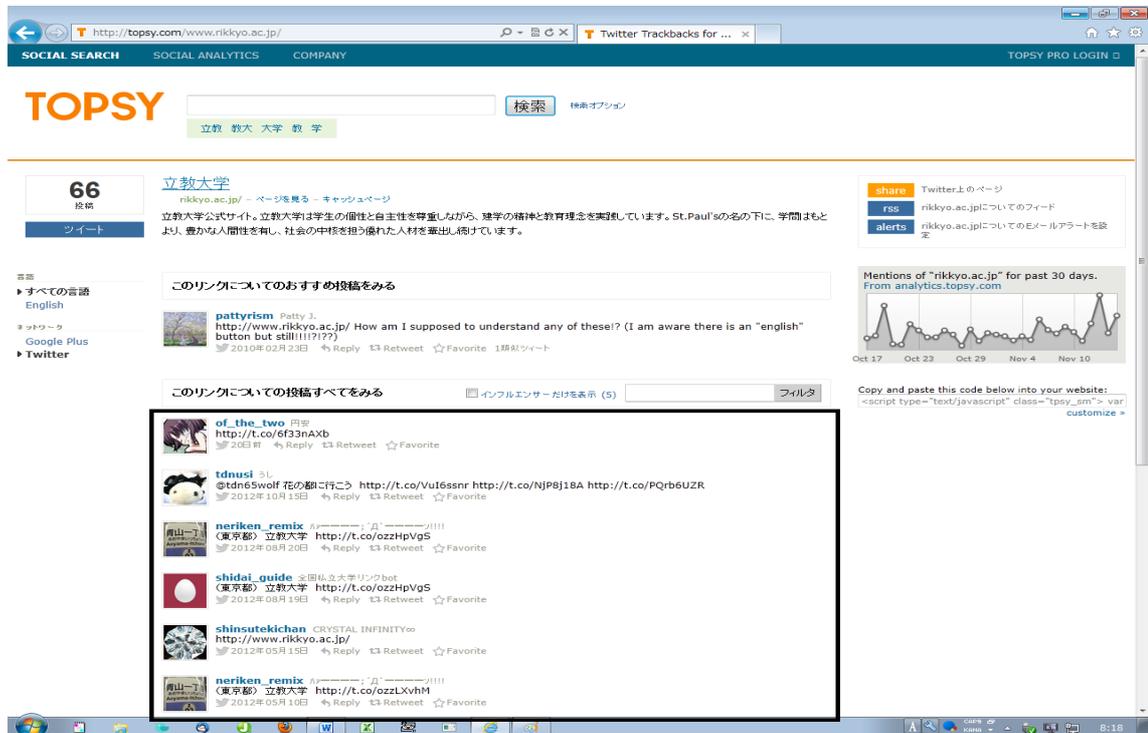


図 2 Topsy による逆引き結果

左上の「66」という数字は、その URL が twitter で何回言及されたかを示す数字である。そして黒枠で囲った部分に、その URL について twitter でどのように言及されたかが表示される。ブログの分析においては、このツールを用いてそれぞれのブログ記事についての twitter の言及数と、その言及の内容を調べた。

はてなブックマークについて

はてなブックマーク(はてな 2012)とは、ソーシャルブックマークサービスの一つである。ソーシャルブックマークとは、あるサイトをブックマークしたということをインターネット上で公開でき、そしてブックマークの際にそのサイトにコメントをできるサービスである。del.icio.us というサービスが最大手と言われているが、del.icio.us が英語圏のサービスなのに対し、はてなブックマークは日本語圏のサービスであり、日本語圏のサービスとしては最大のソーシャルブックマークサービスである。

はてなブックマークのトップページは次のような画面である。

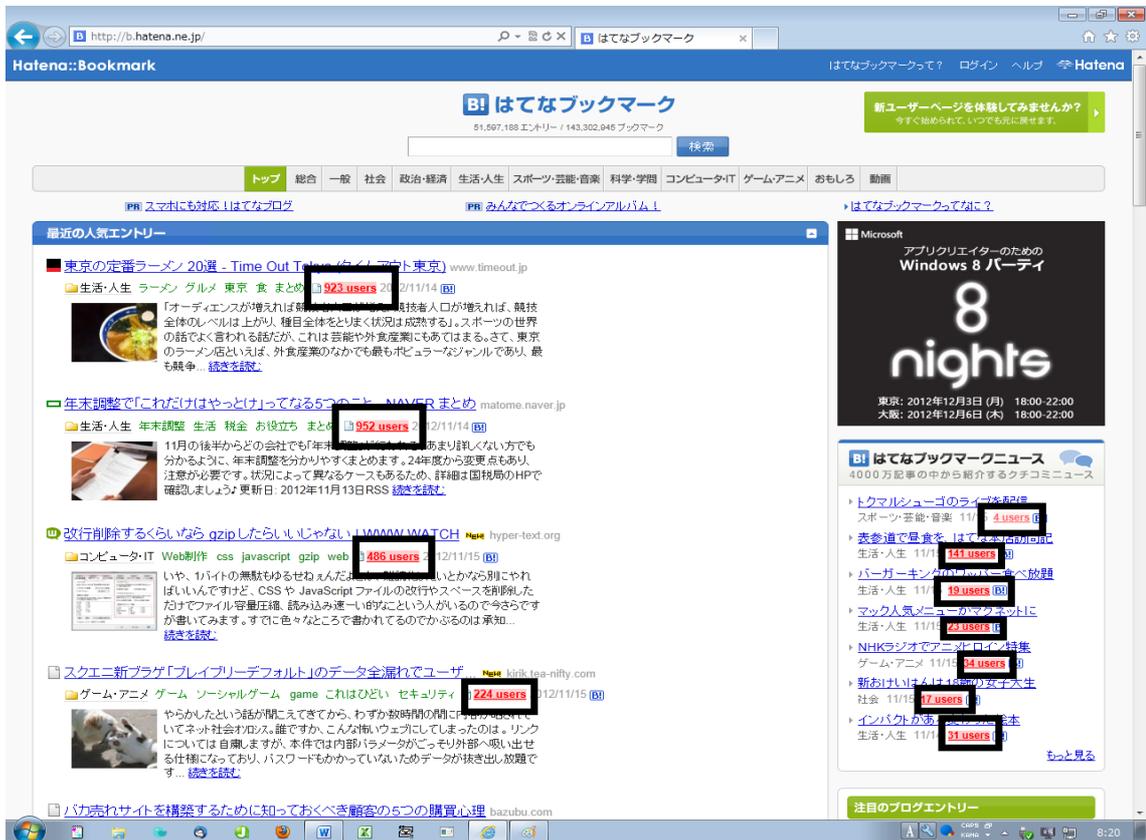


図3 はてなブックマークのトップページ

トップページでは、その日に大勢のユーザーがブックマークしたサイトが紹介されている。そして黒枠で囲っている「○○Users」という場所をクリックすると、下記のようなそれぞれのURLのブックマークページに画面が遷移する。



図4 はてなブックマークのブックマークページ

このブックマークページは、あるサイトのURLがはてなブックマークページの誰か1人にブックマークされた際に自動的に、一つのURLに一つ作成される。そして黒枠で囲った欄に、そのURLをブックマークしたものが、ブックマークした際にどんなコメントを書いているかが一覧で表示される。

ブログの分析においては、ブログの記事それぞれについてのブックマークページを閲覧し、何件ブックマークされており、どのようなコメントが多かったかを調査した。

4.2 調査対象

今回の調査では、TM2501氏(以下T氏と記述)と古谷経衡氏(以下H氏と記述)に協力していただき、両氏のブログを分析した上で、分析に基づいて質問を行なっていった。両氏の詳しいプロフィールについては次章で述べている。

4.3 調査方法

ブログ・著書の分析について

ブログの分析は、T氏とH氏のそれぞれのブログに対して、全ての記事を対象に、それぞれの記事に対してどのようなコメントが付き、どのようなtwitterでの言及があり、どのようなブックマークコメントがはてなブックマークで付いたかをまとめて調査した。

そしてそこからブログ全体の流れと、その流れにおいてメルクマールになるのではないかと思われる記事を分析した。

それに加えてH氏は著書や雑誌記事等も執筆しており、その内容についても調査した。

インタビュー調査について

今回のインタビュー調査は、T氏については2012年10月13日にレンタル会議室にて実施し、H氏については2012年10月31日にH氏の勤務先の会議室において実施した。インタビューの手順は、インタビュー対象者に対し、用意しておいた質問項目に沿って、プロフィール・マスメディアからの情報摂取・インターネットからの情報摂取・インターネットでの情報発信について全般的なことを聴いた後、ブログにおけるメルクマールとなる記事について、それを書いた時の気持ちや、その記事に対してつけたコメントについての感想、そしてその感想がその後のインターネット上での表現や、自分の考え方にどのような影響を与えたかといったことについて質問を行っていくという、半構造化面接の形式をとった。

インタビューの時間はT氏については3時間程度、H氏については2時間程度だった。

5 調査結果

この章では、インターネット上での表現の分析とそれに基づくインタビューで得られた情報にもとづき、まず今回インタビューした両氏の経歴を紹介した上で、両氏のブログの全体的な流れについて説明する。そしてその後に、聞き取り内容を質問項目ごとに紹介していく。なお鍵括弧内の発言は本人の発言をそのまま抜き出している。

5.1 T氏について

5.1.1 T氏の運営しているサイト

- とある青二才の斜方前進(2010/7/31~)

5.1.2 T氏の使用しているSNS⁵⁾

- mixi
- my 日本(一時期)

5.1.3 T氏の経歴

T氏は1989年生まれ。中学2・3年生の頃からインターネットを見始めるが、当時はFLASHムービーなどを見るぐらいだった。

その後高校2年生の時に別の高校に転校することになり、編入学試験を受けるが

英語と数学と国語の試験がありまして、英語と数学はまあ特進クラス、で国語だけが進学クラスのちょっと中の下ぐらいの成績で、これはちょっとひどいんじゃないのという話になりまして、この2つ特進クラスなんだからもうちょっと国語頑張れば別に何処だって良いとこいけるのにとか、あの良い待遇にしてあげられるのという話になって、進学(クラス)スタートになったんです。それで進学スタートになった時に、あまり本読んでないでしょって話を校長先生から言われて、そうっすねー、読んでないっすねーと…まあ、今の私知っている人からしたら、なんで読んでなかったのというような話ですが、元々は、普通にテニス部のことぐらいしか頭になかったシティボーイだったんですけど…(笑い)

それで結局、高2で友達ができない、いないところに入って、その頃から本格的に本を読み始めて、元の高校の友人から、(mixi日記の)文体が変わって、面白くなったとか何とかという話はないんだけど読みやすくなったということと言われるようになりました。ただその当時読んでいた本は小説が多かったです。

というように、そのころから本を多く読み始めたと述べている。

そして大学進学においては私立大学の経済学部に入り、その後に自分が大学で学んでいることとマス・メディアでの報道の内容に乖離があることから、そのような乖離についてインターネットで調べ、そしてmixiの公開日記で自分の意見を表明し始める。そして大学を卒業したが、

新卒の採用にあぶれて、大学卒業する3月から4月までは日雇いでちょっといろんなバイトをやって、でその4月に、給料の良いアルバイトを見つけて入ったんですけど、それが個人の経営でバイトとか社員とか概念がない会社なんです。社会保障無い代わりに、その日払いで、稼いだ分の利益は大体貰えるっていう会社なんですけど、そこで4ヶ月間働いていました。

そこで果物の移動販売とかをやってまして、5個300円とかなんとか言っていて、で来たらちっちゃいのは5個300円でお姉さんが食べた大きい奴は3個1000円のやつなんだけど、4個でも5個でも6個でも半額にしてあげるから持っていきなっていう風に声かけて果物を売るという仕事をしていました。

それでその会社をやめたあと、もともと登録していた日雇いのところに今もう一回戻ると、3ヶ月から4ヶ月間固定の、週5回出勤するバイトを紹介されて、いまそれをやっています。

という風に、就職活動に失敗した後フリーターとして働いていたと述べている

5.2 T氏への聞き取り結果

5.2.1 プロフィール

政治や経済や社会問題について興味を持ったきっかけ・経緯

T氏は

経済学部入って、その後に…どーも学んでいることと報道されていることの理屈が違うんですね。多分、大学に長いこといると、どの学問でも体験することだと思うんですけど、あの人達はアホなのかわざとやっているのかどっちでもいいけどさあ、学んでいる人はとりあえず書けるなら反応しようよっていつてさ、ちょっとそう思って私がやり始めて…でそれがmixiで受けたんですね。

と述べ、大学で学んでいることとマス・メディアで報道されることが違うように思え、それをmixiの日記で書いたら多く反応が来たことが、政治経済や社会問題に興味を持ち始めたきっかけであると回答している。

そして、ブログで記事を書くためにネット上で情報を求め始め、

ネットではやった思想家や、あとチャンネル桜とかに出演しているような人の本を読み
ました。報道が左寄りだから、どちらかというところじゃない方のものを、読んでみてバラ
ンスを取って、自分はどうかという...立場づくりをしようと。

というように、保守系の知識人の本をよく読むようになったという。

家族について

父親は外資系の会社員であり、母親は昔百貨店に勤め、今はパートとして務めている。兄妹
は妹が1人おり、現在は女子大で勉強している。

ブログの記事中で、父親については尊敬しているが(TM2501 2011b)母親は尊敬してい
ない(TM2501 2011c)という話をしていたため、それに対して詳しく話を聞いたところ、父親に
ついては、「ニュースなどについて話すときに、父なりの解釈で答えてくれる」ことから尊敬してい
るが、母親に関しては「なぜそういう質問をするのか聞いてくるので会話が成立しない」と述
べる。

デモ活動・集会などへの参加歴

2011年8月に反フジテレビデモに参加した以前には特にそういうデモ活動などへの参加
はなく、

大規模なオフ会への参加経験はありますが、デモなどへの参加経験はないです。大
規模なオフ会も政治色があるものじゃなくて、mixiで企画された千葉の海浜公園という
所に集まって100人で鬼ごっこしただけという、しょうもないオフ会です。

という風に述べている。

「ネット右翼」という呼称についてどう思うか

ネット右翼とは「世間一般では受け入れられない電波なことを言っている人」だが、自分は
「右とか左とか関係なく、自分の頭で考え」、「みんなが心の底で思っているけど言葉に出来な
いことを言葉にする」ような存在であり、現在のネット右翼のような「何も態度を決めていな
い人に対して罵るような過激派」ではないから、ネット右翼ではないと回答。

5.2.2 マス・メディアについて

テレビ・ラジオを1日に何時間ぐらい視聴しているか

高校生の頃までは見ていたが、今は全然見ていない。ネット上にアップロードされた番組の
動画については見ることもある。

お気に入りの番組などはあるか

以前は『たかじんのそこまで言って委員会』という討論番組を気に入っていて、ネット上で
アップロードされているものを見てブログで取り上げたことがあるが、今はもう「対立する陣営の
議論を自分の論法で批判しているだけで、双方が双方を説得できず、議論に終わりが見えな
い」ことが嫌になり見えていない。

テレビ番組を批判的に見たりするのかどうか

基本的にテレビ番組は信頼していない。そんな中で

たまに銭湯にテレビを、最近どうなってるかなって思いながら、見に行くと、あんまりひ
どいなと思った時は(ブログで)取り上げます。

と述べている。

新聞は読んでいるか

一応購読してはいるが、紙面では殆ど読んでいない。ただ、ネット上では、話題になっている新
聞記事を読むことはある。

新聞記事を批判的に読んだりするのかどうか

T氏は新聞記事などの報道の読み方について

結局、一つはまず事実の問題。主語がはっきりしてるかとか...よくあるじゃないです
か?党幹部がとか、中堅議員がとか、誰が言ったかわからない、ああいう記事はちょっと、
距離を置きながら読もうよとか、そういうのを用心することがプロセスの一個目です。

そしてその次に、一般的な解釈をmixiで探ります。mixiの良いところは、普通の人の
解釈が最初の20件ぐらいで皆出てきて、それが100件200件出揃った後に記事書く
から、それよりも面白いもの書こうと思って、彼らの言ってる話のそもそも論を語るんです
よ。例えば東国原知事やめるというニュースがあって、それに対して、国会議員狙いとか
ご苦労様とか、そういう色々な感情論が出てくる。そんな中で、そもそもじゃあなんで辞め
たのかっていう話を書く、これが僕がミクシィの中で培った技法で、これが僕の報道の見
方ですね基本的には。

と述べ、新聞記事を批判的に読んで、その読み方を自分のブログの題材にしているというよう
に述べている。

マス・メディアが自分の意見・主張や考え方にどの程度影響を与えているか

ブログの記事の題材にはしているが、そこから特に学ぶことはなく、「全く参考にならない」と

述べ、さらに「マス・メディアに影響される人々については軽蔑している」と述べている。
読書はどの程度しているか
以前は一日2時間ほど読んでいたが、今は仕事が忙しくほとんど読んでいない。
お気に入りの著者などはいるか
以前は三橋貴明などをよく読んでいた。
読む本を選ぶきっかけ
チャンネル桜の番組で紹介されることなど。
本を批判的に読んだりするのかどうか
新聞記事と同じように、情報源がきちんと明示されているかどうか注目するが、その偏りは気にしない。
読書が自分の意見・主張や考え方にどの程度影響を与えているか
インターネット上で得た情報の裏付けを得るために読んでおり、特に考え方自体には影響を与えていない。
5.2.3 インターネット上での情報摂取について
ネットサーフィンをする時間は一日どのぐらいか
だいたい一時間半ぐらいであると回答。
どのようなサイトを主にしているのか
T氏はインターネットで主に見るサイトについて

最初に iGoogle の「2ちゃんねるまとめのまとめ」というガジェットを使って、痛いニュース、ニュー速ブログ、アルファルファモザイク、暇人速報といったようなサイトを見ます。そしてそういうサイトを見た後に、自分が時々投稿している楽天 Social News を見て、トップページのところに面白そうなのがあったらそれを読んで、あとはてなブックマークの新着をさらっと見て、で mixi ニュースを見るという感じです。

という風に述べている。
iGoogle の「2ちゃんねるまとめのまとめ」というのは、ウェブサービスの一種で、次の様に 2ちゃんねるまとめブログの最新記事をチェックすることができる。Google のサービス上で閲覧することができるが、Google が作成したものではなく、一個人が作成したツールである。

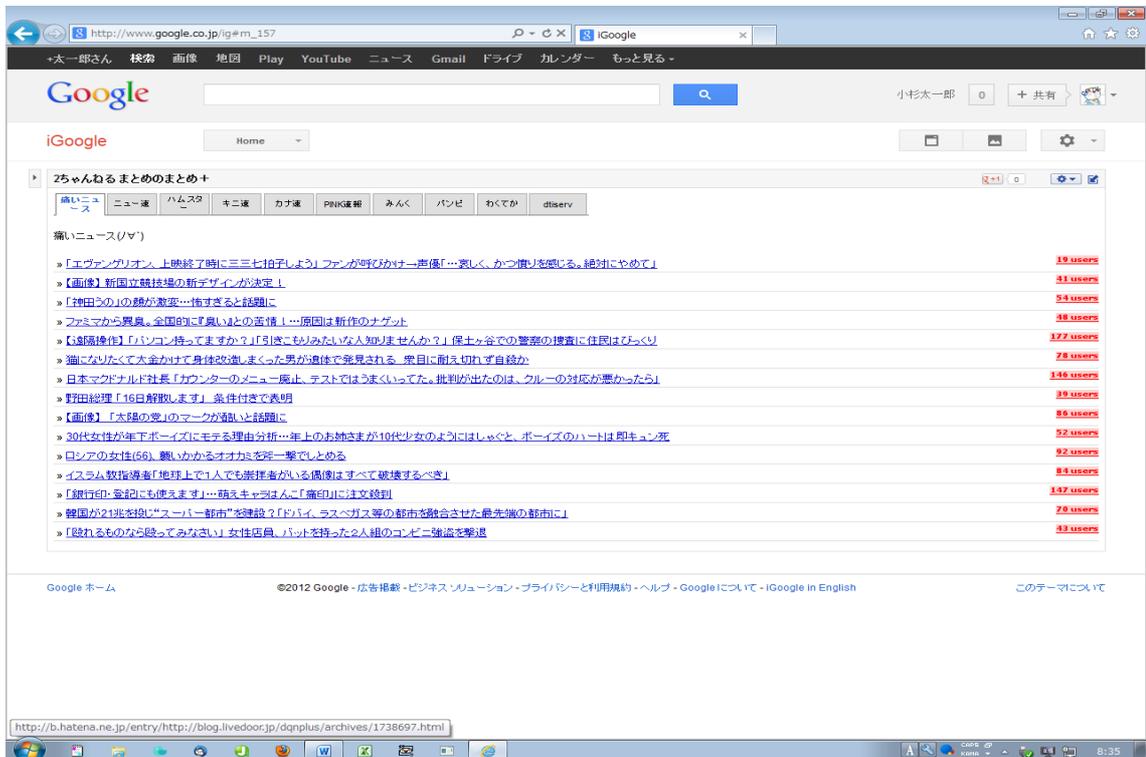


図5 2ちゃんねるまとめまとめ

「2ちゃんねるまとめブログ」とは、2ちゃんねるに投稿されたメッセージを抜き書きして、自分のブログに転載しているブログの総称である。このようなブログは複数あり、T氏の発言に出てくる「痛いニュース、ニュー速ブログ、アルファルファミライク、暇人速報」といった名前はそれぞれのブログの名前である。そしてこの「2ちゃんねるまとめまとめ」というサービスでは、一つの画面で複数のブログの最新記事がチェックできる。

mixi ニュースや楽天 Social News やはてなブックマークといったサイトは、ユーザーがニュースについてコメントを投稿するサイトを閲覧し、そこで人気になっているニュースを読むことができるサイトである。

楽天 Social News (楽天株式会社 2012)とは、ニュース記事に限定したソーシャルブックマークサイトのようなもので、トップページでは次のように多くブックマークされたサイトが表示される(黒枠で囲まれた部分)。



図6 楽天 Social News トップページ

そしてはてなブックマークと同じように、それぞれのニュースにはブックマークページがあり、そこでその楽天 Social News を利用しているユーザーのコメントが一覧できる。



図7 楽天 Social News 記事ページ

mixi ニュース(ミクシィ 2012)とは,mixi という SNS における 1 サービスで,新聞社などから配信されるニュース記事を読覧することができ,さらにそのニュースに言及している mixi 日記の一覧も読覧することができるサービスである。



図8 mixi ニュース記事ページ

それぞれのニュース記事はこのようなページであり、黒枠で囲った場面に、そのニュースが mixi 日記でそのニュースに言及しているものの一覧が見ることができる。また、そのようなサイトに加えてニコニコ動画のランキング(ニワンゴ 2012)もよく見ていると回答している。ニコニコ動画のランキングにおいては、このように動画がランキングで紹介されている。黒枠の部分ランキングに載った動画である。



図9 ニコニコ動画ランキング

ランキングの順位付けの基準はランキングを見るユーザーが決定することができる。また、全体のランキングの他に動画のカテゴリ別のランキングがあり、「エンタメ・音楽」「生活・一般・スポーツ」「政治」「科学・技術」「アニメ・ゲーム・絵」「その他」といったカテゴリがある。上記の画

面は政治カテゴリーのランキングであり、T氏は政治カテゴリーのランキングをよく見ていたと回答している。

ソーシャルブックマーク・2ちゃんねるまとめブログ・個人ニュースサイトなどはよく見るか
よく見る。

インターネット上でニュースを読む時は、どのようなニュースを良く読むのか

自分の興味関心に沿ったニュースをよく読み、「どうしようもなかったり、完全に専門外だったりするニュース」や、「殺人事件みたいな個人の話」はあまり読まない。

インターネット上の情報は信頼のおける情報だと思っているのか、それとも批判的に読むように心がけているか

根拠になっていることをきちんと調べれば信頼のおける情報であり、根拠をきちんと調べるために、ニコニコ動画などで国会中継の動画などの「1次ソースをガツガツと見る」ことをしているので、「ネット右翼のような偏りは生まれない」と回答している。

インターネット上の情報は自分の意見・主張や考え方にどの程度影響を与えているか

一般の人がどのような感想を持つかを知るには重要であるが、むしろそのようなインターネット上の多数意見とは違う見方を持つとする。

インターネット上の情報は自分にとって重要か

ブログに書く記事のきっかけとして重要。

自分に都合の良い意見ばかりを集めてしまうというような傾向はあるか

「1次情報源」にあたっているから大丈夫だと考えていると回答。

そういうのを防ぐために、なにか自分で心がけていることなどはあるか

これについてT氏は

新聞は全部入れてくれているから、偏りなく読めるのに対し、ネットは、結局自分で、一行のアイコンをクリックして読むから偏っているのだという論争がありますが、新聞だけで見出しの大小があるかっていったら、やっぱり読む人が選ぶためであり、どんなニュースの媒体にアクセスしていても、結局は自分の興味しか読まないのです。

むしろ新聞は、あれだけ多く情報が載っているから、それを読むと世の中のことがわかっていくみたいに思いがちだが、結局そこでも取捨選択をされるのであり、ネットにかぎらず、メディアに振り回される事自体が危ないと思っている。

と述べ、どのようなメディアでも自分の興味以外のものを読むことは不可能だろうと述べている。

そして、例えそのような選択による偏りが生まれても、他の人がカウンター意見を述べるから、その偏りは問題にはならないと回答した。

パーソナライゼーション・サービスの利用

Google ニュースを利用している。

インターネットからの情報により、自分の考え方や意見・主張などに何か変化はあったか

自分の考え方については、インターネット自体の影響はあまりなく、本からの影響が大きいと回答している。

5.3.4 インターネット上での表現について

ブログやサイトを始めようと思ったきっかけ

以前から mixi で日記を書き、友人とコミュニケーションを取っていたが、大学に入ってからニュースについてマス・メディアを批判する記事を書くようになった。そしてそれに対して友人ではない人々から、好意的なコメントが多くなったことにより、ニュースについての日記を多く書くようになる。

そしてその後、「『もっと多くの人、とりわけ mixi のような閉じたところではなく、開かれたところでブログを売り込んでみたい』と思うようになった」(TM2501 2011c)ことから、公開のブログを書くようになった。

どんなジャンルの文章を自分では書いているつもりなのか

自分が気になり、問題意識をもっていることならなんでも取り上げているつもりであると回答。

文章をインターネット上のブログやサイトで書く動機は何か

自分のブログが有名になることにより、自分に誰もない特技があるということを確認できると回答。

実際にブログを書いていると得られることはあるか

T氏はブログをやっていると得られることについて

文章自体で人がつながれるんです。例えば僕自身が好きな作家さんに対して、これいいよねっていう話をしたら、それによって繋がれる。そして繋がった先で、自分の文章、つながった先の人の新しいものを作ることに影響する。例えば自分が広告塔になることによって、その好きな作家の作品が売れる。そういうことがやりがいになっている。

と述べ、自分のブログによって新しいものが生まれるということ自分のブログによって得られることと回答した。

そしてそのように自分が何か他人の役に立っているという感覚は、今までの人生であまりなかったことだったというふうに述べている。

mixi とブログで記事の中身や書き方に变化はあるか。

mixi の場合は「10歳から30歳ぐらいの、遊び人みたいな人が、リアルのコミュニケーション

のついでにネットでコミュニケーションを取るみたいない感じだったため、そんなに詳しく記事を書けなかったが、ブログでは「30歳から40歳ぐらいの知識を多く持っているコアなネット層」が集まるため、そのような人々に合わせて詳しく目に記事を書いていたらと回答。

マイクロブログの利用の頻度, 利用法

一日に何回も書き込み, ブログに書いた記事を紹介したり, 自分が聞いてみたいことを聞いてみたり, ブログの記事にまではならない思いつきなどを書いたりしている。

mixi, facebook, my 日本などの SNS の利用の頻度, 利用法

mixi を利用. 公開で日記を書くことの他に, 友人とのコミュニケーションにも使用. mixi で登録している「マイミク」には

中学時代からの同級生. mixi で知り合った後に, 実際会って友人になった人. オフ会でそれっきり会ってない人. 完全にネット上でのみの付き合いの人

の4タイプが居ると回答した。

my 日本については, 一時期利用したが, 内輪向けの画一的なコミュニケーションしかできないため利用しなくなったと述べている。

アクセス数・コメント数・言及数などの数は気になるか

自分のブログの影響力がそれらの数字から分かると思うため, かなり気になると回答。

そのような数字がネット上での表現に影響を与えることはあるか

自分のブログを定期的に読みにくる人を増やすために, 自分のファンを作るような記事を心がける。

コメントや他サイトなどでの言及は読んでいるか

一応ひと通り全て読もうとするが, あまりに多く, 数十件以上になると読みきれなくなる。

そのようなコメントや言及には返信をするのか

余裕があればきちんと返信するが, あまりにコメントが多いと返信しなくなる。

そのような反応の内容がネット上での表現に影響を与えることはあるか

そのような反応が自分の考え方や意見・主張などに変化を与えたか, それはどんな変化か

反応が得られると嬉しいので, より多く反応が得られるように, 自分の記事の中で反応が多かった記事に共通する傾向を考え, その傾向に沿った記事を書こうとするが, そういう風に意識する記事が受けることはあまりないと回答。

そのような反応は気持ちの良いものか悪いものか, それとも割とどうでもいいものなのか

反応が少なかった頃は, 肯定的な反応によって自信を得ることが多かったが, あまりに批判的な, 「ちゃんと記事を読んでいないような」反応が多いと, 自分の中でどうやって受け止めればいいのかわからなくなると回答している。

サイトに定期的にコメントを寄せる人についてどう思うか

そういう人たちを大事にしたいと思っている. その理由として,

固定の読者を大事にすることにより, ブログで独り歩きしている僕の存在が, 地に足ついて帰ってきて, 現実の自分とブログ上の自分が乖離しないようにならなくなるのでは

と述べ, そういう定期的に読んでいる人ならば, 自分の望む通りに自分のブログを読んでもくれると予想されるからと回答している。

文章を書き始めて, 何か自分に違いは生まれたか

自分の生活全般においては, ブログが「1人の彼女」のような存在となり, その彼女に自分の生活の時間の大半を取られるようになった. その原因として, 就職活動に失敗する中で, 「僕にとってのブログとは, 一番, 自分の中でうまくいったこと」となり, その特技を突き詰めていきたくなったと述べている。

始めてコメントや言及が殺到した時どう思ったか

数も多く, また自分が反論できない指摘であったために「気が滅入り, 『おっしょるとおりです』と返すしかなかった」と述べている。

なぜ自分のブログがここまで批判されるのか

なぜ自分のブログがここまで批判されるのかについて, T氏は

誰の発言が, スタンドになるかっていうのが重要であり, ネット上での有名人か, 初めに記事に言及した人が, その記事に対して, こう言及したら批判されないだろうという評価の基準をあらかじめ示している。

ネット上での有名人が, ちょっと変な解釈したら, それでひとり歩きしてっちゃうんです. あれには勝てない

という風に述べ, 批判する人が1人いてそれに大勢の人が流されるから自分のブログは批判されるのだという風に自己分析している。

そのような反応はその後のブログの内容などに影響を与えたか

批判的な反応が殺到するのは嫌だったが, どうやれば防げるのかわからないのと回答。

しかしその一方で, そのような反応は自分の気持ちを誤解しているものだ考え, そのような誤解は嫌なので, 「ひとり歩きした自分と, また別の自分を演じるっていうので打ち消すしかない」

と述べている。

ブログで書く内容で異なる意見の他人を説得できると思うか

自分の文章によって一般の人を説得するということは「これっぽっちも思っていない」と述べ、自分の考え方が選択肢の一つとして、議員や知識人など「本当の決定」を下す人に参考にはされるだろうと回答。

ブログに書いている意見は本当に「自分の意見」なのか

その記事を書いた時点において自分が面白く、また正しいと思っている記事を書いているつもりであると回答。ただその中で、より反応が多い記事を書こうとは思っているとも述べている。

5.2.5 その他

反フジテレビデモへの参加動機

反フジテレビデモについてT氏は

フジテレビデモの発端っていうのは、自分たちの言っている、文言というか原則といいますが、そういう決まりを、彼らが破っているという所にあります。つまり放送法で言う公正な報道とか公共の電波とかを破って、放送法に書いてない方向に偏っていったんですね。で、それに対し、言っていることと違うじゃないかって言って意見を言う話で立ち上がった人っていうのが、いっぱい居るんです。

と述べ、放送法には「公正な報道とか公共の電波」とか書かれているが、それを彼らは破っているという事に対する憤りが、反フジテレビデモに参加した大きな動機だったと回答した。

そして、反フジテレビデモがそこまで自分にとって重要だった理由として、震災以降マス・メディアで情報が隠されているという意識があったのではないかという問いに対して

意識というかまあ実際隠れてましたけどね。うん……誰がどう見たって嘘だろうと、外国のソース見たって分かるような、外国のソース勝手に流通するほど、情報に飢えていた人たちが、こういうことするの俺分かんなくないよ!?正直言うと、気持ちとしては、この気持ちは結局今になってもあんまり変わらないところで、別にそういう主義主張であなたと張り合う気は全くないんですけど、多分その部分で共感できない人っていうのは、あんまりいないと思います。

と回答している。

しかし今はもう「昔の考え方に理解はあるんですけど、今もそういうコテコテの人間かっといううと、そうじゃない……ですね」と述べ、今はそこまで反フジテレビデモを支持する気持ちはないと語る。そしてその理由として

フジテレビのデモの末路って何かって言いますと、最後は右寄りの人が70人だけ残って、電通にデモしに行くっていうやつなんですよ。そしてそういう人たちっていうのは、末端の報道陣に対して、麻生さん安倍さんの演説の時にちゃんと報道しろってヤジを吠えたりするような、内容決めてない人に対して、ただの作業員に対して罵るような過激派で、そういう人たちだけが残っちゃったんですね。

と述べ、反フジテレビデモの人たちが先鋭化してしまったことを挙げている。

5.2.6 T氏のブログの経緯

mixiでの日記(2008年頃~2010年6月)

T氏が現在のブログを書き始めたのは2010年7月ごろからだ、それ以前の、T氏が大学生だったころからmixiで日記を書いていたと、T氏は述べている。

そのころのmixiの日記の書き方についてT氏は

(mixiの)トップサイトを開くとトップニュースが横について、そこからニュースにアクセスして、で、記事読んで、で、次にこれに言及した人の日記っていうところに行くんですよ。mixiでの日記については、それのおかげで、ニュースについて書くと、ある程度アクセスが確保されるんですよ。それで僕なんかはミクシィ日記でニュースについて書いて、でその反響を見て……

という風に、mixiニュースについて記事を書くことにより、mixiニュースの記事の下部にあるリンクからアクセスがあるようにしていたということを述べている(図8参照)。

そしてそのように記事を書く内にT氏は、自分の日記に対してコメントが「毎日いつも5個コメントが、そのニュースからアクセスしてきた人によって付くようになった」という風に述べている。そしてその中で一番反響があった時の記事として、T氏は宮崎県知事の辞職のニュースについての記事を挙げている。

(コメント数が付いた)一番最高が口蹄疫の記事でした。東国原さんが宮崎県知事をやめるっていう時に、口蹄疫の報道についてもう一回蒸し返したんですよ僕が。あんまり言われてないけどこれこういう話だよなということを。口蹄疫の時に国の対応があまりにもおろそかだった上に(宮崎県知事が)報道でバッシングを受けて、報道陣の前で喧嘩する動画まで残っているということがあった。その件を(宮崎県知事が辞めるときに)動画付きで蒸し返して、そういう話があったから、結局地方のトップをやることのその無力さや虚しさを悟ってや

めたんだよ、というのを mixi で書いた所、反響がかなりあったんです。

ただその一方で、mixi でそのようなニュースなどに言及してマス・メディアの報道を批判する記事を書いていくうちに、それを嫌がった友人が離れていくこともあったと述べている。

(mixi には) オタク趣味から作った友達も多かったから、やっぱり煙たがられ、距離を置くような友人もあったけれど、結局それを続けて……

ブログの開設 (2010 年 7 月~2011 年 2 月)

そして mixi の日記で多くの反響を得たことが、ブログをはじめのきっかけになったという風に、T 氏はブログの記事で述べている。

口蹄疫の報道についての記事を書いた時に、『イネ!』という mixi の機能が 50 を越えました。コメントもその日記だけで 10 を越えた時に『もっと多くの人、とりわけ mixi のような閉じたところではなく、開かれたところでブログを売り込んでみたい』と思うようになってから友人のあの言葉を聞きました。

本当に作家になれるかなんか知らない。経済評論家を名乗れるほどの知識があるかどうかもわからない。だけど自分が読んだ考えを主張することで読んでくれる人を増やせるだけの内容が書けるようになっていいるなら『もっと強く、前に出るべきだ』と思ってはてなダイアリーを本格稼働させる事にしました。(TM2501 2011a)

そして T 氏は 2010 年 7 月にブログを開設した。記事の内容としては、主に自分が読んだ評論家の本などの紹介だった。

本とかアニメとか映画とかを気の向くまま紹介していくブログです。(TM2501 2007)

ただ、記事を書く頻度は、開設当初は一日ごとに一つ記事を書くことがある一方で、一か月以上記事を書かないことがあったりするなど、記事を書く頻度はまちまちだったのだが、2011 年の 1 月ごろから一日にかならず 1 記事は記事を書くようになっていった。

このことについて T 氏は、あまり詳しく覚えてはいないが、アクセス数の増加や投票数ランキングで上位になったことなどが記事を書くモチベーションになったのではないかという風に述べている。

正直言うと覚えてないというのが本音なんですけど、結局、楽天ソーシャルや、にほんブログ村のような(アクセス数を増やす)起爆剤が欲しかったわけです。ブログって検索エンジンだよりでやっていると、全然アクセス数は伸びないということに気づき始めて、それで mixi の日記では mixi ニュースを起爆剤にしていたのを、ブログではブログ村にするした、そういう感じですね。ブログをやるからには結局、(アクセス数が)伸びて評価されたいじゃないですか。

ここで T 氏が述べているにほんブログ村とは、そのサービスに自分のブログを登録することによって、そのサービスに登録しているブログ同士で投票数を競うことができるウェブサービスのことである。このサービスに自分のブログを投稿すると、自分のブログの記事に次のような画像を添付することができるようになる。

そしてこの画像がクリックされた数が多い順に、にほんブログ村のサイト上にランキングが掲載される。

また T 氏は、にほんブログ村のランキングで上位になることと共に、コメント欄やソーシャルブックマークサイトや twitter などでのコメントも、ブログにおいて重要視するようになったと述べている。

記事の良し悪しを測る基準がだんだんとソーシャルブックマークサイトだったり twitter だったりコメントだったりってことになってきて。特にコメントは徐々に増えていく中で、特に気を使うようになっていきました。

ただ、当時のコメント数やブックマーク数や twitter での言及数は表で示されているようにそれほど多いものではなく、寄せられるコメントも、毎回自分のブログが更新されると読みに来る数人の常連による、同調的なコメントが殆どだった。このような状況は 2011 年ごろまで変わらない。

月	A	B	C	D	E
2010 年 7 月	3	1	0	0	0
2010 年 8 月	1 2	3	0	0	0
2010 年 9 月	2	0	0	0	0
2010 年 10 月	1	0	0	0	0
2010 年 11 月	0	0	0	0	0
2010 年 12 月	6	0	0	0	0
2011 年 1 月	3 8	1 8	0	11	8

2011年2月	3 4	2 5	1	10	6
---------	--------	--------	---	----	---

表6 2010年7月~2011年2月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

東日本大震災の影響(2011年3月~2011年7月)

しかし2011年の3月ごろからT氏のブログでは、mixi日記で書いていたような政治やマスメディアに対する批判といったような内容が増えてくる。これについてT氏はマスメディアや政府へのいらだちがあり、みんなもそのようないらだちを持っているはずだから、それをブログで表そうと思ったと、聞き取り時に述べている。

3.11以降、みんなが報道に対して凄まじい熱心に見るような状態になったじゃないですか。それで私も結構見てて、なんか恨みでもあって報道に噛み付いてるような、mixi時代によく書いていた記事を多く書くようになったんです。

(略)

みんなイライラしてると思ったんですよ。あの時は、僕のブログの役割って何かなくなって、色々起きていることやもやもやしていることを、自分の角度でまとめて、代弁していくってことなんだと思うんですよ。

そしてT氏は「マスメディアや政府によって事実が隠されているのだから、知ることが重要だろう」という意識を持ち、実際に被災地などに取材に行っている。

ただ一方でこのような記事を書いても、特に以前とコメント数などに違いはなく、アクセス数も一日平均数百で、それほどブログ開設時と違わなかったと、聞き取り時に述べている。

月	A	B	C	D	E
2011年3月	3 3	1 3	1	3	7
2011年4月	2 7	1 6	1	8	8
2011年5月	1 8	1 0	0	5	7
2011年6月	2 3	9	0	21	8
2011年7月	2 6	2 8	3	13	19

表7 2011年3月~2011年7月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

反フジテレビデモへの参加(2011年8月~9月)

そして2011年の8月に開催された、フジテレビに対する抗議デモに参加し、そのデモの様子の報告記事を書いている。

この反フジテレビデモに参加しようと思った理由についてT氏は、東日本大震災以降のマスメディアに対する苛立ちがあったことや、「韓流を捏造している」などといったデモの主張への賛同から、デモに参加したと述べている。

そして記事では反フジテレビデモの主張や、その盛り上がりを紹介し、それを支持するコメントが数件寄せられた。

月	A	B	C	D	E
2011年8月	1 7	1 2	5	6	15
2011年9月	2 3	2 7	3	11	25

表8 2011年8月~9月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

評論への方針転換(2011年10月~2012年3月)

しかしフジテレビデモに参加したことを書いた記事以降から徐々に、T氏のブログの記事で書かれる内容は変化し始め、また記事に対して多くのコメントや他サイトからの言及が多くなされるようになってきた。

まず記事の内容について、T氏はこのように述べ、震災から時が経ち「知る」ことから「解釈する」ことの方が重要になったと述べ、何かを取材してそれを明らかにするといった記事よりは、よく知られているニュースやアニメ作品など、既に広く知られていることを解釈し直す内容の記事が多くなっていったと述べている。

震災の時は情報がそもそも隠れていたじゃないですか。だから知ることが重要だっていう(当時の私の)スタンスは間違ってたんです。だけど震災時隠れていた情報が保守陣営によって明らかにされてくると、今度は、知ることよりも解釈するスキルのほうが重要に

なってきたんです。だから、もう(2011年の)8月から9月になってくると、そういう野暮を言っている人間ってというのはちょっと時代遅れだと思うようになったんです。

ただ、そうやって方針転換をしていった一方で、その時期から急に数十件といった数のコメントやソーシャルブックマークや twitter 上での言及がなされるようになり、またそれまでは見られなかった、記事に対する批判的な言及も多くなされるようになってきた。

このような状況を T 氏は「炎上」と呼ばれるような、批判的な言及がブログに殺到している状態であったと捉え、当時の心境についてこのように語り、批判が殺到したことでも落ち込んだと述べている。

400 人ぐらいのちゃんと記事を読んでない人が一斉に頭ごなしに批判してきて、しかもその中には自分が尊敬している人がいたりしたら、本当に気が滅入りますよ。(炎上が当たり前になった)今だったら大したことないかもしれませんが、この時は正面から受け止めてぶっ飛ばされてしまった気分です。それぐらい、その時の批判は、その質も数も今までとは全然違って、全く反応ができませんでした。

このように言及が多くあることについて、記事を書くときに予想できるものなのかという問いに対し T 氏は「全く予想できません。むしろ、これは反響を集めるだろうと予想する記事はあまり反響がなくて、そんなに反響はないんじゃないかと思って書いた記事に対して多く言及が集まるという感じですよ」という風に述べ、全く予想できず、むしろ予想の反対をいくということ述べている。

月	A	B	C	D	E
2011年10月	23	16	7	61	76
2011年11月	30	18	5	69	177
2011年12月	29	34	4	53	100
2012年1月	31	55	1	19	101
2012年2月	30	25	1	162	292
2012年3月	21	47	7	570	963

表9 2011年10月~2012年3月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

現在(2012年4月~)

そしてそのような「炎上」を何度か経験していくうちに、T 氏の記事は、評論から、自分がどんな人生を送ってきたどんな人間であるかということについて書くように記事の傾向が変化していった。

そのように記事の傾向が変化した要因について、T 氏はまず、当時大学を卒業して働き始めたことにより忙しくなり、本を読んだりする時間がなくなったということ挙げている。

結局、朝の7時に出勤して、終電で帰って生活してたら、どこも本読む暇ないんですよ。で、そういう生活をやってると、どうしても書くことが日常のものしかないんですよ。書評や時事ネタを書こうと、一時間半ネタを探しているだけで疲れちゃって終わっちゃうんですよ。だからそれが(日常の事や自分のことばかり書くようになった)原因なんです。

ただ理由はそれだけではなく、自分のことを多く書くことによって、自分のブログに対して批判してくる人たちの中の、自分に対するイメージを打ち消すことができると考えていることも、自分のことについて多く書くようになった理由だという風に述べている。

自分がブログをに記事を書き込んでも、ネット上で有名な人たちが、ちょっと変な解釈したら、それで(自分という存在が)ひとり歩きしてっちゃうんですよ。

(略)

だからひとり歩きた自分と、また別の自分を演じるっていうので打ち消すしかないんですよ。それによって自分の存在が地に足ついて帰ってくるんですよ。

ただ一方で、そのように自分のことについて書くような記事は、それ以前の評論ほどは批判的に言及されない一方で、それ以前ほどには多くの言及はされず、T 氏によればアクセス数も、炎上していた時期が一日 3000 アクセス程度だったのが、500~1000 アクセス程度まで落ち込んでいるという。

月	A	B	C	D	E
2012年4月	20	26	20	115	117
2012年5月	2	5	0	46	78

	2				
2012年6月	15	39	1	141	131
2012年7月	13	6	3	27	34
2012年8月	10	6	0	37	33
2012年9月	16	11	2	64	90
2012年10月	4	4	0	17	18
2012年11月	0	0	0	0	0

表 10 2012年4月~11月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

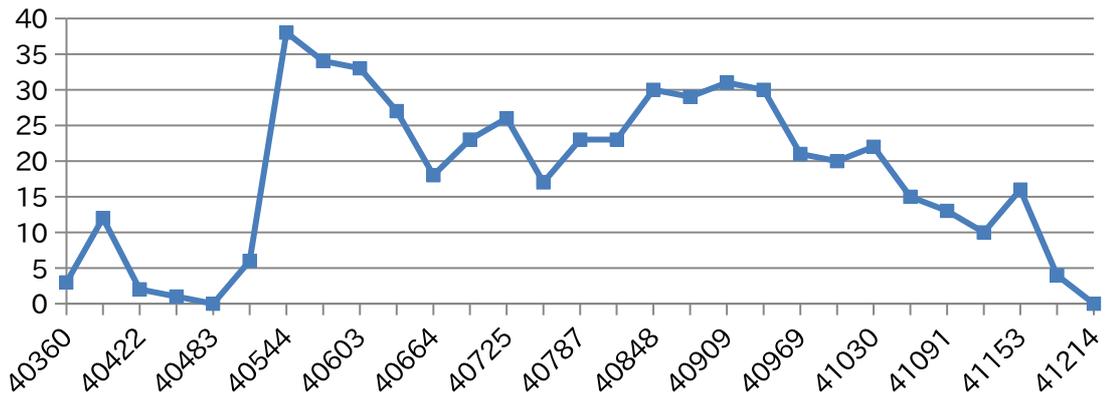


図 10 T氏のブログでの記事数

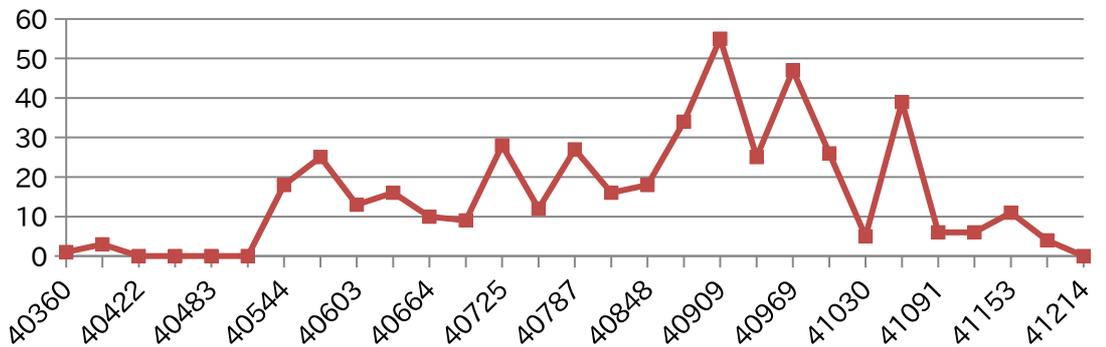


図 11 T氏のブログの記事へのコメント数

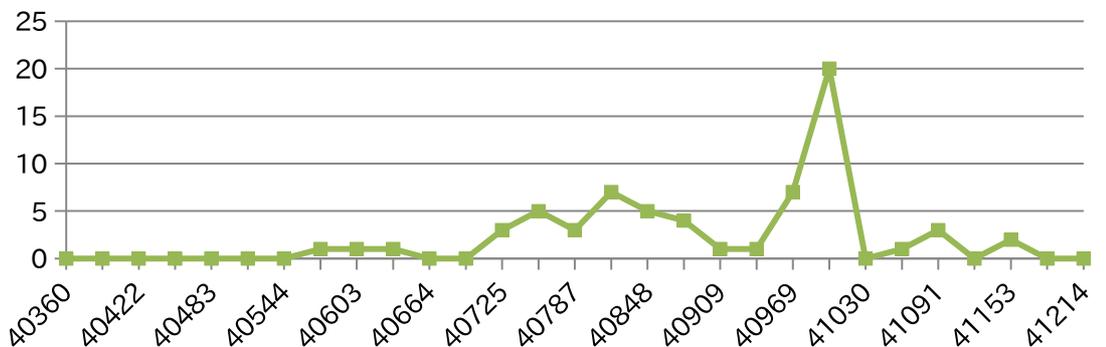


図 12 T氏のブログの記事へのTrackback数

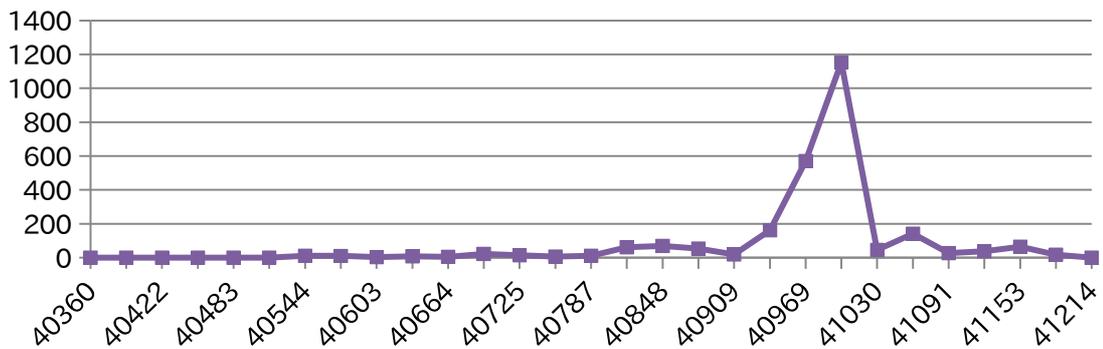


図 13 T氏のブログの記事へのソーシャルブックマーク数(はてなブックマークのみ)

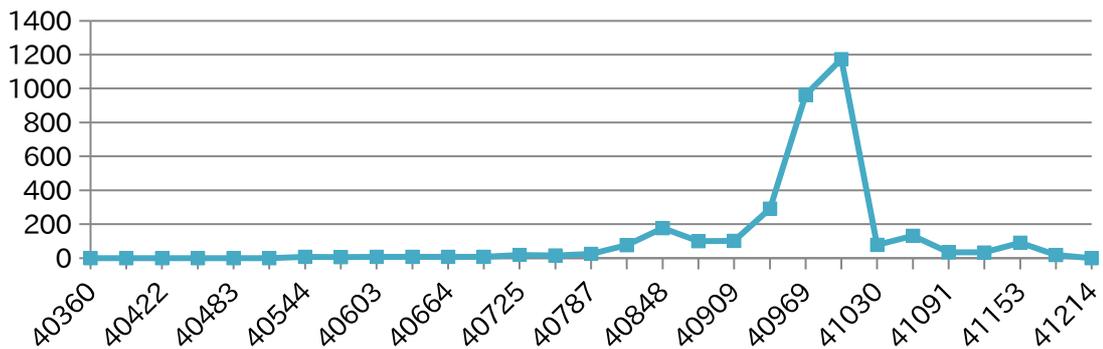


図 14 T氏の記事へのtwitterでの言及数

5.3 H氏について

5.3.1 H氏の運営しているサイト

- アニオタ保守本流(古谷 2012d) (2007/3/10~)
- 工兵小隊司令部[<http://d.hatena.ne.jp/otakohei/>] (2008/4~6)
- 自主映画製作集団玄武映像 [<http://d.hatena.ne.jp/otakohei/>] (2008/8/25~2009/8/20)
- インターネットラジオニコニコアニメ夜話 [<http://www7b.biglobe.ne.jp/~animeyawa/>] (2009/4/8~)
- 古谷経衡公式サイト[<http://www.furuyatsunehira.com/>]

5.3.2 H氏の使用しているSNS

- mixi
- facebook
- my日本(一時期)

5.3.3 H氏の経歴

H氏は1982年北海道札幌市に生まれた。H氏は小学校高学年頃に軍艦が好きになり、そこから戦史に興味を覚えたことにより、歴史問題などに興味をもつようになる。

そしてその戦史などへの興味の延長で、立命館大学文学部史学科に入学するが、大学に入った後に

僕としては日中戦争とかを研究できるゼミに行っても良かったんですけど、そういう分野を研究しているゼミがなかったし、またそういう研究は独学で、インターネットを使ったり本を読んだりすれば良いと思ったんです。

だから、全然自分が知らない領域のところに行こうと思って、被差別部落なんていうのは北海道出身だから、実態は全く知らなかったんです。それで、小林よしのりさんの差別論を読んだりしたんですけど、どうも調べていくと、あれはあれで違っているということを知ったりして、じゃあ実際どうなんだろうと思ひ、そういう全然知らない分野の、先生についてそれで勉強しようかなと思ったんです

という考えを持ち、被差別部落の歴史を研究する先生のゼミに所属する。そしてその頃にインターネットを利用し始め、自分と同じような意見をもつ人がインターネット上に多くいることを知る。途中、2001年の暮れ頃に文芸サークルに入り小説を書いてサークルの同人誌に掲載したり、2002年に映像系の専門学校に入って2003年に中退したりしている。

そして2008年に大学を卒業し、卒業後は

学生時代からバイト先で懇意だったインターネット通販の零細企業のコネを使って、

主に物販・通信販売の遠泳サイト構築,各種通販サイトへの登録申請代行とその他煩雑な書類提出の代行,また自分で開拓した仕入先を企業に紹介し,売上の何割かを頂戴するとか,言ってみれば総合通販コンサルタントのような自営業(古谷 2012a: 80)

を2011年まで勤める。また,その時期にはアニメ誌に投稿したりもしている。

そして2007年3月頃から「アニオタ保守本流」というブログをはじめ,2009年4月8日からは「ニコニコアニメ夜話」という,友人とアニメ作品などについて語る音声やニコニコ動画やユーチューブにアップロードする形式のネットラジオも始めた。

その後,2010年の3月9日に東京都の非実在青少年規制⁹⁾について視聴者ゲストとしてラジオ番組に出演する。

そして2010年の8月に日韓関係について視聴者がスタジオで議論する形式のNHKの番組に出演し,韓国併合は植民地支配ではないという旨の発言をしたところ,ネット上で反響を呼び,保守系テレビ局のチャンネル桜に呼ばれて出演。そこから保守系の団体に関わるようになり,尖閣諸島問題や韓流についてのデモなどで演説をしたり,チャンネル桜に定期的に出現したりするようになる。

そして2011年3月頃からJAPANISMという保守的主張を載せる雑誌に編集者として参加し,記事を執筆するようになり,忙しくなったために2011年にウェブ通販コンサルタントの仕事は退職する。2012年の6月からはJAPANISM編集長に就任し,現在に至る。

5.4 H氏の項目別聞き取り結果

5.4.1 プロフィール

政治や経済や社会問題について興味を持ったきっかけ・経緯

H氏は著書の中で,自分が保守的な思想を持つようになったきっかけを

それまでの私は京都の某私立大学を7年かかって卒業したしがいない小市民だった。

(中略)

少々自虐的に言えば,文章をこねくり回してさも高尚な論を書いた気になり,どうだおれは文士の卵だぞと言ってドヤ顔するのに快感を覚えていた学生だったというわけだ。

一方,思想的にはこの当時から保守的傾向が強かった,私の世代はなんといっても,中学・高校の一番多感なときに,小林よしのりのベストセラー『戦争論』に薫陶を受けたと真ん中に当たる。とはいえ,「戦争論がきっかけで保守や愛国に目覚めました!」という真っ直ぐなタイプでもない。

私は子供の時から軍艦が好きで,それが講じて戦史にも興味を覚えるようになり……本格的な保守思想に触れる前段階に,ミリタリーオタク,軍艦プラモマニア,さらには戦史オタクの少年として,十分に保守派の土台が培養されていったというよと思う。(古谷 2012a: 81)

という風に記述している。そして聞き取りでは

先の戦争のことを勉強するようになって,勉強すればするほど,かつての戦争は自由戦争だったという思想に行き着いていった

という風に述べ,「すごく趣味的な所から,その思想とか戦史の方に行った人間」であるという風に述べている。

家族について

元国家公務員で,現在は退職している父親と,専業主婦の母親,それに大学生の妹が一人いると回答している。

デモ活動・集会などへの参加歴

2010年8月頃にNHKの視聴者参加型番組に視聴者として参加する前には実際に保守的な政治活動に参加したことはなく,NHKの番組に参加して以降に保守系の運動団体と知り合い,そういう人々のデモに参加するようになったと回答。

「ネット右翼」という呼称についてどう思うか

「ネット右翼」という呼び方についてどう思うか尋ねたところ,ネット右翼と呼ばれるのは嫌いであると答え

ネット右翼というものには蔑称のニュアンスがあるというのが,まず一つ目の理由ですよ。いわゆる差別語という風に聞こえるというのが(ネット右翼という呼び方が嫌いな)大きな理由の一つです。

あと一つの理由は,そもそも自分らは右翼ではないと,自分らは,真っ当なこと言ってるんであって,政治的にはニュートラルであり,右翼ではないから,ネット右翼という単語には該当しないんだというのが二つ目の理由です。

ネット右翼という言葉には,(その言葉が)いつから出てきたのかは釈然としないんですけども,無知・無教養とか,そういったニュアンスが,感じられるという風に思っている人が多いと思うんです。

どこかでやっぱり,とはいえ,自分たちはやっぱり,社会的には右だと自覚はしているわけです。ただその中で,やっぱりネット右翼という言葉が持つ,侮蔑的な,無知無教養には

されたくないという思いが、やはり相当あると思うんですね。

と述べ、ネット右翼という言葉に無知無教養といった侮蔑のニュアンスがあることから、ネット右翼という呼び方が嫌いであると述べている。

5.4.2 マス・メディアについて

テレビ・ラジオを一日に何時間ぐらい視聴しているか

一応テレビはあるが殆ど見ておらず、月に、1・2 番組見る程度であると回答。ラジオは毎日頻繁に聞いていると述べている。

お気に入りの番組などはあるか

「NHK スペシャル」や「世にも奇妙な物語」など。

テレビ番組を批判的に見たりするのかどうか

H氏は

批判的に見るときもありますけど、批判的に見る場合は、後から、こんなひどい番組があったっていうのを、みんながわーって言うから、そうなんだと思って、見返すっていうことがほとんどです。

自分から見る番組っていうのはなぜか当たりが多いのであまり批判的には見ません。

批判的に見るというのは面白くないですよ、. あらを探してやろうと思って見る視聴っていうのはそれこそ面白くなくて、やっぱり映画なりテレビなりって、面白いなと思うから見に行くわけであって、それと同じですよ。

という風に述べ、ネット上で騒がれる番組については批判的に見返すことはあるが、そうでない番組についてはある程度評価し、特に批判的に見ることはないと回答している。

新聞は読んでいるか

新聞は、購読はしてはならず、朝日・読売など新聞のウェブサイトに行って記事を流し読みする程度であると回答。

新聞記事を批判的に読んだりするのかどうか

新聞記事についても、テレビ番組を見る時と同じようなスタンスで読んでいると回答。

読書はどの程度しているか

世の中の動きを知るために、週刊文春・週刊新潮を「テレビや新聞とは比較にならぬほど重宝している」と述べ、更に週刊ポスト・週刊現代も時々買っていると回答している。

雑誌以外の本については、毎月2桁ほど買い、読んでいると述べている。

読む本を選ぶきっかけ

週刊文春・週刊新潮の書評や、ラジオなどで紹介されたりした本を読んでいる。

5.4.3 インターネット上での情報摂取について

ネットサーフィンをする時間は1日どのぐらいか

純粹にネットサーフィンをしているといえる時間は2時間ぐらいだが、仕事をしている途中でちょっと見るような時間を含めると相当な長さの時間になると回答。

どのようなサイトを主に見ているのか

ネットサーフィンにおいてどのようなサイトを巡回しているかという問いに対しH氏は

まず twitter,次に facebook の順にチェックをしていきます。twitter について自分で作ったリストをチェックしていき、facebook については、最新のタイムラインと、周りの人の近況をチェックしていきます。そして(それらの発言を)チェックしていく中で、(別のサイトへの)リンクがあったら、そこにアクセスして詳しくチェックするという感じです。

あとは、日経・読売・産経・朝日のウェブサイトですね。この4つは絶対毎日見ます。で、その後にヤフーも見るとは見ます。この5つは必ず、何らかの時に一日に何回かは見に行きます。まあそんなものじゃないですか。

というふうに述べている。

facebook とは SNS の一つである (facebook 2012)。そして facebook にはニュースフィードという機能があり、そこでは友人が投稿した情報の一覧を見ることができる。



図 15 facebook のニュースフィード

黒枠の部分がニュースフィードである。この場合はホワイトハウスのアカウントを「友人」として登録しているため、ホワイトハウスが facebook で投稿している情報が掲載されているが、もちろん個人のアカウントを「友人」として登録することも可能であり、登録した場合はその個人が facebook に投稿した情報が黒枠内にリストアップされる。

そして先に Pariser が述べている通り、facebook のニュースフィードにはパーソナライズ機能があり、facebook 上での行動によってここに掲載される情報が限定されることもある。

そういう twitter や facebook の発言で紹介されるウェブサイトはどんなものが多いかという問いに対しては

割とまとめサイトが一番多いんじゃないですか。今の時期。あとは Youtube とかニコニコ動画もあるし、他にも通信社やポータルサイトのニュース記事へのリンクとかもあります

と述べている。

ソーシャルブックマーク・2ちゃんねるまとめブログ・個人ニュースサイトなどはごらんになるか

ソーシャルブックマークなどは情報が膨大すぎるのであまりみないと回答。2ちゃんねるまとめブログや個人ニュースサイトについては次のように述べ

日常的には見ないです。やっぱり2ちゃんねるのまとめブログは玉石混交で、ネタに偏っているところもあるじゃないですか。そのネタが、玉なのか、石なのかということもあって。

自分で意識して、まとめブログというのはないですけど、twitter とかに流れてくるもののリンク先がまとめブログだったりする可能性はあるので、それは、見ます。

個人ニュースサイトは、あんまりちょっと信用性がないので、結局ソース元を辿らないといかんじゃないですか。それだったら直接新聞のウェブサイトに行ったほうが早いので（個人ニュースサイトはあまり見ません）。

偏りや信頼性という問題からあまり見ないという風に述べている。

インターネット上の情報は信頼のおける情報だと思っているのか、それとも批判的に読むように心がけているか

インターネット上での情報の信頼性について H 氏は、インターネット上で信じられている様々なデマについて紹介した上で

そういうネット上で信じられている常識を、ちょっと調べれば、嘘だったりするのが分かるっていうのが僕にとっては面白いので。ネットをそのまま信じるのっていうのは僕的にはちょっとアンフェアというか、性に合わないと思いますね。だからといってテレビの報道全部信じるかといったらそれはないんですけど、やっぱり精度としてはちょっと欠けるかなとおもいます。

という風に述べ、インターネット上の情報には疑わしいものがあり、きちんと調べなければならぬ
と思っていますと述べた。

インターネット上の情報は自分の意見・主張や考え方にどの程度影響を与えているか
インターネット上の情報が自分に与えた影響について、H氏は

僕の世代は、小林さんの戦争論が本当に大ベストセラーになった時に高校生だった
もので、周りに戦争論を読んでない人間は馬鹿だっていう風潮があったかと思うんです
よね。

ただまあ高校生ですから、こう割とこうなんか世界が小さいですよ。でそん中でまあ
流行っていて、大学で自分でネット導入した時に、自分たちの世代の考えていたことが、
自分たちだけじゃなくて、他の人も同じような感覚で生きてたんだというのがまず分か
りましたよね。

僕の周りではそういう大東亜戦争を肯定したり、戦争についてポジティブなことを言う
のは、同じ世代のクラスの中で言うのはいいかもしれないけど、やっぱり世間的にはマイ
ノリティだっていう印象がやっぱりあったんですよ。

それが大学に入ってネットを使い始めた時に、あ、なんだここでは、我々の感覚って
いうのはマイノリティじゃなくてマジョリティだったんだと、思ったんです。まあただ一方では違
う人もいるなというのはわかりましたけど。

我々ネットに参加する若い世代では、マジョリティっていうのはやっぱりこっちにあるん
だというのがやっぱりすごく感じましたよね。

だからインターネットによって考え方が変わったというよりは、補強されたっていうの
が、正しいです

という風に述べ、インターネット上の情報によって自分の意見が補強されたというふうに答えて
いる。

一方でインターネット上で自分と異なる意見にも接することがあるのではないかという問い
に対してはこう答えている。

だから逆転現象みたいなのが二つ起こるんですよ。一つは今言ったようにその、自
分たちが決してマイノリティじゃなかったんだと思うのがまずひとつの衝撃じゃないです
か。

でもその後にもう一回やっぱり来るのが、でもやはりネットはマイノリティだよという、
ネット全体が、マイノリティだよっていう風に思うようになります。ネットのパイの中では
我々はマジョリティだけれども、それは週刊誌なりテレビなりに比べるとやっぱりマイノ
リティだよという、二つ目のショックがあると思うんですよ。

でそんな中で、ネット上の左翼の人に対しては、そういう人について、最初は馬鹿にする
わけですよ。そういう人はなんでネットの中でこんなね、自虐史観みたいなこと言っ
てんのこいつ馬鹿じゃないのと思うんです。

でも2つ目の衝撃がきた時に、彼らのようなリベラルな考えの人のほうが、世の中の
中枢に居るかもしれないよねという、2つ目の現実につつかるんです。

というふうに述べ、異なる意見については馬鹿にしているが、しかし一方でそれがネットの外で
は多数派であるということも自覚していると述べている。

自分に都合の良い意見ばかりを集めてしまうというような傾向はあるか

しかしそうやってインターネット上で同じような意見の人とばかりコミュニケーションをとっ
ていくと、自分の意見を補強するような情報だけを摂取しがちになってしまうのではないかとい
う問いに対して、H氏はこのように答えている。

それは陥りやすいことだと思うんですよ。

自分たちのクラスの中でしか通用しなかった世界がネットに行ったら全国に広がって
いるかのような錯覚を受けて、自分たち以外にも多くの賛同者が居るのが分かったと、ま
るで世界が広がったように思いがちですけども、それは広がってないんですよ。

ただ単に住所違うだけで、向こうのマイノリティ、例えば鹿児島県のマイノリティ、大阪のマ
イノリティ、東京のマイノリティとつながっただけなんですよ。

だからそれをどこまで分かってやっているのかなというのは思います。僕の(ネットを
始めた)時はほんとにちょうど、ブログ元年とか言われて、まだネットやってない人のほう
が多かった時で、その時から(ネットを利用しているから)、そのへんはリテラシーがある
と思いますけど...

ただ同じような意見ばかり聞いてっちゃうっていうのは、確かに由々しきことではありま
すよね。特に、今ネットが今拡大しきっちゃった時にネットをやっている若い子においては。

このように、H氏はインターネットで自分の好む情報のみを摂取してしまうことを問題と思っ
ていると述べている。

そういうのを防ぐために、なにか自分で心がけていることなどはあるか

そういった情報摂取の偏りを防ぐために心がけるべきことや、自分が心がけていることがある

かという問いに対し、H氏は

どうでしょうね。うーん、自分の世界観の狭さとかを、他の媒体で埋め合うしかないんじゃないですか。それは別に漫画でも良いし、アニメでも良いし、だから僕がなんでネットでそんなにまとめサイトとか 2ちゃんねるをあんまり見ないのかというと、見たって、別の場所に住んでいる僕みたいな人の意見を聞いてもしょうがないよね、っていう話なんですよね。それは意味ないじゃないですか、だから、思いっきり反対の意見を聞くほど、僕は寛容じゃないですけど、ちょっと違う毛色の媒体、だから一番週刊誌とかがいいんじゃないかなと、今振り返って分析したら思います。

というふうに、ネットとは違う媒体から情報を得ることが重要ではないかと述べている。

パーソナライゼーション・サービスの利用
facebookのニュースフィードを利用している。

5.4.4 インターネット上での表現について

ブログやサイトを始めようと思ったきっかけ

2007年の3月頃にブログを始めようと思ったきっかけについてH氏は

大学生をしながらウェブの構築とかをしていて、そこでまあちょっと悶々としておりまして、自分の趣味を世の中に出したいなというのがありました。

それで、確かその頃はブログが定着したぐらいの時期で、自分は元々ブログが嫌いだったんですが、でもどうやら(ブログが)広がっていったらしくて、だったらまあ自分でもやってみようかということで、やってみよう。

それで、アニメが大好きだったから、まあ(アニメの)批評もどきみたいなのをやってみようかと思いました。

という風に述べ、自分の趣味を世の中に出すためにブログを書き始めたというふうに回答している。

そして2009年の4月頃に始めたネットラジオの方については

ネットラジオをやってらっしゃる方が、当時日本で結構居たんです。それで、そういうネットラジオをやっている人と面識がありましてですね、まあ色々そういう方のラジオを聞くんだけれども、正直、そういう人たちのラジオを聞いていて、このレベルだったら俺でも出来ると思ってたんです。それでやりはじめました。

という風に述べ、自分のほうがもっとうまく出来ると思ったことがネットラジオを始めたきっかけであると述べている。

どんなジャンルの文章を自分では書いているつもりなのか

ブログはアニメの話題中心で書いているつもりではあると回答している。

文章をインターネット上のブログやサイトで書く動機は何か

「おなじ様なことやっているような人を見た時に、俺のほうが出来ると思ったから」と回答している。

実際にブログを書いたりネットラジオをやっていて得られることはあるか

ブログやネットラジオについてH氏は、大学の文芸サークルで小説を書いて賞に投稿したりする経験と同じであると述べ

アマチュアとはいえ、文章をオープンにすることで相当鍛えられたなという印象はありますね。ブログの文章については、後で修正できますけれども、書いていくうちに自分の文章に悩んだりしたこと当然出てくるわけで、文体とかについて色々本読みしたりして、そしてそうやって書いた文章を他人が読んで、それについて反応をもらい、切磋琢磨するという経験が出来るんです。

という風に述べ、文章や評論を書く訓練になったという風に述べている。

ネットラジオとブログで記事の中身や書き方に変化はあるか

ブログではより「地が出る」という風に語り、記事のテーマによって変化があるかという質問については「そんなに書き方やスタンスは変わってないが、政治的なことについてはより強く、自分の価値観に基づいた自分の主張を述べるようにしている」というふうに回答している。

マイクロブログの利用の頻度、利用法

twitterを利用しているが、そこに投稿する文章はfacebookに投稿するような文章と同じであり、ニュースについての意見や近況などを投稿しているが、特にtwitterで来る返信は見えないと述べている。

mixi, facebookなどのSNSの利用の頻度、利用法

2001年から2003年頃はmixiを使っていたが、いまはあまり使っていないと述べている。

my日本というSNSも利用していたが、それについては

my 日本は、2010年の尖閣の事故の時に非常に盛り上がりましたけれども、去年の地震ぐらいからもう、勢いがなくなってまして、僕も今は一カ月に一回、行くか行かないかぐらいです。

という風に述べ、現在ではほとんど利用していないと回答している

そして最近頻繁に利用しているのはむしろ facebook であり、そこでの友人は殆どが面識がある人間のみでだと述べている。

そして facebook では、友人の発言をチェックすると共に、自分の発言を行い、それについてコミュニケーションが生まれることはあるものの、誹謗中傷などは殆ど無いとした。

アクセス数・コメント数・言及数などの数は気になるか

ブログのアクセス数やネットラジオの再生数について H 氏は

ああいうのって正直、水物っていうかその、何が(要因で)多くなってっていうのが分からない部分もありますよね。

僕はなんていうか、基本的にラジオの感覚でやってまして、でラジオの番組っていうのは、喋り方を変えたりとか、どこかの新聞でラジオの内容が紹介されたからといってその回だけが異様に(再生数が)増えるってことはないと思うんですよね。ラジオのパーソナリティーが好きだから毎週聞くっていうのがあるじゃないですか。そういうのを僕は目指しているのだから、再生数はそこまで気にしません。

と述べている。

コメントや他サイトなどでの言及は読んでいるか

読んでいると回答。

そのような反応の内容がネット上での表現に影響を与えることはあるか

コメントなどの反応がインターネット上での表現に影響を与えるかについて H 氏は、まずインターネット放送の方について

インターネット放送で人気あるやつを上から順番にあげてみていったら、正直ゲテモノが多いと思うんです。インターネット放送に多くのユーザーが求めているのは、怖いもの見たさ、お化け屋敷みたいなもんなんですよ。だからそれは番組の質の評価としては到底使えないですよ。

ああいう放送はやってる方も酔っちゃう部分があって、自分の言ったことがダイレクトに反応されますから、なんか自分はこんなに支持されてるんだみたいなことを思いがちなんですよ。でも支持されてないんですよ。だってせいぜい累計で 1000 人とか 2000 人じゃないですか。実際リアルタイムで見ている人は、その何分の 1 か、そういった限られた人たちに向けて、奇抜なことやってそれは面白いとかすげえとか言われるのは、番組の質とは全く別物なんで、僕はあんまり信用してないんです。

という風に述べ、コメントなどの反応に合わせすぎるのは良くないのではないかという考えを述べた。

そしてブログへのコメントや言及については

言及での指摘が。例えば統計とか用語の誤りといった事実の部分であれば、それはもう、こちらが間違っていたので、修正すると思うんですけど、考え方の違いは、正しいものがありませんから、それは無視します。

それはそれぞれ人様の考えですからね、事実の部分だと修正しますけれども、考え方だとまあ、へえっていう、ぐらいですね。

という風に述べ、事実の問題については修正するが、考え方の違いについては無視するというように回答している。

そのような反応が自分の考え方や意見・主張などに変化を与えたか、それはどんな変化か自分の価値観に対する否定的な反応は無視しているが、肯定的な反応については「非常にいいんじゃないかなと思った」というふうに述べている。

サイトに定期的にコメントを寄せたりする常連といった人はいるか、そのような人についてどう思うか

常連はいるが、そういう人たちに向けてブログを書きだしたら終わると思う。そういう内向きな方向に向けてアピールして成功した例を知らないという風に回答している。

そのようなサイトの常連と連絡を取ることはあるか

ほとんどない。

始めてコメントや言及が殺到した時どう思ったか

ある程度予想はしていたが、「ここまで病的な人達が大勢いるとは思わなかった」というふうに回答。しかし特にへこんだりすることはない、

まあ、まあしめたもんだぐらいには思いました。そうですね、つまり黙殺されるよりは、まあ話題になるということは良いことですから、これをきっかけに、1 人でも 2 人でもこの意見

に賛同してくれるんだったら、いいんじゃないかと思いました。

と述べ、1人でも2人でも同意するコメントが来るなら他の大勢が非難しようと別に良いのではないかという考えを示した。

なぜ自分のブログがここまで批判されるのか

「多くのネットユーザーにとって気持ちの悪いことを述べたから」であるというふうに分析している。

ブログで書く内容で異なる意見の他人を説得できると思うか

H氏は以前ブログで、「自分は異なる価値観を提示しているんだから、その異なる価値観を同じ価値観に合わせろみたいな指摘は聞かない」ということを述べていたことから、異なる価値観の人を説得するという事はブログではしようと思っていないのかということ質問した。それに対しH氏は

そうですね、(自分みたいな)ちょっと変な人がいたっていいじゃないかと、決してその変な価値観を押し付けたいのではなくて、僕の立場は、ちょっと変わった人間が居ることを認めていただきたいと思ってます。そういう多様性が無くなってしまったら種の絶滅だと僕は思っていますから。

というふうに述べ、自分のような価値観を多様性の一つとして認めて欲しいというのが、自分がブログで主張していることだという風に述べている。

しかし実際にそういう風に認められるようになるかについてH氏は

認められないんだろうなというのは、もうすでに何か分かっちゃってるような気がするので、それについてはちょっとこう、なんかちょっと暗いような気がします

という風に述べ、悲観的な見通しをもっている。

ブログに書いている意見は本当に「自分の意見」なのかこの問いについてH氏は

ブログで書いてきたことやNHKの番組で発言したことは、今でもそう思ってるので、別にインターネットユーザーに気持ちのいいことを言ったつもりはないです

と述べ、全て本当の自分の意見であると述べている。

5.4.6 H氏のブログの経緯

ブログの開設(2007年3月~2008年8月)

H氏は2007年の3月からブログを始めている。それ以前にもmixiを使っていたことや、仕事で商用サイトを作っていたことはあったが、個人が何かしらの主張を表明するようなサイトはこれが最初だったと述べている。

しかし2008年8月ごろまでは一つの記事に対し数件のコメントが付くか付かないか程度だった。そしてそのコメントには、以前からH氏と交流があった人によるコメントも多かった。

月	A	B	C	D	E
2007年7月	1	3	0	0	0
2007年8月	1	1	0	0	0
2007年9月	7	4	0	0	1
2007年10月	0	0	0	0	0
2007年11月	1	1	0	0	0
2007年12月	2	0	0	0	0
2008年1月	0	0	0	0	0
2008年2月	0	0	0	0	0
2008年3月	0	0	0	0	0
2008年4月	0	0	0	0	0
2008年5月	1	0	0	0	0
2008年6月	2	0	0	0	0
2008年7月	1	0	0	2	0
2008年8月	5	4	0	1	0
2008年9月	8	10 6	2 3	5 4	2
2008年10月	1	2	0	1	0

2008年11月	0	0	0	0	0
2008年12月	2	2	0	0	0
2009年1月	3	24	1	1 0	0
2009年2月	1	11	0	3	0
2009年3月	1	2	0	1	0
2009年4月	8	5	0	1	0
2009年5月	1 1	7	0	3	1
2009年6月	3	62	4	4 3	4
2009年7月	4	22	0	1	0
2009年8月	5	8	1	0	0

表11 2007年3月~2008年8月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

「萌え」批判(2008年9月~2009年4月)

しかし、2008年の9月ごろ、あるお祭りでアニメの神輿が練り歩いたことをテーマにし、そのような作品を愛好するファンを批判したところ、批判的なコメントが殺到するという事が起きる。

その記事でH氏の言っていることを要約すると、アニメオタクとは元々、アニメを見ながらもそれに完全に満足するのではなく、自分の「作品がこうだったら良いのに」という欲望を持てることのできる「硬派なアニメオタク」のことだったが、現代では、このニュースで紹介される神輿を担いで盛り上がる人々のように受け身一辺倒の「萌えアニメオタク」が多くなっており、自分は後者のようなアニメオタクを蔑視しているし、そういうようなオタクたちが増えていくことを嘆いているという内容である(古谷 2008)。

しかしこのような記事に対して多くの批判コメントが寄せられた。この記事の最初の5件のコメントはこのようなものだった。

ほい 2008/09/08 20:22

ソース読みました？

>今年約2万人増となる約5万人が参加した。

であって、らきすたファンが5万人ではないですよ〜。

あとは

>全く新しい異質の集団

と書いてあるならば、従来の価値観での批判は無意味ではないでしょうか？

まあ、批判的な記事を書く前に、一度自分の頭を冷ましてから掲載してはいかがかと。

通りすがり 2008/09/08 20:53

うわああああ痛てええええ

現代日本の象徴(笑)

反商業主義(笑)

自分に酔うよりも先に、一度ハロワにでも行ってみることをおすすめします。

ガチで

ちょこらーた 2008/09/08 21:06

つまり、この中にらきすたの同人誌を書いている人がいれば無問題ということですね

昔々、サムライとルーパーの声優イベントで失禁した人がいたそうですが、彼女らの興奮

も

貴方の見方だと快感ファシストや恥祭りになりますね

当方30台ですが、私から見ても貴方の仰ってる事はジジイの繰言ですな

通りすがり 2008/09/08 21:17

ただの偏見です。

昔だって「親の金を食いつぶしてひたすら遊んでいる」ようなオタはいたでしょう。

今回のお祭りも、キャラや作品に惹かれて集まったファン達が共感して盛り上がる、という点で「力石の葬式」と同じ種に見えます。

今のありようを受け入れられないからと、あまり過去を美化するのは如何なものかと思えますよ。

せっこ 2008/09/08 21:53

同人だって昔っからあったし

アニメごときに美学だの語る時点で萌えとかより気持ち悪いと思いますわ

こういう、「俺は分かってるオタ」みたいな面しながらキモオタ叩きしても賛同してくれる方は少ないかと

思想だけなら個人の自由ですが、物事の批評をしようと思うのなら、その俺様ジャスティスな考え方を無制限に周りからの視線は冷たいままかと思えます

このようなコメントに対し H 氏はコメント欄でこのように返信している。

管理人 2008/09/08 23:51

みんなスゲーなあおい、管理人が押井守の事書いたら無反応なのに、らき☆すたになるとこれほどアクセスとコメントが増えるとは、まあいいんだけどね

>ほい

ふーん、じゃあ純増は2万人なんだ。にしても凄い数ですね
異質の集団は価値観を持ち得ないので旧来の価値観で語るしかないのです

>通りすがり

仕事してるからww

>ちょこらーた

同人誌書いてる人なんかいるのかな。居たら問題は無いよ、創作してるんだから。あんまり無いと思うけど。

あと、貴方何か勘違いしてるかもしれないけど、僕は25歳だよ。

>通りすがり

#2と同一人物ですか？違うか。力石の葬式と恥祭を一緒にしてもらったら大変困るんですが。寺山修司と恥祭では格もレベルも違うではないか…ちょっと無理がある。

>せっこ

「ごとき」とは感化出来ませんな。ごとき、とは、その「ごとき」程度のアニメ関連のブログを貴方は読ん丁寧にコメントまでしているわけですから。あと当ブログに賛同する人間が少ないかどうかは世論が決めることです。俺様ジャスティスで結構です。当ブログの方針は反萌え原理主義だからです。褒め言葉です。

この時の心境について H 氏は聞き取りで、自分のやっていることが「反権力」だと思ったということや、批判が来ることはある程度予想はしていたが、ここまで殺到するとは思わなかったということ語っている。

うーんまあ、やっぱりこんだけ風当たりが強いのがあるな、というのがありましたよね。らき☆すた(神輿の題材になったアニメ作品の名前)を叩くことが、反権力なんだなと思いましたがね(笑)批判が来ることはある程度予想はしてましたけれども、ここまで病的な人達がいるとは思わなかったですね。

しかしこのように批判が殺到しても、特に落ち込むということはなく、むしろそのようにコメントが殺到して盛り上がる、その盛り上がりによって自分のブログの知名度が上がるといふ、俗に言う「炎上マーケティング」(コメント欄に批判が殺到することは「炎上」と呼ばれており、そしてその炎上によって自分のブログの知名度を増やすことは「炎上マーケティング」と呼ばれている)ができた、そしてそれにより自分の意見に賛同する人も一部現れ、良かったのではないかと述べている。

(このようにコメントが殺到したことにより気持ちが凹んだのではないかという問いに対し)凹みというか、炎上マーケティングという言葉が今あるぐらいなので、しめたもんだぐらいには思いますがね。なんていうか、黙殺されるよりは、話題になるということは良いことですから。これをきっかけに、一人でも二人でもこの意見に賛同してくれるんだったら、まだアニメオタクも捨てたもんじゃないなと思って、いいんじゃないかと思いました。

ただ一方で H 氏は、このような盛り上がりよりも、この後の 2009 年の 5 月から始めたネットラジオが自分にとっては印象に残っていると語っている。

月	A	B	C	D	E
2008年9月	8	10 6	2 3	5 4	2
2008年10月	1	2	0	1	0
2008年11月	0	0	0	0	0
2008年12月	2	2	0	0	0
2009年1月	3	24	1	1	0

				0	
2009年2月	1	11	0	3	0
2009年3月	1	2	0	1	0
2009年4月	8	5	0	1	0

表12 2008年9月~2009年4月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

ネットラジオの開始(2009年4月~5月)

そしてH氏は、自分にとって転機となったのは、ブログのよりもネットラジオの方だったというふうに語り、ネットラジオによってブログの方のアクセス数も上昇していったと述べている。

ただやっぱりすごく転機になったのは、ニコニコアニメ夜話というラジオをやりだしてからで、そこからかなりブースターが付いたという感じです。

(略)

ニコニコアニメ夜話を見たからブログに来た人はそうとう居ると思います。

「ニコニコアニメ夜話」とはH氏が放送しているネットラジオの名前であり、一回ごとにアニメ作品を一つとりあげ、H氏がゲストを一人招きそのアニメ作品について評論を行うというものである。

ネットラジオをニコニコ動画で始めた時、どんなコメントが寄せられていたか、それについてどう思ったかということについて、最初は否定的なコメントが多かったが、やっていくうちに肯定的なコメントも多くなった。ただそもそもニコニコ動画においては、動画の上にコメントが表示されるが、一定数以上コメントが投稿されると古いコメントが消えてしまうために、そんなにコメントを読むことはできなかったと述べている。

割と最初は否定的な意見が多かったですね。何しゃべってんだ素人がみたいな感なコメントが多かったんですけども、10回20回やっていくと、寄せられるコメントは殆ど肯定的な意見になっていって、楽しみにされている方もいるようになって、非常にいいんじゃないかなと思いました。ただ後半になっていくにつれて投稿する頻度が増えていくようになると、反応をあまり読んでなかった部分もありましたね。ニコニコ動画のコメントって消えちゃいますからね。

そしてH氏の発言を裏付けるように、ネットラジオの再生数はたしかに徐々に上昇していき、そしてそれと並行してブログのコメント数やブックマーク件数も上昇している。

ただ一方でH氏は「100再生があるのと1万再生があるのでは大きく違うかもしれないが、8000再生が1万再生になったからといって特にそれによって気持ちの差は生まれない」という風に述べ、アクセス数の増減にそこまで神経質にはならなかったとも述べている。

月	A	B	C	D	E
2009年4月	8	5	0	1	0
2009年5月	1 1	7	0	3	1

表13 2009年4月~5月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

日付	タイトル	再生数	コメント数
2009/4/8	ニコニコアニメ夜話#1『クレヨンしんちゃんオトナ帝国の逆襲』	8329	391
2009/4/8	ニコニコアニメ夜話#2『天空の城ラピュタ』	3409	274
2009/5/12	ニコニコアニメ夜話#4『うる星やつら2ビューティフル・ドリーマー』	4299	108
2009/5/12	ニコニコアニメ夜話#5『平成狸合戦ぽんぽこ』	2158	28
2009/5/12	ニコニコアニメ夜話#6『時をかける少女』	4295	143
2009/5/12	ニコニコアニメ夜話#7『火垂るの墓』	2604	185
2009/8/6	ニコニコアニメ夜話#8夏の特別編『サマーウォーズ』	4909	213
2009/11/9	ニコニコアニメ夜話#9『王立宇宙軍オネアミスの翼』	5693	772
2009/11/9	ニコニコアニメ夜話#10『AKIRA』	6781	593

2010/1/16	ニコニコアニメ夜話#11『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY』	5779	748
2010/1/16	ニコニコアニメ夜話#12『もののけ姫』(前編)	10802	725
2010/1/16	ニコニコアニメ夜話#12『もののけ姫』(後編)	5747	560
2010/1/16	ニコニコアニメ夜話#13『東のエデン』	7627	484
2010/2/5	ニコニコアニメ夜話#14『崖の上のポニョ』	9324	1746
2010/2/12	ニコニコアニメ夜話#15『涼宮ハルヒの消失』	9061	1003
2010/2/20	ニコニコアニメ夜話#16『風の谷のナウシカ』	7983	1290
2010/2/22	ニコニコアニメ夜話#17『マイマイ新子と千年の魔法』	2069	195
2010/4/5	ニコニコアニメ夜話#18『東のエデン劇場版完結 SP』	3549	125
2010/4/5	ニコニコアニメ夜話#19『サマーウォーズ DVD&Blu-ray 発売記念 SP』	5843	332
2010/4/6	ニコニコアニメ夜話#20『紅の豚』	10010	717
2010/4/28	ニコニコアニメ夜話#21(特別編)『アニオタが語るアバター』	1903	122
2010/6/7	ニコニコアニメ夜話#22『攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX』(前編)	5876	478
2010/6/7	ニコニコアニメ夜話#22『攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX』(後編)	2423	104
2010/6/12	ニコニコアニメ夜話#23『攻殻機動隊 S.A.C. 2nd GIG』(前編)	4276	134
2010/6/13	ニコニコアニメ夜話#23『攻殻機動隊 S.A.C. 2nd GIG』(後編)	1833	48
2010/7/9	ニコニコアニメ夜話#24『耳をすませば』	4310	580
2010/7/28	ニコニコアニメ夜話#25『現代アニメ学原論』	4368	220
2010/7/28	ニコニコアニメ夜話#26『現代アニメ学原論 II』	814	81
2010/7/28	ニコニコアニメ夜話#27『WALL・E/ウォーリー』	451	31
2010/8/12	ニコニコアニメ夜話#28『ど〜なる?日本の漫画業界・第一部』特別編	5209	597
2010/8/12	ニコニコアニメ夜話#29『ど〜なる?日本の漫画業界・第二部』特別編	4080	276
2010/9/18	ニコニコアニメ夜話#30『秒速5センチメートル&新海誠特集』	2634	255
2010/9/18	ニコニコアニメ夜話#31『となりのトトロ』	4204	971
2011/1/17	ニコニコアニメ夜話#32, 公開収録 SP ~エヴァ世代が語るエヴァ~Part1/3	3477	177

2011/1/17	ニコニコアニメ夜話#32, 公開収録 SP ～エヴァ世代が語るエヴァ～Part2/3	1745	179
2011/1/17	ニコニコアニメ夜話#32, 公開収録 SP ～エヴァ世代が語るエヴァ～Part3/3	1224	64

表 14 アップロードされた動画のタイトル・再生数・コメント数

青少年健全育成条例改正問題(2009年6月～2010年7月)

一方ネットラジオと並行してH氏はブログ記事も書いており、そしてH氏は2009年の6月に東京都の青少年健全育成条例改正問題という、小説・マンガ・アニメ・ゲームといった創作物の表現を条例で規制するべきかという問題について、条例での規制に賛成の立場からブログに意見を書いている。

H氏は青少年健全育成条例改正問題について、現在の創作物の表現はあまりに行き過ぎており、このような表現が海外に渡れば日本という国家の品位・品格が損なわれるという立場から、規制に賛成の主張をとっていた。

しかしそれに対して数十件の批判コメントが寄せられるが、H氏は2010年の3月と12月にもこの話題を取り上げ、条例による規制に賛成の主張を行なっている

このような政治に関する話題を正面から取り上げること、この件以前のH氏のブログにはあまりなかったため、アニメについて評論記事を書くことと、このような政治問題について書くことで何か書き方などに違いはあるか尋ねた。それに対してH氏は、そんなに書き方は変えていないと思うが、政治的な主張に関することなので、より強い書き方になっているかもしれないというふうに述べている。

そうですね、あの一、ポルノというものと萌えというのは類似しているというのは今でも思ってますので、それを規制するっていうのは(自分にとって)一つの大きなテーマでしたから、そんなに書き方とかは変えてないと思います。まあ(書き方が)若干強くなっているかもしれないですけど。

やっぱり主張の部分ですから、アニメ批評っていうのは好き嫌いの部分もありますけれど、ポルノ規制というのは、政策として推進するべきという立場ですから、ちょっと強くなっちゃいますよね。

そして自分がこのような主張を行っていく中で出てくる批判などについては、事実の誤りなどについては聞くんもりはあるけれど、考え方が違うと思った時には特に相手にはしないと述べている。

(批判で受けた)指摘が、例えば統計とか、用語の誤りといった事実の部分であれば、それはこちらが間違っていたので、その場で修正すると思うんですけども、考え方の違いは、正しいものはありませんから、それは、無視するというか、それはそれぞれ人様の考えですね、へえっていう、ぐらいですね。異なる人を説得しようとかそういうものではない。

そして、そのような立場を自分がネット上で取る理由として、自分の役割はネット上で多様性を示すことであると捉えているからだ述べている。

やっぱり、私はブログの中でも述べていますが、萌えじゃないようなアニメがすごく好きなものですから、そういう、ちょっと変な人がいたっていいじゃないかということを示したいんです。決してその変な価値観を押し付けたいのではなくて、ちょっと変わった人間が居ることをちょっと認めていただきたいと。そういう多様性が無くなってしまったら種の絶滅だと僕は思っていますから。

ただ表現規制問題については、もうブログで書くことにはうんざりしているとも述べている。

月	A	B	C	D	E
2009年6月	3	62	4	4 3	4
2009年7月	4	22	0	1	0
2009年8月	5	8	1	0	0
2009年9月	3	14	0	4	0
2009年10月	3	14	0	0	0
2009年11月	8	31	1	3 4	7
2009年12月	4	22	3	2 4	21
2010年1月	8	11	0	0	0
2010年2月	1 0	40	0	3	14

2010年3月	4	29	4	$\frac{1}{7}$	12
2010年4月	8	7	0	0	0
2010年5月	2	13	1	0	0
2010年6月	7	8	0	1	0
2010年7月	$\frac{1}{0}$	37	4	$\frac{7}{2}$	$\frac{14}{6}$

表 15 2009年6月~2010年7月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

TV出演(2010年8月~12月)

そしてそのようなブログを書いていた時に、H氏はNHKが制作した、日本と韓国の関係について視聴者が参加して討論する番組に応募して出演し、そこで、韓国併合は韓国も望んでいたことだったと述べた発言が大きく話題になる。

H氏はそれまではあまり歴史認識の問題や、韓国・中国といった国に対してブログではあまり言及していなかったのだが、この番組について自分で紹介した記事には多くのコメントが集まり、そしてその内容の多くはH氏に同意し、H氏を称えるような内容だった。

ただ、萌え批判や条例の規制に賛成の立場を取っていた時はあれだけ批判されていたのに、歴史認識の問題について触れた時は自分の意見に対して賛成するコメントが多くなされた、そのギャップについて、H氏は「皮肉ですね」とブログ上で述べていた。そのコメントについて尋ねたところ、H氏は次のように述べている。

そうですね。それは非常に重いテーマです。その時にちょっと僕がどういう風にか書いたかはちゃんとは思い出せませんが、おそらく今もそういう書き方をすると思うんですよ。アニメの時には批判が多くて、在日韓国人について語るみたいな時は絶賛コメントが95対5ぐらいになる。そのころと180度変わるような感じは要するに、気持ちのいいことを書いたからですね。

(略)

自分の、(反萌えというような)いわゆる性癖とか、性的な趣向に対して、インターネット上の多くの人は気持ちが悪いから批判が多かった。ところが一方で、僕という人間は変わっていないのに、言ったことが気持ちのいいことになったら、多くの人が拍手喝采なりしたそれは皮肉ですね、非常に。

このようなネットの傾向についてH氏は、「自分でもどうすればいいのか悩んでいるところはあるが、しかし仕方がないことなんじゃないかと思っている」というふう述べている。

月	A	B	C	D	E
2010年8月	8	$\frac{16}{3}$	9	$\frac{5}{7}$	76
2010年9月	7	76	$\frac{1}{8}$	$\frac{3}{0}$	76
2010年10月	5	16	0	1	25
2010年11月	4	13	2	5	66
2010年12月	9	32	3	$\frac{1}{7}$	$\frac{37}{1}$

表 16 2010年8月~12月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

現在(2011年1月~)

上記の番組での出演以降、H氏は保守的な主張を展開する、「桜チャンネル」というインターネット放送局の番組に多くでたり、また歴史認識問題や領土問題に関するデモなどに参加し、そしてその参加レポートをブログに書くことが多くなっていった。そのような記事はtwitter上では多く言及されるが、コメントやソーシャルブックマークの数は少ないといえる。

これについてH氏は、ブログを更新する時間的な余裕がなくなっているということを理由の一つとして挙げている。ただH氏は、他の媒体で活躍していくことで、ブログに対するアクセスを集められるという側面もあるということ述べ、今後はブログについて、出版物では発表できないようなことを発表する自由な空間として使用したいと述べている。

月	A	B	C	D	E
2011年1月	$\frac{2}{3}$	19	0	0	43
2011年2月	$\frac{1}{5}$	17	1	$\frac{1}{5}$	70

2011年3月	0	0	0	0	0
2011年4月	10	22	0	2	44
2011年5月	7	28	1	0	33
2011年6月	6	7	1	0	8
2011年7月	2	3	1	0	1
2011年8月	4	4	0	0	27
2011年9月	0	0	0	0	0
2011年10月	6	18	0	7	72
2011年11月	1	6	0	0	3
2011年12月	5	12	0	5	40
2012年1月	10	12	0	1	22
2012年2月	11	2	0	0	7
2012年3月	1	4	0	1	19
2012年4月	1	0	1	0	72
2012年5月	0	0	0	0	0
2012年6月	1	3	0	0	9
2012年7月	11	3	0	4	8
2012年8月	1	4	0	0	47

表 17 2011年1月~2012年8月の記事数(A)・コメント数(B)・Trackback数(C)・はてなブックマークでのソーシャルブックマーク数(D)・twitterでの言及数(E)での言及数

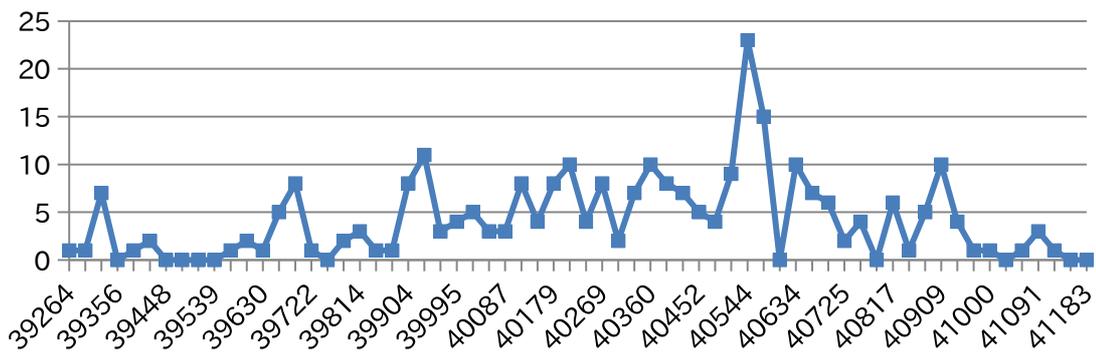


図 16 H氏のブログでの記事数

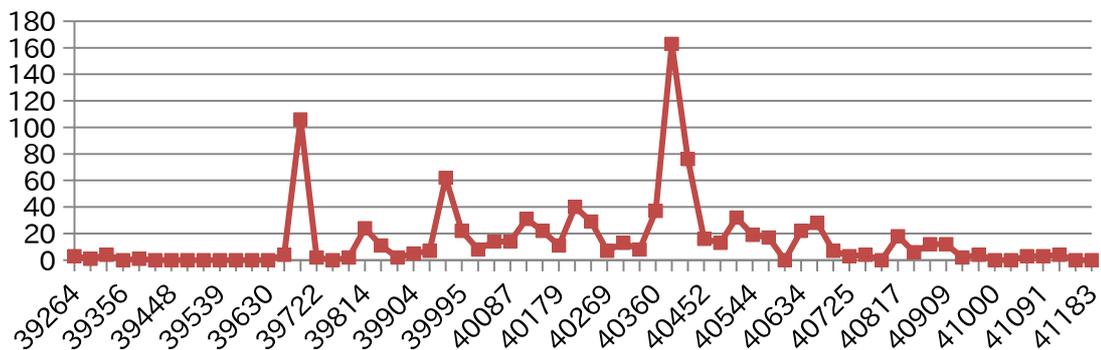


図 17 H氏のブログの記事へのコメント数

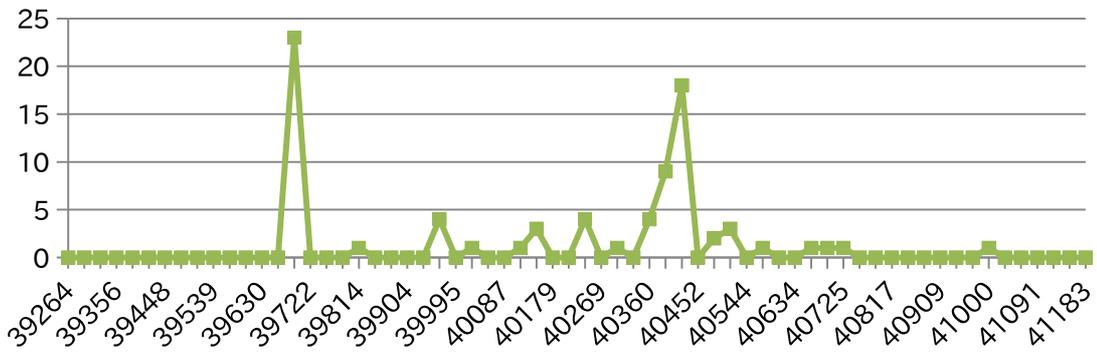


図 18 H氏のブログの記事へのTrackback数

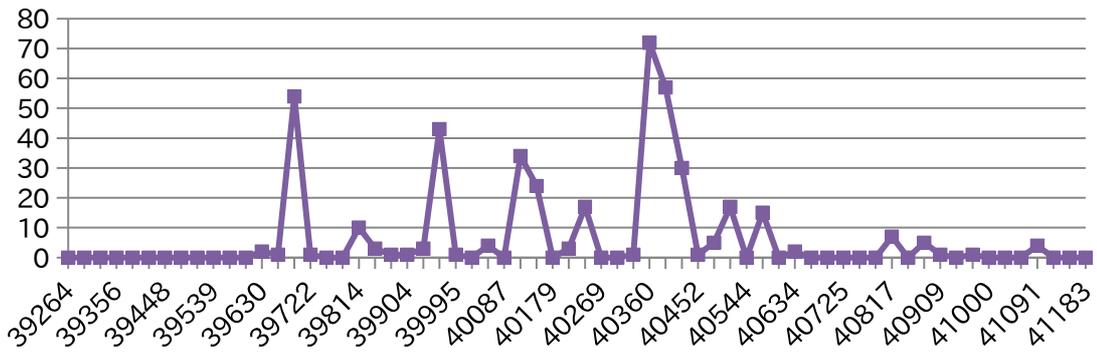


図 19 H氏のブログの記事へのソーシャルブックマーク数(はてなブックマークのみ)

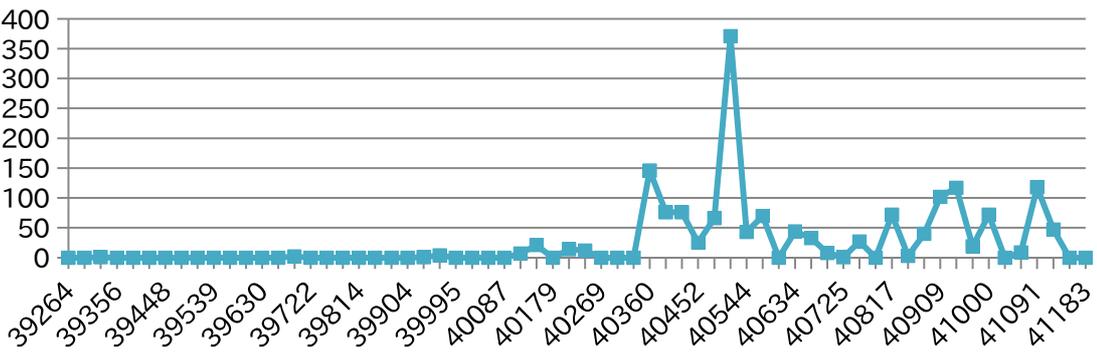


図 20 H氏の記事へのtwitterでの言及数

6 分析・考察

この章では、まず両者がいかにしてブログを通じてインターネット上でコミュニケーションし、そしてその過程でどのような意識の変化が生まれたか、そしてその意識の変化がブログ上でコミュニケーションをどのように変化させてきたかを分析する。そしてその上で、その分析の、どのような部分が先行研究を肯定し、逆にどのような部分が先行研究とは違ったかをまとめる。そしてその上で、両者のインターネット上でコミュニケーションに公共性は存在し得ていたか、存在し得ていたならそれはどのようなものだったか、逆に、存在し得ていなかったならそれはなぜ存在できなかったかを、2章で紹介した理論を参照しながら考察していく。

6.1 分析

6.1.1 T氏の分析

T氏は公開の場でブログを行なう前に、ミクシィでニュースについて言及する日記を書いていた。そしてそこで様々なユーザーから自分の記事を褒められたことが嬉しく、公開の場でブログを行うきっかけの一つとなったと述べている。

ただ、口蹄疫についての記事は、T氏の聞き取りにおいて説明された記事内容を聞く限りでは、特に目新しい話というわけではなく、当時2ちゃんねるやニコニコ動画といった場所によく宣伝されていたマスコミ批判を、繰り返しているだけの内容にすぎない。T氏は、それを東国原知事が辞任した時に蒸し返したことにより、ニュースから記事をクリックした人が感心するような内容となったと主張しているが、逆に言えば、その記事を公開した時期以外に、その記事が特異なものである点はなく、記事が伝える内容、そして記事が取るスタンス共に、いわゆる「ネット右翼」的な人々の間では常識的なものであった。逆に言えば、そのような内容だからこそ、同じネット右翼と呼ばれるような人たちから褒められる内容になったということができる。

そして、ブログを始めてから、2011年の9月頃までは、常連から称賛のコメントを受けることはあっても、そのような限定された集団の外に対しブログの記事が伝わるということにはなかった。この要因としては、T氏が「マス・メディアが報じない情報をみんなに知らせる」というスタンスでブログを書いていたため、ごくりふれたネット右翼的な主張を垂れ流すブログとなり、限定された集団の外に注目されるような要素がなかったことが挙げられるだろう。東日本大震災の被災地や反フジテレビデモ取材にいった記事も、特に目新しい視点によって書かれた内容ではなかったために、あまり注目を集めなかった。

そのような状況が変わるのは、T氏が自ら『知る』から『解釈する』方が重要になった」と述べ、ニュース記事や、2011年10月頃からである。コメント数・ソーシャルブックマーク数・twitterでの言及数を見ても、その頃から数が急上昇していることが見て取れる。

ただ、それに伴いT氏のブログには、それまで殆ど見られなかった批判的なコメントや言及が殺到するようになる。この要因としては、やはり評論というものの性質があげられる。何か事実を提示するような記事に比べ、何かについての評価を示すような記事は、他人の評価と直接衝突する。世間で既によく知られていることについての評論ならば尚更である。

しかしT氏はこのような批判が殺到することより、深く落ち込んだと述べている。そしてT氏は、そのような批判が殺到するのは、自分という存在がよく知られていないからであると考え、よく知られていることへの評論ではなく、自分自身について記述するようになる。しかし実際のところ、T氏がどのような人間であるかというようなことは、人々にとってはほぼどうでもいいことであるがため、T氏のブログは、再び注目されないようになったと、推測される。

6.1.2 H氏の分析

H氏は、「自分の趣味を世の中に出したい」という動機からブログを始めている。H氏はこのブログ以前にも、大学で文芸サークルに入るなど、元々自分の考えを文章で発表することが好きであり、また、小学校の頃から趣味を発端として歴史問題に興味を持ち、その関心から事件する学部は史学科を選ぶなど、自分の確固たる思想を、インターネットを利用し始める前から持っていた。

そして、おそらくそのような自己の経験にもとづき、H氏はインターネット上の議論によって人々の考え方を変えることは出来ないと考えている。考え方や価値観は人々が既にアприオリに持っているものであり、議論に参加することによって変わるようなものではないという考え方なのである。

そのような考え方を持つがゆえ、H氏は自分のブログに批判的なコメントや言及が殺到してもほとんど動じず、落ち込んでブログで執筆する内容を変えたりするようなことはしない。

H氏は、反フジテレビデモに参加したり、歴史認識において保守的な考え方を持ったりするなど、右派的な主張を持っている。ただ、H氏のブログの内容は、特にテレビ出演を行う前はそのような右派的な政治主張を述べる場ではなく、「アニオタ保守」という独自の立場から、アニメ作品などに評論を行うものだった。このように政治的な主張ではなく、アニメ評論の分野で「保守」を自称し評論を行うというのは、ネット右翼の中でもそんなに見られるものではなく、アニメ評論という分野においては、周りに同調しない独自性を示していたということができる。

ただ一方で、そのような独自性は、表現規制など、ちょうど文化の問題と政治の問題の境目にあるような問題についての議論では、ほぼ注目されなくなる。H氏の表現規制を肯定する論法は、インターネット上でそのような主張をすることはある程度特異かもしれないが、しかし社会全体で見ればそれほど特異なものではなく、むしろ当人も認めるように「常識的」とあるといえるだろう。ただそもそも、H氏の表現規制に対する記事への批判は、殆どがそのH氏の論法が間違っていると主張するというよりは、結果としてH氏が表現規制を肯定していることを批判するものであった。これはやはり、表現規制という問題が政治の問題であるということに起因するものだろう。文化に対する評論の場合、別にその文化を好きな人の多少により、自分の好き嫌いが変化するわけではないため、結論として肯定的評価を下すか否定的評価を下すかはそれほど重要とはされず、どのような論法によりその評価が下されているかが、評価の結論と同じくらい重要視される。ところが、政治的主張、とくに今回の表現規制に関わる問題のように、その規制が万人に適用される場合、表現規制が政策として推し進められれば、自分はそれに同意していなくても、表現規制により影響を受けざるを得

なくなる。そのため、政治的主張においては論拠よりもその結論が重視され、そして結論においては、H氏の議論は「表現規制を肯定する」という、それほど特異ではない主張の部分が重要視されるのである。そのことはH氏も分かっているため、H氏はより書き方を強くし、結論部を強調する書き方にしていると述べている。

しかしその一方で、H氏はその結論を強調することを無意味だとも思っている。先にも述べた通り、H氏は、価値観や考え方は既に個々人が持っているものであり、議論で変更できるようなものではないという考え方である。しかし政治的な主張というのは、その主張でもって、少しでもその主張への賛成を増やし反対派を減らすことを目的とする。そこでH氏は、政治的な主張をブログで書く時、自分はそんなことやっても無駄だと分かっているにも関わらず、政治的主張はそのようなものでなくてはならないために、他人を説得することが目的であるかのような書き方を強いられる。このことはひたすら徒労感を生み出すが故に、H氏は「表現規制についての記事はもう書かない」という結論に至ったのではないかと、推測される。

H氏が、保守的な主張を確固として持っているにもかかわらず、その主張をブログではあまり論述しないのは、そのような形で、政治的主張をインターネット上で表現することに虚しさを感じているからであると、分析することができるだろう。

6.2 考察

以上の分析を含ませて、まずは3章の先行研究と今回のケースがどの程度共通するかを考察する

6.2.1 不安による右傾化

T氏・H氏共に、特に自分の主張の根拠として、不安というようなことを述べることはなかった。よって直接的には、自らの雇用や将来に対する不安が、ブログなどで反マス・メディアというような主張を述べるようになった理由であるということは出来ないだろう。

一方で、T氏とH氏共に、大学卒業後、不安定な雇用条件にいることも事実である。ただ、少なくとも今回の調査では、そのような状況と彼らの主張との関係は明示されなかった

6.2.2 繋がりの社会性

「同じ主張を持っている者同士でコミュニケーションをすることに安心感を得る」という繋がりの社会性は、T氏・H氏両者の聞き取りから確認された。T氏は、まさしくミクシィなどで「イネ!」とってもらえることが嬉しかったと述べているし、H氏もまた、インターネットを通じて自分と同じ意見を持つ人がいることが分かったことが安心感につながったと述べている。

ただ、T氏・H氏共に、ブログではそのような繋がりの社会性を重視せず、空気に反するようなブログを書くことによって、炎上を経験していることもまた事実である。ただT氏は、自らの主張が「万人が心のなかでは思っていること」であると述べ、単純に空気を読み違えただけといえる。一方H氏は、自らの価値観を信奉するがゆえに、同調的なコミュニケーションを敢えて排したという点で、強固な価値観を持つかどうか、繋がりの社会性を受け入れるか突っぱねるかの分水嶺となっていることが考察される。

6.2.3 過剰な可視化

インターネット上ではコミュニケーションが可視化されているが故に、応答することへの強迫が生まれてしまうという事は、T氏においては明白に観察された。T氏においては、炎上することが極めて心理的に負担となったことが語られ、そしてそのようなものに対しての応答は、「自己」をきちんと理解してもらうことであると考え、自己に関する記述をブログに何度も書いてしまうというのは、まさしく、インターネットにおけるコミュニケーションの可視化が、「きちんと自己を理解してもらえれば批判されないようになるはず」という思い込みを産んでしまっているという点で、過剰な可視化について議論に当てはまるといえる。

ただその一方でH氏においては、少なくとも聞き取りにおいては、炎上が起きることは特に心理的負担にはなっていないとしている。

6.3 公共性について

次に、それぞれのブログでのコミュニケーションが公共性を持ち得ていたかについて考察する。

両者のブログでは、少なくとも吉田が掲示板でのコミュニケーションで観察し得たような、討議のような市民的公共性は観察し得なかった。T氏・H氏両者とも、他者の意見を聞くことによって自分の意見を変更するというようなことはなかった。

では、濱野の言うアーキテクチャによる公共性はあったか。これについては、T氏のブログにおいては瞬間的に見出すことができ、H氏のブログにおいては限定的に見出すことが出来たが、しかし恒常的・全般的なものとなることはなかったといえる。

まずT氏についてだが、T氏が評論を書き始め、それに注目が集まり様々な反応が巻き起こる、その瞬間においては多様な意見が存在し得ていたといえる。だが、そのような状況はT氏に過剰な負荷をかけるものであったが故に、T氏はそのような公共性から撤退せざるを得なくなった。

次にH氏について、H氏がアニメ評論を行っている時には、その評論を巡る議論はまさしく「アーキテクチャによる公共性」が存在し得ていたといえる。H氏は別に他者を議論によって説得しようと思っただけではなく、自らと同じ意見をもつ者と繋がりたいと考え文章を書いていたにもかかわらず、結果として特異なアニメに関する見方を提示していた。

だが、H氏が政治的主張を行うようになると、途端にそのようなアーキテクチャによる公共性は役割を果たさなくなった。特異な主張により、政治的議論に多様性をもたらすのではなく、ただ政治的対立を激化させることになっていったといえる。

7 結論

6章の考察で述べた通り、本論が対象とした事例においては、アーキテクチャによる公共性は、限定的にしか通用しなかった。また、サイバー・カスケードといったアーキテクチャによる分裂により、対立が激化し、異なる意見との対話が行われなくなるという様子も、T氏・H氏両者において観察された。つまり、Sunstein や Pariser の述べていたような、アーキテクチャによる分裂は、少なくともこの事例においては支持されていたといえる。

ただ一方で、この事例研究はあくまでインターネットのごく一部の事例について分析・考察したものであるにすぎない。アーキテクチャによる公共性やアーキテクチャによる分裂について、インターネット一般に適用出来るような結論を出すためには、より多様な事例について実証的に検証を行なっていく必要があるといえるだろう。

謝辞

本論執筆に際し、熱心なご指導を頂いた成田教授、また、お忙しい中インタビューにご協力いただいた、TM2501 様、古谷様、そして、その他ゼミなどで指摘を頂いた様々な先生、先輩、後輩、同期の方々それぞれに、深く感謝いたします。

[注]

- 1) 1990年に設立された、インターネット上での言論の自由・プライバシー権・消費者の権利を守るためのNPO。(Electronic Frontier Foundation 2012)
- 2) ブログやSNSといったウェブサービス群のことを表した造語。数十・数百万以上のユーザーを集めている「社会的」なソフトウェアであるとして、濱野はソーシャルウェアと呼んでいる(濱野 2008a: 13-4)
- 3) ソーシャルブックマークのこと。詳しくは後述
- 4) インターネット上の情報のうち、ある単語を含むページをリストアップする際に、どのような順番でリストアップするかを、そのページが何件他のページからリンクされているかによって順番=価値を決める(リンクが多いほうが順番は上)アーキテクチャ。従来の事前にページを人が登録してリストアップするものは、リストアップするサイトがその権威によって順番を決める形だったが、Googleはそのような人為性をなくしアーキテクチャにより順番を決めるようにしたため、日々増えていくインターネット上のページの殆どを的確に順序付けすることが可能になり、多くのユーザーを集めた(濱野 2008b: 38-45)。
- 5) Consumer Generated Media。消費者がコンテンツ作成に参加するような形態のメディアを指す。具体例としては二次創作など。
- 6) Social Networking Service の略称。個人間のコミュニケーションを促進し、社会的なネットワークの構築を支援するインターネットを利用したサービスのこと。
- 7) 青少年健全育成条例改正問題、条例において「年齢又は服装,所持品,学年,背景その他の人の年齢を想起させる事項の表示又は音声による描写から18歳未満として表現されていると認識されるもの」を規制しようとしたことから、そのように呼ばれる。
- 8) ガラパゴス諸島における独自の進化をとげた生体のように、技術やサービスなどが日本市場で独自の方向性へ進化し、世界標準から掛け離れてしまう現象。

[文献]

- 赤木智弘, 2007, 『若者を見殺しにする国——私を戦争に向かわせるものは何か』双風舎.
- Anderson, Benedict, [1983]2006, *Imagined Community*, Verso. (= 2007, 白石隆・白石さや訳『定本想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.)
- 浅野智彦, 2011, 『若者の気分——趣味縁から始まる社会参加』岩波書店.
- 東浩紀, 2010, 「解説」津田大介『Twitter 社会論』洋泉社, 165-73.
- 東浩紀・北田暁大・西田亮介・濱野智史, 2008, 「[座談会] ソシオフィジクスは可能か」東浩紀・北田暁大編『思想地図 vol.2——特集・ジェネレーション』日本放送出版協会, 274-310.
- Barlow, John, 1996, “A Declaration of the Independence of Cyberspace” Barlow Home(stead)Page, (Retrieved October 28, 2012, <https://projects.eff.org/~barlow/Declaration-Final.html>).
- ばるばる, 2005, 『教科書には載らないニッポンのインターネットの歴史教科書』翔泳社.
- Castells, Manuel, 1992, “The Space of Flows, Elements for a Theory of the New Urbanism in the Informational Society”, Keynote paper at the Princeton University Conference on the New Urbanism, November. (= 大澤善信訳, 1999 『社会学の思想② 都市・情報・グローバル経済』青木書店.)
- , 2001, *The Internet Galaxy: Reflections Internet Business*, Oxford University Press. (= 2009, 矢澤修次郎・小山花子訳『インターネットの銀河系——ネット時代のビジネスと社会』東信堂.)
- Crossley, Nick, 2002, *Making Sense of Social Movements*, Open University Press UK Limited. (= 西原和久・郭基煥・阿部純一郎訳, 2009 『社会運動とはなにか——理論の源流から反グローバリズム運動まで』新泉社.)
- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房.
- , 2009, 『キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』岩波書店.
- Durkheim, Emile, 1912, *Les Formes elementaires de la Vie religieuse, Le Systeme totemique en Australie*, Paris. (= 1975, 古野清人訳『宗教生活の原初形態』岩波書店.)
- Electronic Frontier Foundation. 2012, “Electronic Frontier Foundation | Defending your rights in the digital world”, “” Electronic Frontier Foundation, San Francisco, CA: Electronic Frontier Foundation, (Retrieved December 8, 2012, <http://www.eff.org/>)
- 遠藤薫編著, 2004, 『インターネットと“世論”形成——間メディア的言説の連鎖と抗争』東京電機大学出版局.
- facebook, 2012, 「Facebook」, (2012年11月16日取得, <http://www.facebook.com/>).
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford Univ Pr. (= 2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- , 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism*, Polity Press. (= 1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』而立書房.)
- Glassner, Barry, 1999 *The Culture of Fear*, Basic Books. (= 2004, 松本薫訳『アメリカは恐怖に踊る』草思社.)
- 後藤和智, 2008, 『おまえが若者を語るな!』角川書店.
- Habermas, Jürgen, 1962, *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Polity. (= 1973, 細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換』未来社.)
- 濱野智史, 2008a, 『アーキテクチャの生態系—情報環境はいかに設計されてきたか』NTT出版.
- , 2008b, 「なぜKは『2ちゃんねる』ではなく『Mega-View』に書き込んだのか?」大澤真幸編『アキハバラ発——〈00年代〉への問い』岩波書店, 164-85.
- , 2008c, 「ニコニコ動画の生成力——メタデータが可能にする新たな創造性」東浩紀・北田暁大編『思想地図 vol.2——特集・ジェネレーション』日本放送出版協会, 313-54.
- , 2012, 「情報化——日本社会は情報化の夢をみるか」小熊英二編『平成史』河出書房新社, 362-95.
- , 2007, 「繋がり社会性は公共性の敵か?」『10+1』INAX 出版, 47: 362-95.
- , 2006, 「韓国でグーグル(Google)が存在していないのはなぜか?」, Glocom, (2012年11月16日取得, http://www.glocom.ac.jp/j/publications/journal_archive/2007/01/21google.html).
- はてな, 2012, 「はてなブックマーク」, はてな, (2012年11月16日取得, <http://b.hatena.ne.jp/>).
- Harvey, David, 2005, *Species of Neoliberalization*, Wiley-Blackwell. (= 2007, 本橋哲也訳『ネオリベラリズムとは何か』青土社.)

- 速水健朗,2008,『自分探しが止まらない』ソフトバンククリエイティブ.
——,2011,『ラーメンと愛国』講談社.
- 堀江宗正,2011,『スピリチュアリティのゆくえ』岩波書店.
- 藤本一勇,2006,『批判感覚の再生—ポストモダン保守の呪縛に抗して』白澤社.
- 福嶋亮大,2010,『神話が考える—ネットワーク社会の文化論』青土社.
- 古市憲寿,2011,『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.
- 古市憲寿・本田由紀,2010,『希望難民ご一行様—ピースボートと「承認の共同体」幻想』
光文社.
- 古谷経衡,2012a,『フジテレビデモに行ってみた!』青林堂.
——,2012b,『韓流,テレビ,ステマした』青林堂.
——,2011,「若き保守主義者よ「My 日本」に結集せよ!」『JAPANSIM』青林堂,5: 175-
9.
——,2012c,「学校教育では教えないリアル」『JAPANSIM』青林堂,8: 175-9.
——,2012d,「アニオタ保守本流」,アニオタ保守本流,(2012年11月16日
取得,<http://d.hatena.ne.jp/aniotahosyu/>).
——,2008,「日本アニメ界の終焉,らき☆すた土師祭~自分を客観視できない人々~,ア
ニオタ保守本流,(2012年11月16日
取得,<http://d.hatena.ne.jp/aniotahosyu/20080908/1220834741>).
- 五十嵐泰正,2000,『「外人」カテゴリーを巡る4類型—職場の人種間関係の事例調査から』
『社会学評論』201: 54-70.
- 伊藤昌亮,2011,『フラッシュモブズ—儀礼と運動の交わる場所』NTT 出版.
- 岩崎稔・シュテフィ=リヒター,2005,「歴史修正主義—1990年代以降の位相」倉沢愛子・
杉原達・成田龍一・テッサ=モーリス=スズキ・油井大三郎・吉田裕編『なぜ,いまアジア・
太平洋戦争か(岩波講座 アジア・太平洋戦争1)』岩波書店.
- 檜村愛子,2007,『ネオリベラリズムの精神分析—なぜ伝統や文化が求められるのか』光文
社.
- 香山リカ,2002,『ぶちナショナリズム症候群—若者たちのニッポン主義』中央公論新社.
- 萱野稔人,2011,「あえて左翼とナショナリズムを擁護する?」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野
智彦編『若者の現在—政治』日本図書センター,181-201.
- 北田暁大,2004,『〈意味〉への抗い—メディアエーションの文化政治学』せりか書房.
——,2005,『嗤う日本の「ナショナリズム」』日本放送出版協会.
- 北田暁大・宮台真司,2005,『限界の思考』双風舎.
- 金相集,2003,「間メディア性とメディア公共圏の変化」『社会学評論』54(2): 175-91.
- 小林よしのり,1998,『戦争論』幻冬舎.
- 近藤瑠漫・谷崎晃・桜井春彦,2007,『ネット右翼とサブカル民主主義』三一書房.
- 栗原彬,2011,「21世紀の『やさしさのゆくえ』」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若
者の現在—政治』日本図書センター,205-48.
- Lippmann, Walter, 1922, *Public Opinion*, Harcourt. (= 1987, 掛川トミ子訳『世論』岩
波書店.)
- Luhman, Niklas, 1996, *Die Realitat der Massenmedium*, Westdeutscher. (= 2005,
林香里訳『マスメディアのリアリティ』木鐸社.)
- 毎日新聞社取材班,2007,『ネット君臨』毎日新聞社.
- 松谷満・高木竜輔・丸山 真央・樋口直人,2006,「日本版極右はいかにして受容されるのか--
石原慎太郎・東京都知事の支持基盤をめぐって」『アジア太平洋レビュー』3(1): 39-52.
- Michael, Hardt and Antonio, Negri, 2004, *Multitude: War and Democracy in the
Age of Empire*, Penguin Press. (= 2005, 幾島幸子訳『マルチチュード—〈帝国〉時
代の戦争と民主主義』NHK 出版.)
- ミクシィ, 2012, 「[mixi] ニュース」, mixi, (2012年11月16日取得,
http://news.mixi.jp/list_news.pl).
- 桃井四六,2008,「インタビュー:稲垣大紀 僕が体験したネット論争」別冊宝島編集部『ネッ
ト右翼ってどんなヤツ?』宝島社,34-9.
- 毛利嘉孝,2009,『ストリートの思想—転換期としての1990年代』日本放送出版協会.
- 村井純,1995,『インターネット』岩波書店.
- 仲正昌樹,2006,『集中講義!日本の現代思想—ポストモダンとは何だったのか』日本放送
出版協会.
- 中西新太郎,2011a,『シャカイ系の想像力』岩波書店.
——,2011b,「アンダークラスでも国民でもなく—若者の政治的身体」小谷敏・土井隆
義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在—政治』日本図書センター,399-441.
- 西垣通,1999,『こころの情報学』筑摩書房.
——,2009,『ネットとリアルのあいだ—生きるための情報学』筑摩書房.
- ニワンゴ,2012,「カテゴリ合算 24時間 総合ランキング - ニコニコ動画(原宿)」,ニコニコ動画,
(2012年11月16日取得,<http://www.nicovideo.jp/ranking/>).
- 野宮大志郎編,2002,『社会運動と文化』ミネルヴァ書房.
- 荻上チキ,2007,『ウェブ炎上—ネット群集の暴走と可能性』筑摩書房.
- 小熊英二,1995,『単一民族神話の起源—「日本人」の自画像の系譜』新曜社.
——,1998,『「日本人」の境界—沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動ま

- で』新曜社。
 ———, 2002, 『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社。
 ———, 2012, 『社会を変えるには』講談社。
 小熊英二・上野陽子, 2003, 『〈癒し〉のナショナリズム——草の根保守運動の実証研究』慶應義塾大学出版会。
 大畑裕嗣・道場親信・樋口直人・成元哲編, 2004 『社会運動の社会学』有斐閣。
 大澤真幸, 2008, 『不可能性の時代』岩波書店。
 大月隆寛, 2005, 「ネット世論と「嫌韓」の歴史」別冊宝島編集部『マンガ嫌韓流の真実!』宝島社, 30-4。
 Pariser, Eli, 2011, *THE FILTER BUBBLE: What the Internet Is Hiding from You*, Viking. (=2012, 井口耕二訳『閉じこもるインターネット』早川書房。)
 楽天株式会社, 2012, 「楽天 Social News - ソーシャルニュース: どこよりも早く新しいニュースを」, 楽天 Social News, (2012年11月16日取得, <http://socialnews.rakuten.co.jp/>)。
 Rheingold, Howard, 1994, *The Virtual Community: Surfing the Internet*, Martin Secker & Warburg Ltd. (=1995, 会津泉『バーチャル・コミュニティ——コンピューター・ネットワークが創る新しい社会』三田出版会。)
 齋藤純一, 2000, 『思考のフロンティア——公共性』岩波書店。
 桜井誠, 2009, 『反日韓国人撃退マニュアル』晋遊舎。
 佐藤俊樹, 1996, 『ノイマンの夢・近代の欲望——情報化社会を解体する』講談社。
 島蘭進, 2007, 『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』岩波書店。
 Smelser, Neil, 1962, *Theory of Collective Behavior*, Routledge & Kegan Paul. (=1973, 会田彰・木原孝訳『集合行動の理論』誠信書房。)
 曾良中清司編, 2004, 『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂。
 総務省, 2012, 『平成24年版情報通信白書』。
 菅原琢, 2009, 『世論の曲解』光文社。
 Sunstein, Cass, 2001, *Republic.Com*, Princeton Univ Dept of Art. (=2003, 石川幸憲訳『インターネットは民主主義の敵か』毎日新聞社。)
 ———, 2000, *Deliberative Trouble? Why Groups Go To Extremes*, Yale Law Journal. (=2012, 那須耕介監訳『熟議が壊れる時——民主制と憲法解釈の統治理論』勁草書房。)
 鈴木謙介, 2005, 『カーニヴァル化する社会』講談社。
 ———, 2007, 『ウェブ世界の思想』日本放送出版協会。
 ———, 2008, 『サブカル・ニッポンの新自由主義——既得権批判が若者を追い込む』筑摩書房。
 高原基彰, 2006, 『不安型ナショナリズムの時代』洋泉社。
 ———, 2011, 「『若者の右傾化』論の背景と新しいナショナリズム論」. 小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在—政治』日本図書センター, 159-80。
 高野泰, 2007, 「『サイバースペース独立宣言』10周年+α: アメリカ起源のネット文化とその行方」, 『研究紀要』東京成徳大学, 14: 77-94
 武田徹, 2011, 『私たちはこうして「原発大国」を選んだ——増補版「核」論』中央公論新社。
 Tarrow, Sidney, 1998, *Power in Movement: Social Movement and Contentious Politics*, Cambridge University Press. (=2006, 大畑裕嗣訳『社会運動の力——集合行為の比較社会学』彩流社。)
 テッサ・モーリス・スズキ/田代泰子, 2004, 『過去は死なない メディア・記憶・歴史』岩波書店。
 Thompson, John, 1994, “Social Theory and the Media.” David, Crowley and David, Mitchell eds., *Communication Theory Today*, Stanford University Press。
 Topsy Labs, Inc., 2012, 「Topsy - Instant social insight」, Topsy, (2012年11月16日取得, <http://topsy.com/?locale=ja>)。
 TM2501, 2007, 「本とかアニメとか映画とかを気の向くまま紹介していくブログです。」, とある青二才の斜方前進, (2012年11月16日取得, <http://d.hatena.ne.jp/TM2501/20100731/1280534098>)。
 ———, 2012, 「とある青二才の斜方前進」, とある青二才の斜方前進, (2012年11月16日取得, <http://d.hatena.ne.jp/TM2501/>)。
 ———, 2011a, 「『友人の名言』と『私の夢の話』」, とある青二才の斜方前進, 2011年2月7日, (2012年11月16日取得, <http://d.hatena.ne.jp/TM2501/20110207/1297047390>)。
 ———, 2011b, 「尊敬の対象であり, オリジナルでもある父」, とある青二才の斜方前進, 2011年6月18日, (2012年11月16日取得, <http://d.hatena.ne.jp/TM2501/20110618/1308370198>)。
 ———, 2011c, 「王を笑え!~馬鹿だらけの時代のメディアリテラシー論~」, とある青二才の斜方前進, 2011年9月21日, (2012年11月16日取得, <http://d.hatena.ne.jp/TM2501/20110921/1316571350>)。
 鳥谷昌幸, 2004, 「言説としての政治家——『田中康夫』を事例として」, 伊藤守編『テレビニュースの社会学——マルチモダリティ分析の実践』世界思想社。

津田大介, 2012『動員の革命——ソーシャルメディアは何を変えたのか』中央公論新社.
Touraine, Alan, 1978, *La voix et le regard: Sociologie Permanente*, Seuil. (= 1983, 梶田孝道訳『声とまなざし——社会運動と社会学』新泉社.)
辻大介, 2008, 「インターネットにおける『右傾化』現象に関する実証研究」, 辻大介の研究室, (2012年6月29日取得, <http://www.d-tsuji.com/paper/r04/index.htm>).
辻大介・藤田智博, 2011, 「『ネット右翼』的なるものの虚実——調査データからの実証的検討」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在—政治』日本図書センター, 131-57.
上杉隆, 2010『なぜツイッターでつぶやくと日本が変わるのか』晋遊舎.
宇野常寛・濱野智史, 2012『希望論——2010年代の文化と社会』日本放送出版協会.
山口定・高橋進編, 1998, 『ヨーロッパ新右翼』朝日新聞社.
山野車輪, 2005, 『マンガ嫌韓流』晋遊舎.
山下清美・川浦康至・川上善郎・三浦麻子, 2005, 『ウェブログの心理学』NTT 出版.
安田浩一, 2012, 『ネットと愛国』講談社.
吉田純, 2000, 『インターネット空間の社会学——情報ネットワーク社会と公共圏』世界思想社.

二〇一二年度修士論文

インターネットに“公共性”は芽生えるか——「ネット右翼」ブログの事例研究から

小杉太一郎

1 1990年に設立された、インターネット上での言論の自由・プライバシー権・消費者の権利を守るためのNPO。(Electronic Frontier Foundation 2012)

2 ブログやSNSといったウェブサービス群のことを表した造語。数十・数百万以上のユーザーを集めている「社会的」なソフトウェアであるとして、濱野はソーシャルウェアと呼んでいる(濱野 2008a: 13-4)

3 ソーシャルブックマークのこと。詳しくは後述

4 インターネット上の情報のうち、ある単語を含むページをリストアップする際に、どのような順番でリストアップするかを、そのページが何件他のページからリンクされているかによって順番=価値を決める(リンクが多いほうが順番は上)アーキテクチャ。従来の事前にページを人が登録してリストアップするものは、リストアップするサイトがその権威によって順番を決める形だったが、Googleはそのような人為性をなくしアーキテクチャにより順番を決めるようにしたため、日々増えていくインターネット上のページの殆どを的確に順序付けすることが可能になり、多くのユーザーを集めた(濱野 2008b: 38-45)。

5 Social Networking Serviceの略称。個人間のコミュニケーションを促進し、社会的なネットワークの構築を支援するインターネットを利用したサービスのこと。

6 青少年健全育成条例改正問題、条例において「年齢又は服装、所持品、学年、背景その他の人の年齢を想起させる事項の表示又は音声による描写から18歳未満として表現されていると認識されるもの」を規制しようとしたことから、そのように呼ばれる。